

年報

平成 22 年度



Oita University of Nursing and Health Sciences
公立大学法人大分県立看護科学大学

年報の発刊によせて

年報の発刊の時期を迎えるたびに、今年も1年が駆け足で過ぎてしまったとの思いに駆られます。

一人ひとりの教員、組織としての大学の自己点検・評価の一環として平成10年の開学以来、欠かすことなく年報を発刊してまいりましたが、10年以上経過した現在では、1年に1回の年報発刊のための作業をまとめて行うのではなく、一つひとつのイベント終了毎に、関係者がそれぞれ入力し、その都度自己点検・自己評価に結びつくようにまで進化しました。

今年は、本学では学校教育法に基づく、2回目の機関別認証評価を、大学評価・学位授与機構により受けました。各基準とも大変高い評価をいただき、本学の大学運営は、「毎日がFDであり」、「学生の元気が大学の元気を現している」とのうれしい評価もいただきました。

高校生にとって、大学は各自の将来の生き方を決める大切なゲートです。看護学（大学院は、看護学専攻と健康科学専攻）の単科大学であることを堅持してきた本学では、入学してきた学生が、「看護を将来の仕事として選択してよかった」また、多くの看護系大学がある中で、「本学を選択してよかった」と心から思えるような「看護学教育」のモデル大学となる教育環境を整えることを目標に教育研究にあたってきました。どのような教育環境で教育を受けたかが、自分の職業に対するプライドと自信を育てると信じてきたからです。先般、開催された本学のオープンキャンパスの折、「本学で看護学を学ぶという選択をして本当によかった」と、在学生在が後輩の高校生に語りかけている姿を目にし、ホッとしました。地域のみなさまや学生を育ててくださった患者さん達のご支援により、「看護学のモデル大学」に近づきつつあると実感できるところまで来たように思っております。

自己点検・評価を怠らず、学生、教職員が一丸となって更なる教育環境の充実に努めてまいります。

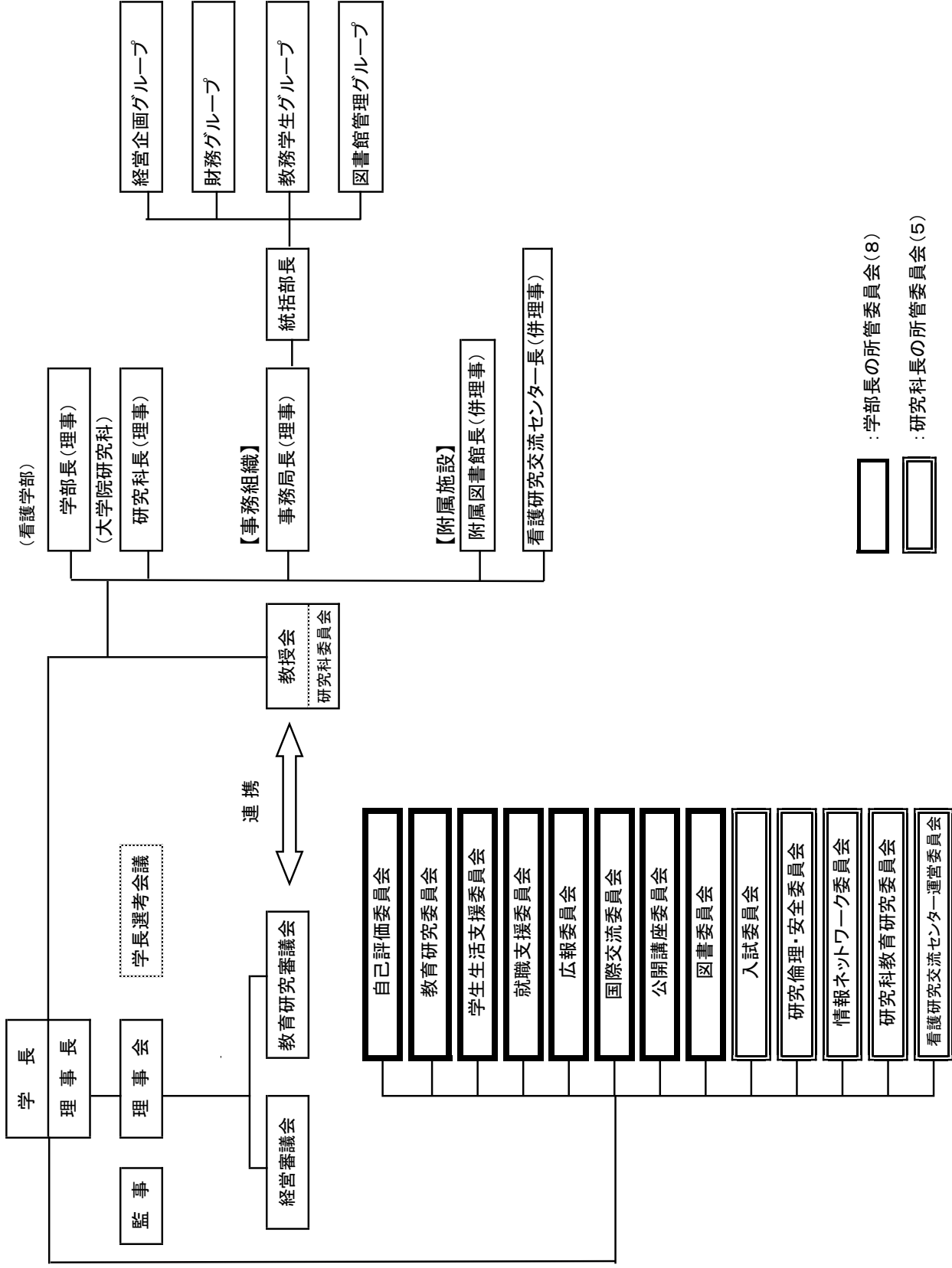
みなさまのご批判を真摯に受け止めて、今後も本学の発展・進化に努めて参ります。

平成23年7月

理事長・学長 草間 朋子

大 学 組 織 図

【教員組織】



目次

1.	委員会／ワーキンググループの活動	1
2.	学内行事の概要	23
3.	教育活動	27
4.	学内セミナー	99
5.	学内プロジェクト研究	100
6.	先端研究	102
7.	奨励研究	104
8.	インターネットジャーナル「看護科学研究」	106
9.	業績	107
10.	地域貢献	117
11.	助成研究	129
12.	各種研究・研修派遣	132
13.	学外研究者の受入	135
14.	教職員名簿	136

1 委員会／ワーキンググループの活動

1-1 理事会

委員 理事長：草間 朋子
理事：市瀬 孝道、甲斐 倫明、安部 陽子（以上、学内理事）
杉村 忠彦、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）

理事会の役割は、法人の運営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の理事会を開催し、教育研究審議会報告の後、年度計画に関する事項、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項、重要な規程の制定又は改正、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、経営審議会と同時に開催した。

1-2 経営審議会

委員 草間 朋子（理事長）、市瀬 孝道、甲斐 倫明、安部 陽子（以上、学内理事）、
杉村 忠彦、小寺 隆、高橋 靖周（以上、学外理事）、立花 充康、藤内 悟、
本間 政雄、山西 文子（以上、経営審議会委員）

本審議会の役割は、法人の経営に関する重要事項を審議することである。本年度は5回の経営審議会を開催し、年度計画に関する事項のうち法人の経営に関するもの、地方独立行政法人法により知事の認可又は承認を受けなければならない事項のうち法人の経営に関するもの、重要な規程の制定又は改正に関する事項のうち法人の経営に関するもの、予算の作成及び執行並びに決算、教員及び事務職員の人事及び評価に関する事項のうち法人の経営に関するもの、組織及び運営の状況について自ら行う点検及び評価などについて審議した。

なお、理事会委員は、経営審議会の委員も兼ねており、審議内容も密接に関係することから、理事会と同時に開催した。

1-3 教育研究審議会

委員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、甲斐 倫明（研究科長）、三船 求真（学外委員）、各研究室代表者、各委員長、安部 陽子（事務局長）、各事務グループリーダー

本教育研究審議会の役割は、大学の教育研究に関する重要事項の審議を行なうことである。本年度は11回の教育研究審議会を開催し、各種委員会報告を行うと共に中期目標・中期計画に関する事項、学則の改正、学生の就業、進級判定、休学、復学、退学、学位の授与に関する事項、教員の人事及び評価に関する事項、教員の自己点検・自己評価に関する事項、各種諸規程等について審議・承認した。各回の教育研究審議会の議事内容は理事会にて報告された。

1-4 教授会

構成員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、各教授、各准教授、各講師

本教授会の役割は、大学の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、卒業、その他在籍に関する事項、学生の表彰及び懲戒に関する事項の審議を行なうことである。本年度は4回の教授会を開催し、学部入試の合否判定、卒業判定および学生の表彰（学長賞、卒業研究の優秀賞、学生賞）に関する事項について審議・承認した。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学、進級判定についての事項は教授会で報告された。

1-5 研究科委員会

構成員 草間 朋子（学長）、甲斐 倫明（研究科長）、各教授、各准教授、各講師

本委員会の役割は、大学院の教育課程の編成に関する事項、学生の入学、修了、その他在籍に関する事項及び学位の授与に関する事項並びに学生の表彰及び懲戒に関する事項などの審議を行うことである。本年度は3回の研究科委員会を開催し、大学院入試の合否判定、課程修了に関する事項などについて審議し、決定を行った。教育研究審議会で審議・承認された休学、復学、退学についての事項は研究科委員会で報告された。

1-6 自己評価委員会

構成員 佐伯 圭一郎、伴 信彦、吉田 成一、大賀 淳子、赤星 琴美、錦戸 正

FD活動

1) 新任教職員を対象にした研修を計画通りに実施した。2) 海外短期研修に2名を派遣した。3) 5名の教員を国内研修に派遣した。4) ケアリング・アイランド九州沖縄構想による本学独自のFD・CSD研修会を1回実施し、他大学企画のFD・CSD企画の本学教員への広報を行い9名の教員を派遣した。5) 全学教員を対象とした「科学研究費補助金申請講習会」を企画、実施した。平成23年度科学研究費補助金申請状況は、新規申請37件、継続申請10件であった。

授業評価

学生による授業評価を継続的に実施した。健康科学実験の授業アンケートおよび講義のアンケート（希望者はマークシート）については、オンラインでの実施を正式に開始した。実習についてのアンケートおよび2年次と4年次の終了時の本学の教育に関する総合的な評価アンケートを実施した。講義に関する授業アンケートについて、今後の方針を検討した。

また、昨年度の授業アンケートの結果において、講義に関する教授技術の項目で高い評価を受けた教員3名の講義録画および講義資料を教員に公開した。

アニュアルミーティング

平成22年度アニュアルミーティングを3月8日に開催した。プロジェクト研究、先端研究、奨励研究の成果報告を含む19演題と看護研究交流センター交流セッション1演題が発表された。

年報

平成21年度年報を編集し、学外HPに公開した。

人権啓発・ハラスメント防止

教職員を対象とした人権研修会、学生を対象としたデートDV講演会（学生生活支援委員会と共同）、教科内での人権・モラル教育、ハラスメントに関する教育を実施した。また人権相談窓口の学内に対して広報を継続し、周知を図った。

大学機関別認証評価

大学評価・学位授与機構による大学機関別認証評価を受けた。自己評価書を作成し、6月末に提出した。10月の現地審査を経て、3月に11すべての基準を満たし、選択的評価基準A,Bともに目的の達成状況が良好であるとの評価を受けた。

来年度以降の重要な課題は以下の通りである。

- 1) 授業アンケートの基本方針の見直しに従って「講義に関しては各教員が3年に1度以上の頻度で実施」となったが、実際の実施頻度が年度や対象学年について偏らないように調整を行う。
- 2) 授業アンケート以外の本学の教育に関する評価の手段として、卒業生対象のアンケート調査（看護研究交流センターの調査に参加）や在校生からの聞き取り調査として実施する。
- 3) FD活動に関するニーズ調査を実施し、今後の研修会やFDに関する情報収集や支援の方針を検討する。
- 4) 看護系教員国内派遣研修について、趣旨や選考基準を整理し、募集・選考手続きをより円滑に進める。

1-7 教育研究委員会

構成員 市瀬 孝道、伊東 朋子、佐伯 圭一郎、甲斐 倫明、李 笑雨、藤内 美保、小野 美喜、
(事務局) 神崎 正太

本委員会は学生の教育を効果的かつ円滑に行うために教育関連の活動と教育・研究予算の策定を行っている。本年度は12回の教育研究委員会を開催した。1)本年度の国家試験対策に関しては、国試の補講は例年と同じく12月上旬に行い、模試については例年どおり国試直前まで実施、また国試終了直後に国家試験対策に関するアンケート調査を実施した。2)看護実習(第1段階～第5段階)に関しては、実習全体の日程を調整し、教員や学生配置等を検討・実施した。実習関連WGに関する活動内容は下記に記述した内容によって看護実習の充実を図った。3)平成23年度学部生の助産学選考に関しては、WGが中心となって、口頭試問(実技含む)による選考を行い、4月の第2回教育審議会にて承認を得た。4)卒業研究に関しては、例年どおり3月末に各研究室の卒論研究テーマを収集し、指導・調整を行なった。また研究・倫理安全委員会と連携して、卒論実施内容や調査研究フィールドが重複しないように調整した。卒業研究関連の2つのサポートグループ(SG)を設置し、SGは卒業研究発表会要旨集と卒業研究論文集の作成、卒業研究発表会のサポートと、平成23年度の各研究室学生配置、看護研究の基礎Ⅰの講義のサポート(テキスト作成も含む)等の実務を行った。5)大分大学との単位互換科目では大学等連携共同授業プログラムによる「大分を探ろう」を大分大学より配信しiPadにて受講した。6)平成23年度より保健師・助産師教育を大学院教育とし、学部は看護師教育のみとする。これに伴って学部の看護師教育のためのカリキュラムを全面的に見直し、改正し、文部科学省に届出した。7)4年次生を対象とした総合人間学の開講にあたっては講師の選定と企画を行い、全8回の講義を実施した。本講義は地域住民に対しても公開講義としており、外部からの参加も多く見られた。8)進級試験は、進級試験WGによって試験問題を選別し平成23年2月28日に実施した。再試験は平成23年3月3日に実施したが不合格者が1名となった。9)研究予算関連では昨年に引き続きプロジェクト研究、先端研究、奨励研究を予算化し、プロジェクト研究2件、先端研究6件と奨励研究6件を採択して大学の研究の推進・活性化を図った。10)短期海外派遣研究員に関しては、本年度も教員2名を海外の大学に派遣し、教員の研究の活性化を図った。11)平成22年度前期・後期の科目等履修生及び22年度の研究生の募集を行ったが、本年度も応募者はなかった。12)戦略的大学連携事業における地域連携研究コンソーシアム大分では県内の大学との連携研究を推進し、特に本年度はこの事業の継続について検討した。また、本事業の教育連携事業では県内の他大学と連携して進学説明会を実施した。一昨年度より開始された福岡県立大学・看護学部が主幹校となるケアリングアイランド九州沖縄構想では本年度1回のFDワークショップと1回のローカルケアリングCSD(Clinical Staff Development)を実施した。13)教育研究委員会が担当する平成22年度の年度計画に関しては、全て遂行し、100%達成することができた。

来年度計画としては、平成23年度よりスタートする新々カリキュラムに関して実施上問題があれば本委員会で随時改善して行きたいと考えている。

1) 国家試験対策WG

構成員 伊東 朋子、梅野 貴恵、福田 広美、石田 佳代子、小嶋 光明、高波 利恵、坂口 隆之、石岡 洋子、井ノ口 明美、神崎 正太、宮崎 文子（特別委員）

平成22年度の国家試験対象者は84名であった。昨年度よりの目標を引き継ぎ、保健師・助産師・看護師国家試験合格率100%をめざし国試WG会議を9回行った。教員・学生の対策委員は一丸となり役割分担をきめ4月より精力的に対策の計画を実施した。具体的活動は、9月に国試ガイダンスを行い、年間計画を示し学生の自覚を促した。特に今年度は学生の主体性を重んじ、補講科目数を弱点教科、領域に絞り、計画を策定した。また模試の見直しも行き、学内模試（看護師1回、保健師1回、助産師4回）、業者模試（看護師8回、保健師5回、助産師3回）を実施し、その結果を分析し、成績不振の学生には個人面接を行い、折にふれて学生への激励をし、国家試験へのモチベーションを喚起した。特に必須問題の補強として解剖・生理基礎試験を実施し、基礎科目部分の強化を図った。卒論配置研究室の教室主任にも現状を報告し、指導強化を求めた。3職の合格率は看護師100%（全国96.4%）、保健師5名不合格で93.8%（全国89.7%）、助産師100%（全国98.2%）であった。次年度は今年度の反省事項を改善する万全の方策を取り、さらなる動機付けと早期取り組みの必要性がある。

2) 実習代表者会議

構成員 市瀬 孝道、藤内 美保、影山 隆之、桜井 礼子、志賀 寿美代、高野 政子、林 猪都子、江藤 真紀、小野 美喜、梅野 貴恵

実習代表者会議を開催し2年目となる。主に実習の単位認定に関する事、実習責任者としての判断を共有する事項の検討および、実習中に配慮すべき学生の情報共有などを行った。平成21年度カリキュラム改正、平成23年度カリキュラム改正が導入への検討など、各実習領域での連携が必要であり、代表者会議により、意思決定がスムーズにでき、効果的であった。また他の領域の実習経過・実習状況も把握でき、カリキュラム運営上での改善すべき点なども検討できた。今後は実習指導者交流会（仮）など検討する予定である。

3) 実習関連WG

構成員 桜井 礼子、藤内 美保、赤星 琴美、桑野 紀子、秦 さと子、関屋 伸子、津隈 亜弥子、津留 英里佳、田中 美樹

今年度の新たな取り組みとしては、1)看護技術修得確認シートを平成21年度改正カリキュラムの学生用に改定するため、項目の見直しや、チェックのタイミング、また記入のしやすさを考慮して改善した。2)平成21年度改正カリキュラムにより統合領域に位置づけられた看護技術修得プログラムの第1段階技術チェック、総合看護学など単位認定のための基準を明確化した。3)「看護学実習に関する情報を学内Webにupし情報発信するとともに整備・管理を行った。

その他、例年実施している、4)実習センターの運営・管理および各実習施設の整備5)平成23年度版実習ガイドブックの作成、6)総合実習の運営、7)看護技術修得プログラム（第1段階技術チェック、第2段階技術チェック（総合看護学）、第3段階技術チェック）の実施、8)実習関連予算の管理等を行った。9名のワーキングメンバーで、年間を通していくつもの業務が並行して行われるが、実習期間との調整をしながら、協力してすべて効率的・効果的に実施できた。

4) 進級試験WG

構成員 小野 美喜、佐伯 圭一郎、松本 初美、定金 香里、田中 佳子、津隈 亜弥子

進級試験オリエンテーションを夏季休暇前に実施し、学生に対する試験学習への動機づけを行った。各教員が作成した試験問題を回収し、難易度の検討や内容の重複の整理しながら本試験・再試験の2種類の試験問題を作成した。2月28日に本試験を実施し、採点結果8名が不合格となった。3月7日再試験を実施し1名が不合格となった。学生の継続学習の資料となるよう、希望者に個人票を返却し学習不足領域を示した。問題作成担当者へは、今後の教育活動につなげられるよう試験結果をフィードバックするとともに、過去の問題のデータベース化をすすめている。

5) 助産学選考WG

構成員 林 猪都子、佐伯 圭一郎、梅野 貴恵、吉村 匠平、伊東 朋子、猪俣 理恵

4月20日に平成23年度助産学実習履修許可者の選考を行った。教育研究審議会の審議を経て10名に履修が許可された。

1-8 学生生活支援委員会

構成員 林 猪都子、関根 剛、宮内 信治、乾 つぶら、河野 梢子、菅野 信子、柳井 幸雄

学生の大学生活を充実させるための環境整備をする、学生に必要とされるサポートをタイムリーに提供することを目標に下記の活動を展開した。

1. 学生関連イベントの企画・運営

全学生オリエンテーション（4/7）、新入生オリエンテーション・のつはる少年自然の家宿泊研修（4/8、4/9）、コンタクトグループ（4/7）（グループ編成・広報）、全学スポーツ交流会（アルティメット、全学生・教職員への実況中継）、キャンパスクリーンデー（5/19）（コンタクトグループにて作業場所を配置し大学施設外の清掃を充実させた）などを行った。

2. 学生相談

各学年担任を中心に学生相談業務を行った。内容は相談（ハラスメント相談窓口）、学習相談（単位取得、進級に関するもの）、休退学・復学相談と面談（保護者面談を含む）、過年度、休学中の学生支援などを行った。また、旧カリキュラムから新カリキュラムの移行に伴い、休学者・留年者の個別カリキュラムによる単位取得状況を確認した。

3. 学生の自主活動への支援

サークル活動支援、若葉祭における実行委員支援、自治会活動支援、新入生歓迎会参加などを行った。

4. 経済支援

奨学金による経済支援（日本学生支援機構の奨学金支給など）、奨学金情報の収集、周知活動などを行った。

5. 健康支援

学生の健康管理支援（集団健康診断、抗体検査、ワクチン接種勧奨、個別相談）、禁煙教育（禁煙希望学生に対する禁煙相談）、学生の保険関係の支援（加入手続き事務、退学・休学者の返還・追加、事故・病院の入院、退院の補償請求に関する支援など）について保健室保健師を中心に行った。インフルエンザ罹患学生への対応、ワクチン接種の対応などを行った（保健室）。

6. 交通安全推進

交通安全指導の実施（自動車講習会4/28・自動二輪実技講習会9/4）、通学許可面接（通学許可交付面接、交通事故対応の指導）、学生が被害・加害者となった場合の交通事故対応（一人暮らしの学生を中心に担任が対応）、駐車場管理（許可シールの交付、無許可利用者・違反者への対応）、交通事故データベースの作成などを行った。

7. 学生生活に関する調査・広報

学生生活実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）と喫煙実態調査（質問紙作成、実施、集計、報告書の作成、公開）についてネコバスを使用して実施した。学生への広報活動、学生への情報発信のあり方の検討（ネコバス利用の検討）などを行った。

8. その他

新人教員オリエンテーション（4/1）、九州地区公立学生部長会議参加（9/17）、大学コンソーシアムおおいたへの委員派遣、ケアリングアイランドへの委員派遣、行事ポスター作成、学外者クレーム対応、学年進行に伴うクラス替え、教職員への学生に関する相談などを行った。

1-9 就職支援委員会

構成員 下田 浩、田中 美樹、大賀 淳子、松本 初美、小嶋 光明、神崎 将太

学生の就職の円滑化と県内就職率40%以上を目指して、就職活動を支援し、年間計画に沿って活動を行った。具体的には全国からの求人訪問対応（52件）、就職ガイダンス（2回実施）、県内就職説明会（24施設）の企画・運営・実施・進学ガイドブックの改訂、利用状況調査を行った。さらに、模擬面接（学生の要望に合わせた定期模擬面接3回、臨時模擬面接3回：65名実施）、学生の個別支援、全国からの就職情報閲覧の整備を行い、学生個々に全国の求人情報をメールで発信した。在校生に対しては各委員が分担して学生個々を細やかに支援し、卒業生に対しては情報提供を行うだけでなく、就職施設に各委員が訪問し、勤務状況の調査や就職施設からの意見、コメントや要望などを頂き、卒業生のフォローアップを行うとともに、施設からの要望に応えるべく委員会活動を行った。今年度の求人数は18,101人、うち大分県428人である。卒業予定者は84名であり、全員が2月の時点で就職を決定した（今年度の進学予定者は0人であった）。職種別人数は、保健師4名、助産師13名、看護師67名である。

本年度の県内外就職率は、大分県内35名（41.7%）、県外49名（58.3%）であり、県内就職率向上のためには県外に就職した卒業生のUターンへのフォローアップも含めた一層の努力が必要である。

1-10 広報委員会

構成員 高野 政子、稲垣 敦、安部 眞佐子、梅野 貴恵、井伊 暢美、田崎 眞佐恵

1. 若葉祭：5月22日、23日に開催された若葉祭では、学生の企画・運営の相談や支援を行い、教員イベントの募集や調整をした。参加者は2日間で約1,350名であった。実習室の廊下に大学紹介のパネルに掲示して概要を示し、さらに研究室のパネルによって大学の教育研究をわかりやすく示した。教員イベントは、学生との共催として、実習室・実験室を開放して、高齢者、妊婦などの疑似体験、救急法の体験、放射線や組織切片の展示などによって看護大学の教育内容や設備の紹介を行った。また、アロマハンドマッサージや猫車といった来場者に親しみを持ってもらうイベントも開催された。同時に、研究紹介として、7人の教員のポスターの掲示と、産学官共同開発の柚子の力の試飲を行った。公開講座として、子ども向けの理科実験を開催した。
2. オープンキャンパス：昨年度の参加者アンケート結果を確認し、平成22年度の企画を検討した。日程は昨年度同様、夏休み最初の3連休中日の7月18日（日）に実施し、参加者は261名であった。昨年午後の参加者が少なかったことから本年度は10時から14時の1回開催としたが、参加人数は変わりなかった。説明会・体験イベントなど教職員全員と学生43名で取り組んだ。食堂も営業し、約80名の利用があった。教育・研究の展示は研究棟1階の廊下にパネル展示を吊り下げ形式で統一した。また、教員7名の研究紹介を掲示した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業3講義は好評であった。在学生が学習相談や実習室への誘導にも協力していたので、高校生や保護者には入学後の学生イメージをもつことができたと思われる。
3. 地域ふれあい祭り：平成22年度の地域ふれあい祭りは、大分市主催の大分七夕祭り、チキリンばやし市民総踊り大会に参加する方法で、県民との交流と本学の広報を目的として開催した。当日の参加者は教職員30名と学生40名の70名であった。竹町ドーム広場で健康チェックを実施し約250名の測定や進学相談を行った。女子学生や女性教員は浴衣姿で、男性教職員や男子学生は大学法被姿で練習して臨んだチキリン踊りを披露した。
4. 出張講義：高校からの医療系大学に進学希望者を対象とする出前授業、特に看護や臨床現場の話を希望する出張講義の依頼を受け、助教以上の教員に依頼・調整を実施した。竹田高校(6/10)、中津北高校(6/25)、雄城台高校(7/16)、杵築高校(7/9)、下関高校(7/13)、大分西高校(8/26)、別府鶴見丘高校(9/1)、鶴崎高校(9/27)、安心院高校(9/24)、宇佐高校(10/20)、竹田高校(11/18)合計12回。
5. 大学見学：オープンキャンパスに参加できなかった高校生や保護者の大学見学等の希望者、申し込みに随時対応した。また、佐伯豊南高校(6/11)、雄城台高校(7/14)、別府青山高校(10/13)、保護者約70名と教員1名が来学し、1時間の模擬授業を行い、その後に学内見学を実施した。その他個別の見学、訪問があり対応した。
6. 大学オリジナルグッズの作成：大学グッズは広く大学を広報するために、オープンキャンパスでの配布や諸外国の方々に配布しているが、学生などが気軽に購入できるような仕組みを検討した。大学ロゴ入りマグカップは、国際特許事務局に商標登録したが、学内売店等で販売することは規定上不可能という判断に至った。新規には大学英名入り風呂敷(50枚)、大学写真入りクリアファイル(1000枚)、ボールペン(1000本)を作成した。
7. 学外Web：学外Webは新規の記事152件を随時更新した。教員の研究紹介を毎月更新した。
8. 英文Web：12月に平成21年度の国際フォーラムのテーマ、卒業研究発表会の課題の変更など修正した。
9. マスメディアによる広報：新聞、テレビ、ラジオ等に情報提供や取材依頼を行い、記者及び取材班の対応を担当した。
10. その他の活動は以下のとおりである。
 - ・新新カリキュラムの変更に伴う広報活動
 - ・看護師教育のみの4年次生教育および保健師、助産師教育の大学院化の広報活動
 - ・大学グッズの開発
 - ・学外Web等に適正な情報発信
 - ・学内行事(若葉祭、オープンキャンパス等)を利用した教員の研究紹介
 - ・地域への情報発信
 - ・大学の県民・地域住民との交流

1) 大学案内パンフレットWG

構成員 江月 優子、小嶋 光明、樋口 幸、薬師寺 綾

平成23年度版大学案内を作成は平成21年12月にWGを立ち上げ開始し、新カリキュラム移行に伴う内容を広報できるよう検討した。平成22年1月に印刷会社の選定を行い、活動を開始した。予定通り、5月の若葉祭までに完成したパンフレットが納品された。以後、完成したパンフレットは、大学行事や入試説明会で配布され広く活用された。12月に平成24年度版パンフレットWGが決定したため、引き継ぎを行った。

2) 学外WebWG

構成員 品川 佳満、岩崎 香子、渡邊 寿子、佐藤 みつよ

学外Webサイトの情報の更新・掲載（大学案内、入試・入学案内、イベント案内・報告など）および管理・運営を行った。サイトは、1日約700～800人のアクセスを記録している。また、図書館のWebサイトのリニューアルを行った（平成22年12月20日公開）。

3) 英文WebWG

構成員 G. T. Shirley、岩崎 香子、佐藤 みつよ、渡邊 寿子

海外の利用者を重視した内容とし、学内行事等の報告掲載を随時行うことで、常に最新の情報を分かりやすく閲覧できるようにした。

1-11 国際交流委員会

構成員 G.T. Shirley、伊東 朋子、李 笑雨、高波 利恵、福田 広美、江本 華子

国際交流委員会が平成22年度に行った活動は以下のとおりである。

1) ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名の長期派遣（6月20日～7月4日までの2週間）、学部生6名、教員1名の短期派遣（6月20日～27日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

2) 本学の学部生および大学院生の派遣

大学院生2名を長期派遣（8月15日～8月29日まで2週間）、学部生6名と同行教員2名を短期派遣（8月22日～29日まで8日間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等行い、理解を深めた、報告はWebに掲載した。

3) 第12回看護国際フォーラムの開催

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを本年は「高齢社会における健康とケアを学際的に考える」をテーマに、平成22年10月30日（土）に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。米国から2名、韓国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は220名と盛況であった。

4) 第10回NP国際会議の開催

平成22年11月28日（日）に、本学にて、第10回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。米国ミシガン州のサギノー バレー 州立大学から1名を講師として招聘した。

5) 第13回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会の開催

今年度は第11回NP国際会議として、「在宅ケアにおける診療看護師の役割」をテーマに、平成23年3月17日（木）に本学23講義室で開催した。米国ワシントンDCのワシントンホスピタルセンター、韓国保健診療員看護協会および国内の北海道医療大学から1名ずつの講師を招聘した。

次年度は、平成22年度の計画を具体的に踏襲した計画を検討する予定である。基本的には、学生の国際的視野の育成と教員の研修の質のさらなる向上のため、国際交流の機会と内容を検討するよう試みる。そして、毎年、看護国際フォーラム後にアンケートを実施し、大分県内の看護職のニーズに沿ったテーマを選んで開催し、地域貢献にもつなげる。

1-12 公開講座委員会

構成員 平野 互、赤星 琴美、関屋 伸子、定金 香里、柳井 幸雄、小野 麻梨子

「感染症とたたかう」を共通テーマとする有料公開講座（受講料500円）を4回開催した。各回の題目は「感染症予防のための基本的な健康管理法」、「微生物感染症に対する医薬品の働き」、「高齢者がかかりやすい感染症とその予防」、「子どもがかかりやすい感染症と予防接種」であり、いずれの講座も学内講義室ないし実習室を会場として実施された。のべ受講者数は計33名で、うち3名が全回出席し、修了証を授与された。

広報の手段として、新聞等マスコミを通じての広報のほか、地域自治会を通じたチラシの配布のほか公民館、地元郵便局、沿線JR駅でのチラシの配布を行った。

シリーズ企画の講座とは別に、若葉祭において、無料の公開講座（ミニ講座）、「簡単な理科実験」を開催し、43名が参加した。教員から提案があり実施が予定された「ディスクゴルフ教室」は雨天のため中止となった。

今年度、初の試みとして、学外の会場を使用した有料公開講座（受講料500円）を開催した。テーマは、「地域の暮らしを豊かにする看護専門職」で、「知っていますか？ 訪問看護」、「住民のみなさまの健康を支える診療看護師 ～全国に先駆け養成を開始して～」の2つの講座を実施した。参加者は13名であった。

地域貢献の観点から、テーマ設定に際しては、受講者アンケートをもとに、希望の多いテーマを中心に内容を検討しているが、より多くの受講生に参加してもらうこと、そのための周知広報の効率的な方法を確立することが課題である。

1-13 図書委員会

構成員 志賀 壽美代、江藤 真紀、吉村 匠平、梅野 貴恵、石田 佳代子、児玉 雅範、
白川 裕子、大久保 圭

定期的に委員会を開催し、報告と議題の検討を行った。

報告については大分大学が中心になって進めている「大分県地域共同リポジトリ」の勉強会や、一昨年より担当している日本看護図書館協議会の幹事の役割りに伴う事例発表が多かった。

以下中期計画にそった今年度の実施状況である。

- 1) 図書・雑誌の情報検索システムの利用方法をホームページに掲載し、検索端末横にも配置。学生が利用しやすいよう、新しい図書館ホームページを作成した。
- 2) 本学で開催された公開講座などを記録したDVDを貸出利用できるように整備・保存し、利用状況を記録している。
- 3) 毎月HPに掲載している教員の図書紹介について、学生の閲覧状況などを調査した。利用増加を図るために、図書館入口新着図書コーナーに教員紹介図書を配置し、貸出しやすいようにした。
- 4) 学部生に対して、本学図書館の利用に関するアンケート調査を行った。結果は本年度中にまとめ、HPに公開予定。

次年度は以下について取り組んでいく。

- 1) 平成22年度に学部生を対象に行った図書館利用者アンケートの結果をもとに、図書館の運営方法を検討し、利用者に対するサービス向上を目指す改善を行う。
- 2) 本学図書館のサービスの内容をわかりやすく記載した「図書館利用案内」（パンフレット）を作成する。
- 3) 毎月HPに掲載している教員図書紹介を、幅広いジャンルからの紹介にするため、事務職員も含めた「教職員図書紹介」とする。
- 4) 学生からの希望図書購入についてのリクエスト制度をより一層周知し、学生リクエストの増加をはかる。
- 5) 本学図書館の利用に関する具体的な調査を院生、教職員に対して行う。
- 6) NP育成のため医学専門図書の購入冊数を増やし、NP関連図書の充実を図る。

1-14 入試委員会

構成員 構成員 構成員は非公開としている。

本委員会は、平成22年度に実施した入学試験に関するすべての事項について審議し、入学試験を統括した。広報委員会と協力して、入学試験に関する広報活動を行った（業者等主催進学説明会16箇所参加；対高校説明会来場高校教諭33名；若葉祭・オープンキャンパス進学相談コーナー開設）。学生募集要項の記載の改善、従来抽象的にしか記載がなかった外国人私費留学生の出願条件・合格条件の具体的検討、及び 大学院博士課程（前期）実践者養成コース入学試験への専門問題の導入を進めた。

大学院（博士課程前期）のコース変更に伴い、大学院入学試験（及び編入学試験）の実施時期を例年より繰り下げ、学部の特別選抜入学試験と同時に実施した（11/21）。学部の特別選抜志願者数は県内75名、県外23名、社会人5名で、前年度とほぼ同水準であった。大学院はコース変更したので出願者数を前年と比較できないが、看護実践者コース（広域看護学）については二次募集を行った。

学部の一般選抜志願者数は前期155名、後期227名で、前期は前年度より減少したが前々年度とほぼ同水準であった。また編入学試験の出願者数は9名で、前年度より減少した。

引き続き、年度計画に沿って、入学試験のあり方の検討、および高校訪問・進学説明会などによる広報を行っていく。また、高校の学習指導要領改訂と履修科目変更に備え、将来の一般選抜におけるセンター試験科目の検討を行う。

1-15 研究倫理・安全委員会

構成員 吉村 匠平、平野 互、大賀 淳子、福田 広美、岩崎 香子（以上、学内委員）、西 英久（大分大学）、二宮 考富（元大分大学）（以上、学外委員）、久寿米木 康裕（事務局）

本委員会は、本学教員及び大学院生が行う研究について倫理・安全面の審査を行っている。今年度は、延べ115件の研究計画について審査を行った。卒業研究の審査に関しては、教育研究委員会と連携し9月までに審査を終了した。

今年度は、施設からの研究実施承諾書の提出時期を見直した（特別な手続きを必要とする場合を除く）。施設が提供するサービスの受給者（例、病院における患者、学校における児童生徒）を対象とする場合は、事前に施設の内諾を得た上で研究計画を申請し、承諾書については審査承認（あるいは研究着手）の翌月末までに提出することとした。それ以外の場合については（例：施設に勤務する者を対象とする場合）、施設からの承諾書を審査承認（あるいは研究着手）の翌月末までに提出事後提出することとした。

研究倫理、安全の確保に必要な事項が遵守されるよう、今後とも、教員・学生の意識を高めると同時に、必要に応じて研究計画の申請に関するルールの見直しなどを進める。

1-16 情報ネットワーク委員会

構成員 稲垣 敦、品川 佳満、伴 信彦、坂口 隆之、河野 梢子、小玉 富瑞

本学の情報ネットワークの管理運用を継続的に実施した。また、情報セキュリティや教職員のICTスキル向上のための活動、教材作成室やメディアセンターの機器の管理を継続した。特に、今年度は以下の点に取り組んだ。

- 1) 昨年度より検討してきた教務および図書館システムの更新
- 2) 昨年のDHCPサーバ、不正PC検知・排除システムの導入に伴うセキュリティの強化
- 3) ウィルス対策ソフトの配付
- 4) 学生所有パソコンの学内無線LAN利用環境の準備
- 5) SINET4への接続検討と予算化
- 6) サーバ更新の予算化および更新
- 7) 学校教育法施行規則等の改正に伴う教育情報公表の準備
- 8) 財務システム更新のための調査
- 9) 卒業生と教職員を結ぶnekobusシステムの完成

来年度の予定

- 1) 保守期間の切れたサーバの更新
- 2) 基幹ネットワークスイッチの更新
- 3) 学内無線LAN接続の電子申請システムの整備
- 4) ウィルス対策ソフトの変更
- 5) SINET4への接続
- 6) 看護研究交流センターの情報ネットワークインフラの整備
- 7) 学校教育法施行規則等の改正に伴う教育情報のWeb上での公表
- 8) 財務システムの検討
- 9) 教務システムの検討

1) ネットワークシステムWG

構成員 品川 佳満、小嶋 光明、甲斐 倫明、佐伯 圭一郎

サーバ群（WWW、メール、グループウェア、ファイル、計算機など）およびネットワーク全般（インターネット・イントラネット）の管理・運営を行った。教務システム、図書館システムについては、更新を行った。

2) WinユーザーサポートWG

構成員 坂口 隆之、稲垣 敦、河野 梢子、小玉 富瑞

学内に配置しているWindows PC（教職員、情報処理教室、教材作成室・メディアセンター、看護研究交流センター、CALL用ノートなど）の管理を行なった。内容は、トラブル対応、システムやソフトウェアのバージョンアップなどである。

3) MacユーザーサポートWG

構成員 小嶋 光明、伴 信彦

教職員用および学内に設置しているMac PCの管理（トラブル対応、システムやソフトウェアの更新）を行った。

1-17 研究科教育研究委員会

構成員 甲斐 倫明、高野 政子、林 猪都子、関根 剛、徳永 一裕

大学研究科の運営および計画に関する次の事項について審議・実施した。

- 1) 平成23年度からの保健師・助産師教育の大学院化に向けた活動を行った。
- 2) 研究（課題）計画報告会、研究（課題）中間報告会の企画・運営を行った。
- 3) 平成23年度から開設する広域看護学コース・助産学コースのカリキュラム作成を保健師・助産師WGの協力を得て作成し、文科省の指定校申請し承認を受けた。
- 4) 長期履修制度の認定のあり方について見直しを行い、「長期履修規程の取り扱いに関する申し合わせ」（改訂版）および学生向けのQ&Aを作成した。
- 5) 平成23年度大学院募集要項の作成、シラバスの作成を行った。
- 6) 実践者コースの入試のあり方について検討し、実践者のすべてのコースで統一した専門問題（国家試験相当基礎問題）を導入することにした。
- 7) NPコースの教育については、NPプロジェクトグループと連携し、模擬試験、実習前試験（筆記試験とOSCE）および学内修了試験を実施した。
- 8) すべての大学院生対象に、大学教育の満足度、指導教員の指導満足度、大学への要望などを調査した。

1-18 看護研究交流センター運営委員会

構成員 桜井 礼子、小野 美喜、秦さと子、関屋 伸子、田中 美樹、安部 陽子、江本 華子、
甲斐 倫明、草間 朋子（オブザーバー）

1. 地域貢献・地域交流事業に関すること

1) 看護職者等を対象として研究支援・技術支援のための講師派遣

(1) 大分県看護協会の事業への協力

①臨床実習指導者講習会 ②看護研究 ③看護力再開発講習会 ④訪問看護基礎研修 ⑤訪問看護
ステップⅠ ⑥セカンドレベル研修等

(2) その他の講師派遣

大分県専任教員再教育研修をはじめ、病院等からの依頼により、「フィジカルアセスメント」など
看護職者への研修のほか、「訪問看護について」等に講師を派遣した。

2) 研究指導等

(1) 講師派遣

研究指導は施設からの依頼に対して、年間を通して研究指導の講師2名（人間科学講座から1
名、看護系講座から1名）を派遣している。今年度も昨年と同様、5施設に対して10名の講師を派
遣した。また、今年度は看護研究の支援方法のガイドラインを作成し、指導者育成等の方策をまと
めた。さらに、年度ごとに施設側での看護研究に関する自己評価と派遣講師からの評価を合わせ
て、施設ごとの取り組みや支援の継続について検討する予定である。

講師派遣施設：大分県立病院、大分赤十字病院、大分市医師会立アルメイダ病院、
国立病院機構大分医療センター、国立病院機構西別府病院

また、今年度から継続教育支援として、大分健生病院に1年間を通して2名の講師派遣を行っ
た。次年度以降も継続して支援を行う予定である。

(2) 統計・情報処理相談窓口の開設

今年度の相談窓口の件数は合計6件であったが、（6月1件、9月1件、11月1件、1月2件、
2月1件）後期にかけて増加傾向である。相談者は、看護職だけでなく広く医療保健等の専門職で
あった。相談内容に合わせて、担当者4名で対応していただいた。これまでHP上で行っていた広報
に加えて、広報用のチラシを作成、約150施設に配布した。今後、看護協会の研修会等で配布予定し
ている。

(3) 研究成果報告会（アニュアルミーティングの公開）

学内研究成果報告会（アニュアルミーティング）を、全日公開としており、さらに「地域連携研
究コンソーシアム大分」の成果報告の場とし、成果を広く産業界、教育機関に知ってもらおう場とな
ることを目指した。地域の看護職者等の参加をホームページ、および主な実習施設、教育機関へ案
内を郵送した。学外からの参加者は8名であった。

3) 訪問看護認定看護師教育課程の開講

(1) 開講期間：平成22年9月1日から平成23年2月末（6ヶ月間）

(2) 研修修了生：7名（平成23年5月、日本看護協会の認定看護師を受験する予定）

(3) カリキュラムの見直し

基準カリキュラムの改正があり、630時間から660時間へ変更、共通科目、専門科目についても大
幅なカリキュラムの見直しを行った。また本教育課程の修了生や他分野の認定看護師に講師を依頼
し、教育内容の充実を図った。

4) 認定看護師教育課程公開講義の開催

公開講義の開催 認定看護師教育課程の講義の一部を公開講義とし、講演会を開催した。日時は
10月3日（日）、講師は秋山正子先生で、講演のテーマは「在宅ケアの不思議な力～どんな時で
も、命は輝く～」であった。参加者は研修生を含め92名であり、県外からの参加もあった。アン
ケート結果では、テーマ、内容ともに満足度が高かった。今後も継続して年1回の公開講義を開催
する予定である。

2. 国際協力・交流事業に関すること

1) JICA「ウズベキスタン看護教育改善プロジェクト」のフォローアップ活動

平成22年10月に2名をウズベキスタンに派遣、教員研修の状況などを視察した。

2) 海外からの研修の受け入れ

(1) 第25回日本・アラブ女性交流事業を受け入れ

平成22年7月14～16日、ヨルダン、エジプト、パレスチナより3名の看護職を受け入れ、県内の

医療施設の見学研修および学内でフォーラムを開催した。大学では、ウェルカム・パーティを昼食時にカレッジホールで開催、学生、教員の交流の場となった。公開フォーラムは「人々の健康と女性の役割」学外にも広報し、本学の教職員を含め一般62名、学生81名が参加した。参加者からは、中東地域の看護教育が良く理解でき、それぞれの国の状況をリアルに聞くことができたといった感想が寄せられた。

(2) 韓国からの受け入れ

- ① 6月大田大学校看護学科 (Taejon University, School of Nursing) : 学生30名
- ② 11月Chodang University : 学生40名
- ③ 11月Kyungin Women's College, 3years Diploma College : 学生20名

3. 継続教育事業に関すること

1) 卒業への研究支援・技術支援

(1) 第6回看護研究交流センターセミナー

10月16日(土) 卒業生を対象とした第6回看護研究交流センターセミナー(テーマ: 看護職のキャリアアップ魅力ある専門領域への第一歩、講演1「訪問看護の現場から、看護に求められるもの」、講演2「小児看護の道を歩む」)を開催し27名が参加した。

セミナー参加者へのアンケート調査を実施し、今後の研修テーマについてのニーズ調査を実施した。ホスピス、移植看護、専門看護師の実践についてなど、専門化した看護実践への関心が高く、次回の研修計画に反映していけるよう検討していく。

2) 卒業生のためのネットワークづくりと情報発信

卒業生への情報発信、同窓会のネットワークを活用し、平成22年度卒業生の就職後の状況調査(就職後の新人教育、離職等に関する悩み等)を実施する予定である。

4. 知的財産・産学官連携事業に関すること

地域連携研究コンソーシアム大分と連携を図るとともに、産学官共同のためのe-seeds用教員プロフィールを作成し、大学ホームページで公開した。

1) 研究支援の講師派遣のあり方の検討

看護研究の支援方法(指導者育成等)のあり方について、支援方法のガイドラインにそって施設側からの看護研究に対する自己評価などの情報を整理し、指導者育成等の方策をまとめ支援方法の改善を図る。

2) 卒業生のネットワークづくりと情報提供

卒業生のためのサーバ(nekobus)を利用して、卒業生の動向調査を実施したり、本学が取り組んでいるNP教育、認定看護師教育について、卒業生が関心を持てる内容で情報提供を行う。

1) インターネットジャーナルWG

構成員 草間 朋子、甲斐 倫明、G.T. Shirley、桜井 礼子、伴 信彦、稲垣 敦、定金 香里、高波 利恵、秦 さと子

チラシの作成、学会大会等各種イベントでの広報、「看護科学研究」第9巻第1号および第9巻第2号の審査・編集に関する実務が行われ、第9巻第1号は平成22年4月に、第9巻第2号は平成23年3月に刊行し、本学ホームページ上(http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/pages/9_1.html)で公開した。

1-19 衛生委員会

構成員 安部 陽子（1号委員）、角 匡幸（2号委員）、江藤 真紀（3号委員）、影山 隆之、
錦戸 正（以上、4号委員）、菅野 信子（オブザーバー）

本年度、4回の衛生委員会を開催し、苦情相談および健康相談等について再確認するとともに定期健康診断結果の個別指導等、職場巡視を行った。

職場巡視において、指摘された地震の際の転倒防止対策や避難経路の確認について、衛生委員会委員長名で全教職員に周知を図った。

1-20 評価委員会

構成員 市瀬 孝道、甲斐 倫明、安部 陽子、志賀 壽美代

1) 平成21年度に実施した教員評価の方法を継続して行うことを教育研究審議会で承認した。2) 平成22年度の教員評価を1月に実施し、評価結果を2月に各教員に配布した。

教員評価のあり方と評価結果の利用については今後も継続して検討していく。

1-21 NPプロジェクト

構成員 草間 朋子、藤内 美保、安部 陽子、江藤 真紀、小野 美喜、甲斐 倫明、桜井 礼子、
下田 浩、高野 政子、田中 美樹、林 猪都子、福田 広美、宮内 信治

NPプロジェクトは平成22年度年度計画に基づき以下のような活動を行った。

1. 老年NPおよび小児NPの大学院教育

1) 2年次生4名(老年NP)、1年次生10名(老年NP7名、小児NP3名)に対して、多くの医師の指導のもと医学教育を中心に実施した。

2) 老年NPの2年次生に対しては、実習前試験として筆記試験、SPを活用したOSCEを実施し、4名合格、1名の不合格者をだした。その後14週間の老年NP実習を総合病院(8週間)、診療所(3週間)、老健施設(3週間)を実施した。実習終了後、1月に課題研究発表を行い論文も完成させた。2月は修了試験を実施し、3月に実施される日本NP協議会が実施するNP資格認定試験を受験する。1年次生では、入学時に自己の知識レベルを認識してもらう目的で客観臨床能力試験を実施した。また医師国家試験必修問題レベルでの口頭試問や模擬試験を実施した。9月には韓国におけるNP研修を行った。

3) 老年NPは一通りのカリキュラムを修了したので、カリキュラムの見直しを行い、修了認定単位を43単位以上から50単位以上とした。また実習期間や進め方の見直しをした。平成24年度からは実習を14週間連続ではなく段階的に進めることを検討している。

4) 老年NPの実習施設の指導者との合同会議を実習前に行い、説明を行った。また実習終了後も実習施設の指導者を招き合同会議を開催し、実習の評価および指導者からの意見をいただき、来年度の実習の進め方の見直しを行った。

5) 演習・実習用の機材として、高機能シミュレーター、エコー、訪問用フィジカルアセスメント用具一式などの様々な演習・実習用器材を使用して教育を行った。小児の高機能シミュレーターも購入し、演習やOSCE、フィジカルアセスメントの練習に使用する。

6) 高血圧、糖尿病、COPD、インフルエンザなど様々なプロトコルをSGの協力のもと作成した。

2. 実習施設の開発

小児NPは平成23年度に実習が初めて開始されるため、実習施設の開拓を行った。老年NPは学生が増えるため新たな実習施設をさらに開拓した。包括的健康アセスメント、看護的治療マネージメント(薬剤処方を含む)についてプロトコルを実習施設の医師と共同で作成した。

3. 制度化のための活動

1) 厚労省の「チーム医療を推進する検討会」に引き続き「チーム医療推進会議」が継続され、看護師業務実態調査などが行われた。また特定看護師(仮称)養成調査試行事業に申請して、実習中に実施した医行為などの調査にかかわり、厚労省の検討資料となった。

2) 日本NP協議会を年4回開催し、制度化に向けた活動、また学生の質担保の教育に関する協議を行った。

3) 厚労省はNPコースを開設している大学や実習施設の視察を行い、本学および実習施設の大分岡病院、天心堂へつぎ病院を視察した。

4) 日本NP協議会は、本年度に修了する本学4名、国際医療福祉大学6名に対して、NP資格認定試験を実施することとしNP資格認定試験ワーキンググループが準備を行い、3月6日に試験を東京で実施する予定である。この試験の質保証のため、NP資格認定試験評価委員会を立ち上げ、ご高名な4名の医師および米国のNPの学部長に委員になっていただいた。

4. NP国際会議の開催および研修会開催

1) 11月28日(日)米国のNICUで活躍しているNPのエクランド 稚子 氏を招聘し、4年生・一般市民を対象とする総合人間学とタイアップし、「NPとしての道のりこの能力を身につけるまで」をテーマに講演会を開催した。午前中はNPメンバーとの会議でNPとCNS役割の違い・協働について説明された。

2) 平成23年3月17日第11回NPプロジェクト国際会議を本学で開催した。テーマは「在宅における診療看護師の役割」でワシントンD.C.で訪問NPとして活動しているJanet N. Goldberg氏、韓国で保健診療員で活動しているShin Hyun Ju氏、北海道医療大学でNP養成をし、米国でNPとしても活動していた塚本容子氏を招聘して講演を行った。

3) NP学生のための初期体験実習(early exposure)の実施

平成22年9月3泊4日で、3期生6名のNP学生および李先生、桜井先生が韓国を訪れし保健診療

員および、2003年度から制度化されたNPの活動を視察した。保健所、大学病院、コミュニティヘルスセンターなどの施設で活動する保健診療員やNPの活動の実際を見学した講義を聴くことで、今後の学習への動機付けとなった。

5. 第29回日本看護科学学会で交流集会開催

平成22年12月3・4日、札幌で開催された日本看護科学学会交流集会において、「看護師の業務拡大に伴うアウトカム評価に関する調査研究の進め方」をテーマに交流集会を行った。本学、国際医療福祉大学、東京医療保健大学、北海道医療大学の共同でプレゼンテーションを行った。

6. NP関連の調査の実施

1) 大分県立看護科学大学競争的研究のプロジェクト研究の一環として、介護保健施設、介護福祉施設の看護師の業務拡大や特定看護師に求められる医行為、大分県における小児の受診行動に関する調査を行った。

2) 全国の訪問看護ステーションの訪問看護師約1000人を対象に、死亡確認に関するアンケート調査を行った。

平成23年度は小児NPの修了生をだす最初の年であるため、小児NP実習や演習など充実した教育をする必要がある。また、老年NP、小児NPともに今年度行った教育内容教育方法を見直し改善していくことが重要である。今後もNP制度化にむけ、医療者、看護者、国民の理解と、行政に働きかけていくことが求められる。

1-22 健康増進プロジェクト

構成員 稲垣 敦、桜井 礼子、平野 互、平木 和宏、江藤 真紀、赤星 琴美

本プロジェクトの目的は、「健康増進に関する研究とそれらの知見に基づいた、あるいは広く健康増進に関する地域貢献を行うこと」である（平成20年度第1回プロジェクト会議議事録）。平成22年度の年度目標は、「51-a) 健康増進プロジェクトでは地域との連携を深め、健康増進関係の情報を地域に提供する、52-b-1) 健康増進プロジェクトでは県民の健康に役立つ研究をさらに推進する、52-b-2) 来年は本事業における新たな研究課題での競争的研究費の獲得に努めると共に、現在の継続課題を推進し、地域貢献を図る」であった。今年度を実施した事業を以下に示す。

【研究活動】

- ・ 高齢女性の生活習慣と健康関連体力・主観的健康観との関連
- ・ 高齢者の転倒における視力と筋力の関連性
- ・ ウォーキングと半身浴の快眠効果
- ・ ウォーキングとダンベル体操の冷え性緩和効果
- ・ 歩行や踏み台昇降運動による高齢者用最大酸素摂取量の測定理論（日本体育学会第61回大会、豊田9/9）
- ・ 階段昇りを用いた高齢者用最大酸素摂取量の測定理論（第69回日本公衆衛生学会、東京10/28）
- ・ 介護予防運動「お元気しゃんしゃん体操」の効果の性、年代、初期水準による差異（日本体育測定評価学会第10回大会、金沢2/27）
- ・ 高齢者用最大酸素摂取量の測定機器の企業との共同開発
- ・ 姫島村高齢者の健康・長寿と身体活動量、体力、生活習慣の関係
- ・ 森林ウォーキングのストレス低減効果（大分県森林整備センターに協力、実験11/6、報告会12/22）

【地域貢献・社会貢献】

- ・ 転倒予防教室を野津原地区ほか6箇所で開催（9～10月）
- ・ 介護予防運動指導を県内各地で開催（別府ビーコンプラザ、大分市社会福祉センター、竹田市保健福祉センター、九重町保健福祉センター、佐賀関市民センター、姫島村離島センター、ほか）
- ・ 地元劇団による介護予防普及（森岡校区公民館5/14、ほか）
- ・ 大分トリニータHG観客の健康チェックを学生ボランティアと実施（大分銀行ドーム6/6：参加者120名、10/17：参加者130名）
- ・ 大分トリニータ選手2名およびグッズ販売の若葉祭参加（5/23）
- ・ 大分トリニータコーチを授業（健康運動）及びフットサルサークルの練習に招聘。
- ・ 第36回富士見が丘団地運動会で健康チェックを実施（横瀬小学校、10/24雨天中止）
- ・ ななせの里まつりで来場者の健康チェックをボランティアと実施（11/7：参加者500名）
- ・ 姫島健康づくり指導員を40名養成（養成講座12/22、1/6、2/18、2/20）。
- ・ 姫島にウォーキングコースを設置（測定2/21-22、3/4）
- ・ ソニーセミコンダクタ九州大分テクノロジーセンター「35歳健康セミナー」講師（11/18）
- ・ 介護予防運動標準プログラム（大分県版）の実態調査（n=2837）の解析（県福祉保健部高齢者福祉課に協力）
- ・ 介護予防メニューの手引き作成（10,000部配布、大分市社会福祉協議会に協力）
- ・ お元気しゃんしゃん体操のポスター作成・配付（6,000部）
- ・ 大分県スポーツ学会および第2回学術集会（12/23）の運営に協力

【広報活動】

- ・ 第69回日本公衆衛生学会総会の紹介ブースで活動を紹介（東京、10/27-29）
- ・ 「高齢者の転倒と歩行」分担執筆（脱稿9/30）
- ・ 若葉祭（5/22-23）、オープンキャンパス（7/18）でのパネル展示
- ・ 大学パンフレットで活動を紹介
- ・ 佐賀関ケーブルテレビで講演の模様を放送。
- ・ 佐賀関ケーブルテレビで「お元気しゃんしゃん体操」の指導番組を朝晩放送予定。
- ・ ケーブルテレビ姫島で事業報告会を45回放映（撮影2/20、放映2/21-25）

- ・ ケーブルテレビ姫島で「お元気しゃんしゃん体操」の指導番組を毎日3回放映予定（お元気しゃんしゃんガール結成2/21、撮影3/28）
- ・ 姫島事業のHPを立ち上げ、姫島村HPのトップページにリンク
- ・ 姫島の事業をYou Tubeで動画を放映中

今後の課題

- ・ メンバーを増やす。
- ・ 学生ボランティアの協力を増やす。
- ・ 学術雑誌で研究成果を報告する。

1-23 看護系全体会議

構成員 草間 朋子（学長）、市瀬 孝道（学部長）、看護系教員全員

看護系全体会議は4月、6月、12月の年3回定例で開催した。

第1回目は、平成22年度実習の教員配置および基礎看護学援助論の支援教員、実習関連ワーキンググループによる看護技術修得プログラムや総合実習について、地域実習や助産学実習に関する説明、基礎看護学・看護アセスメント学実習の報告を行った。基礎看護学実習は平成21年度入学生に対して新カリキュラムが導入され、1年次での実習となった実習報告がされた。今年度は看護アセスメント学実習で新カリキュラムが導入され、実習目標などの見直しの計画が報告された。その他、3月に特定看護師（仮称）が厚労省から提案されたこと、平成23年度入学生からは保健師・助産師は大学院教育となり、看護師は学部4年間で教育することなど、大きな変化や動きについて学長から報告された。

第2回目は、保健師・助産師の大学院化に伴う看護師のカリキュラム変更が必要となり、平成23年度改正新々カリキュラムについて最終調整を行い、実習は6段階実習となる。また養護教諭2種のカリキュラムも検討していることが報告された。実習関連ワーキンググループによる第1段階技術チェックの説明、第2段階（総合看護学）の協力依頼、新カリキュラムに向けての看護技術チェックの単位化の検討、改善した看護技術習得シートの報告、また初期体験実習、総合実習、地域看護学実習、老年看護学実習IIの終了報告がされた。9月から開始される第4段階看護学実習についての説明が行われた。

第3回目は、来年度からの保健師・助産師の大学院教育に関し、母性看護学研究室と助産学研究室とすること、地域看護学研究室は保健師教育の公衆衛生看護、保健管理学研究室は在宅看護を中心に教育することが報告された。NP教育について現状報告がされた。基礎看護学実習や看護アセスメント学実習についての説明、第4段階実習および助産学実習の終了報告、実習関連WGより総合看護学の報告と第3段階技術チェックの説明がされた。初めて行ったNP実習報告、平成23年度看護学実習日程が確認された。

平成21年度改正カリキュラム、平成23年度改正カリキュラムが同時進行していくため、実習に関する変更点やその意図を看護教員が共有し理解していけるよう、情報交換を密にとる必要がある。

2 学内行事の概要

2-1 学年暦

前期

4月

6	入学式
7	オリエンテーション
7,14	健康診断
8	2～4年次生授業開始
8,9	新入生オリエンテーション
8～21	前期履修登録
12	1年次生授業開始
23	全学スポーツ交流会

5月

10～	地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ(4年次生)
19	キャンパススクリーンデー
22,23	若葉祭

6月

14	前期後半授業開始
14～	助産学実習・前半(4年次生選択)
16	学生大会
～18	地域看護学実習, 老年看護学実習Ⅱ(4年次生)
19	開学記念日
21～	総合実習(4年次生)

7月

～2	総合実習(4年次生)
6～13	初期体験実習(1年次生)
18	オープンキャンパス
21	夏期休業開始
～23	助産学実習・前半(4年次生選択)

8月

23～	助産学実習・後半(4年次生選択)
28	大学院(博士前期)入学試験
29	編入学, 大学院(博士後期)入学試験

9月

～3	助産学実習・後半(4年次生選択)
5	夏期休業終了
6～	成人, 老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護学実習 (3年次生)
30	前期授業終了

後期

10月

1	後期授業開始
1～15	後期履修登録
30	看護国際フォーラム

11月

21	特別選抜試験(推薦・社会人)
～26	成人, 老年Ⅰ, 小児, 母性, 精神看護学実習(3年次生)

12月

1	後期後半授業開始
3	卒業研究要旨提出締切(4年次生)
10	卒業研究論文提出締切(4年次生)
13,14	卒業研究発表会
23	冬期休業開始

1月

7	冬期休業終了
11～21	基礎看護学実習(1年次生)
14	大学入試センター試験準備(2,3,4年次生休講)
15,16	大学入試センター試験
31～	看護アセスメント学実習(2年次生)

2月

～15	看護アセスメント学実習(2年次生)
下旬	看護師・保健師および助産師国家試験
25	一般選抜試験(前期)および特別 選抜試験(私費外国人留学生)
28	後期授業終了
28	進級試験(2年次生)

3月

1	春期休業開始
12	一般選抜試験(後期)
18	卒業式

2-2 オープンキャンパス

平成22年度は平成21年度の参加者アンケート結果を確認して企画して運営した。日程は昨年度同様、夏休み最初の3連休中日の7月18日(日)に実施し、参加者は261名であった。昨年午後の参加者が少なかったことから、本年度は10時から14時の1回開催とした。結果的には、参加人数は昨年同様の人数であった。説明会・体験イベントなど教職員全員と学生43名で取り組んだ。食堂も営業し、約80名の利用があった。教育・研究の展示は研究棟1階の廊下にパネル展示を吊り下げ形式で統一した。また、教員7名の研究紹介を掲示した。学生自治会によるTAKIOソーランや学生の話が聴ける合格体験発表や在学生からのメッセージ、教員による模擬授業3講義は好評であった。在学生が学習相談や実習室への誘導にも協力していたので、高校生や保護者には入学後の学生イメージをもつことができたと思われる。

2-3 公開講座

一般市民を対象として「感染症とたたかう」を共通テーマとする有料公開講座を4回実施したほか、学外会場を使用して、「地域の暮らしを豊かにする看護専門職」と題する有料公開講座を実施した。また若葉祭において、ミニ公開講座を無料で開催した。

「感染症と戦う」

- ・感染症予防のための基本的な健康管理法 (志賀 壽美代、伊東 朋子; 7/8)
- ・微生物感染症に対する医薬品の働き (吉田 成一; 7/15)
- ・高齢者がかかりやすい感染症とその予防 (小野 美喜; 7/22)
- ・子どもがかかりやすい感染症と予防接種 (江藤 真紀、井ノ口 明美、下山 優恵; 7/29)

「地域の暮らしを豊かにする看護専門職」(於アイネス大会議室; 7/25)

- ・知っていますか? 訪問看護 (佐藤 弥生)
- ・住民のみなさまの健康を支える診療看護師 ～全国に先駆け養成を開始して～ (藤内 美保)

「若葉祭」ミニ公開講座(5/15および5/16)

- ・簡単な理科実験 (岩崎 香子、岡崎 寿子、佐藤 みつよ)

2-4 第12回看護国際フォーラム

大分県看護協会と共催である看護国際フォーラムを本年は「高齢社会における健康とケアを学際的に考える」をテーマに、平成22年10月30日(土)に別府ビーコンプラザ国際会議場で開催した。米国から2名、韓国から1名、国内から1名の講師を招聘した。参加者は220名と盛況であった。

2-5 第10回NP国際会議

平成22年11月28日(日)に、本学にて、第10回国際会議をNPプロジェクトと協力して開催した。米国ミシガン州のサギノーバレー州立大学から1名を講師として招聘した。

2-6 第13回大分看護科学大学・ソウル大学研究交流会

今年度は第11回NP国際会議として、「在宅ケアにおける診療看護師の役割」をテーマに、平成23年3月17日（木）に本学23講義室で開催した。米国ワシントンDCのワシントンホスピタルセンター、韓国保健診療員看護協会および国内の北海道医療大学から1名ずつの講師を招聘した。

2-7 看護研究交流センターセミナー

「看護職のキャリアアップー魅力ある専門領域への第一歩」をテーマとし、平成22年10月16日（土）13時30分～16時30分、卒業生2名を講師として招き、セミナーを開催した。学部生を含む卒業生と教員27名が参加した。講演および講師は以下の通りである。

講演1：「訪問看護に求められるもの」

講師 栗山 誓子（1期生/前鶴巻訪問看護ステーション看護主任）

講演2：「小児看護の道を歩む」

講師 池田 桃子（3期生/大分大学医学部附属病院小児病棟 小児CNS課程修了）

セミナー参加者へアンケート調査を実施し、今後の研修テーマについてもニーズ調査を実施した。ホスピス、移植看護、専門看護師の実践についてなど、専門化した看護実践への関心が高く、次回の研修計画に反映していけるよう検討していきたい。

2-8 姉妹校学生交流

ソウル国立大学校派遣学生受け入れと交流：

ソウル国立大学校看護大学から大学院生2名の長期派遣（6月20日～7月4日までの2週間）、学部生6名、教員1名の短期派遣（6月20日～27日までの8日間）を本学に受け入れ、日本の医療・保健・福祉制度、看護について理解を深めた。本学では、学生および教員がサポートグループとして交流を支援した。

本学の学部生および大学院生の派遣：

大学院生2名を長期派遣（8月15日～8月29日まで2週間）、学部生6名と同行教員2名を短期派遣（8月22日～29日まで8日間）としてソウル国立大学校看護大学に派遣した。韓国の医療・保健・福祉制度、看護について視察等行い、理解を深めた、報告はWebに掲載した。

2-9 若葉祭（大学祭）

5月22日、23日に開催された若葉祭では、学生の企画・運営の相談や支援を行い、教員イベントの募集や調整をした。参加者は2日間で約1350名であった。実習室の廊下に大学紹介のパネルに掲示して概要を示し、さらに研究室のパネルによって大学の教育研究をわかりやすく示した。教員イベントは、学生との共催として、実習室・実験室を開放して、高齢者、妊婦などの疑似体験、救急法の体験、放射線や組織切片の展示などによって看護大学の教育内容や設備の紹介を行った。また、アロマハンドマッサージや猫車といった来場者に親しみを持ってもらうイベントも開催された。同時に、研究紹介として、7人の教員のポスターの掲示と、産学官共同開発の柚子の力の試飲を行った。公開講座として、子ども向けの理科実験を開催した。

2-10 地域ふれあい祭

平成22年度の地域ふれあい祭りは、大分市主催の大分七夕祭り、チキリンばやし市民総踊り大会に参加する方法で、県民との交流と本学の広報を目的として開催した。当日の参加者は教職員30名と学生40名の70名であった。竹町ドーム広場で健康チェックを実施し約250名の測定や進学相談を行った。女子学生や女性教職員は浴衣姿で、男性教職員や男子学生は大学法被姿で練習して臨んだチキリン踊りを披露した。

2-11 アニュアル・ミーティング

平成22年度アニュアルミーティングを、平成23年3月8日に公開形式で開催した。先端研究3題、プロジェクト研究3題、奨励研究6題、一般演題7題に加えて、新たな取り組みとしての看護研究交流センター交流セッションに学外から1題の発表（計20演題）があった。学外からの参加者は4名であった。

発表演題と発表者は下記に示すとおりである。

- 1) カルボニル化合物尿毒症物質の骨代謝に対する影響－岩崎 香子
- 2) マウス脾臓細胞を用いたユズ果皮抽出物のアレルギー軽減効果の検討－定金 香里
- 3) 胎仔期粒子状物質の暴露が出生仔免疫担当細胞に及ぼす影響－吉田 成一
- 4) In vivoにおけるバイスタンダー効果の割合の検討－小嶋 光明
- 5) 造血幹細胞移植患者に対する口腔ケアを行うためのアセスメントシートの検討－田中 佳子
- 6) 新型インフルエンザ (A/HINI) の流行に対する学級閉鎖の実態とその効果の検討－河野 梢子
- 7) 終末期およびクリティカルケア領域実習で目指す学生像－臨床指導者の視点から－江月 優子
- 8) (看護研究交流センター交流セッション) 大分赤十字病院の継続教育における看護研究の位置づけと支援－竹中 愛子
- 9) 低リスク妊産婦への院内・院外助産に関する助産師側の受け止め方と支援方法－猪俣 理恵
- 10) 保育所における慢性疾患・障がいをもつ子どもへの看護職の支援と専門職としての役割－田中 美樹
- 11) 市町村が実施する「こんにちは赤ちゃん訪問」に関する母親の満足感に関連する要因－赤星 琴美
- 12) 一精神科病院における12年間の体力テストの取り組み－大賀 淳子
- 13) 日本の看護系大学における国際看護学の位置づけ－桑野 紀子
- 14) 医療における苦情解決－患者死亡事故例の分析－平野 互
- 15) 今年度のCALL学習の現状と今後の取り組み－渡邊 寿子
- 16) CBTシステムの開発と試用－臨地実習生の質の確保のための看護系大学共用試験 (CBT) の開発的研究－佐伯 圭一郎
- 17) Webカメラを用いた簡易応答確認装置－吉村 匠平
- 18) 看護技術e-learningシステム開発プロジェクト－伊東 朋子
- 19) 健康増進プロジェクト－稲垣 敦
- 20) 慢性期NPが実施できる医行為の同定プロセスおよび具体的行為に関する研究－藤内 美保

3 教育活動

3-1 平成23年度入学者選抜状況

1) 概要

選抜の区分及び募集人員、入学者選抜試験の概略は次表のとおりである。

選抜の区分及び募集人員

学部	学科	入学定員	募集人員					
			一般選抜		特別選抜			
			前期日程	後期日程	推薦		社会人	私費外国人留学生
県内	県外							
看護学部	看護学科	80人	35人	10人	30人	5人	注1) 5人以内	注2) 若干名

注1) 社会人の募集人員「5人以内」は推薦の(県内)30人に含める。

注2) 私費外国人留学生の募集人員「若干名」は前期日程の35人に含める。

入学者選抜試験の概略

(単位:人、倍、%)

区分		志願者	受験者	合格者	競争率	入学者			
						計	県内(率)	男(率)	
特別	推薦	県内	75	75	30	2.5	30	30(100.0)	1(3.3)
		県外	23	23	5	4.6	5	0(0.0)	2(40.0)
	社会人	5	5	1	5.0	1	1(100.0)	0(0.0)	
	計	103	103	36	2.9	36	31(86.1)	3(8.3)	
一般	前期	155	151	40	3.8	34	9(26.5)	3(8.8)	
	後期	227	122	13	9.4	12	6(50.0)	1(8.3)	
	計	382	273	53	5.2	46	15(32.6)	4(8.7)	
合計		485	376	89	4.2	82	46(56.1)	7(8.5)	

試験教科等

区分	教科	試験期日	出願期間
特別	推薦	総合問題、面接 平成22年 11月21日(日)	平成22年 11月1日(月)~11月8日(月)
	社会人		
一般	前期	総合問題、面接 平成23年 2月25日(金)	平成23年 1月24日(月)~2月2日(水)
	後期	総合問題、面接 平成23年 3月12日(土)	

2) 特別選抜試験

① 推薦選抜

大分県内外の高等学校卒業見込者の中から、各高等学校長が推薦した生徒を対象に、総合問題と面接により実施した。

② 社会人選抜

社会人としての実体験から看護学への強いモチベーションを持った学生を確保することにより、教育・研究への活性化を図るため、また、生涯学習の要請に対応するため、社会人選抜を実施した。

年齢が満 24 歳以上で、社会人の経験を 3 年以上有し、大学入学資格を有する者を対象に、総合問題と面接により実施した。

3) 一般選抜試験

平成 23 年度大学入試センター試験で本学が指定する教科・科目（下表参照）を受験した者について、分離分割方式（前期日程、後期日程）により試験を実施した。

なお、本学で実施する試験は、前期日程、後期日程ともに総合問題と面接により実施した。

日 程	教科名	科 目 名	教科・科目数	
前 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）（必須）	4 教科 6 科目	
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ・数学B』		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」から 2 科目を選択		
	外国語	『英語』（リスニングを含む）		
後 期 日 程	国 語	『国語』（近代以降の文章）	4 教科 4 科目	
	地理歴史 公 民	「世界史A」、「世界史B」、「日本史A」、 「日本史B」、「地理A」、「地理B」、 「現代社会」、「倫理」、「政治・経済」 から 1 科目を選択		3 教科 3 科目 を選択
	数 学	『数学Ⅰ・数学A』、『数学Ⅱ』、 『数学Ⅱ・数学B』から 1 科目を選択		
	理 科	「物理Ⅰ」、「化学Ⅰ」、「生物Ⅰ」 から 1 科目を選択		
	外国語	『英語』（リスニングを含む）		

注 1) 「国語」については、「近代以降の文章」の得点のみを合否判定に用います。

注 2) 「地理歴史・公民」、「数学」及び「理科」において、複数科目を受験した場合は、高得点の科目をその教科の得点とし、合否判定に用います。なお、後期日程については、「国語」、「地理歴史・公民」、「数学」及び、「理科」の全ての教科を受験した場合には、高得点の上位 3 教科を合否判定に用います。

注 3) 前年度大学入試センター試験の結果は利用できません。

注 4) 上の指定科目をすべて受験していなければ、本学が実施する個別試験を受けられません。

3-2 平成23年度3年次編入学試験状況

1) 一般概要

就業看護職員等の生涯学習に対する強いニーズに対応するため、3年次編入学試験を、看護系短期大学、看護系大学又は看護系専修学校の専門課程を卒業した者及び卒業見込者を対象に、英語、総合問題及び面接により実施した。

募集人員

学 部	学 科	募集人員
看護学部	看護学科	10人

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区 分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県 内 (率)	男 (率)
大 学	0	0	0	—	0	0(0.0)	0(0.0)
短期大学	1	1	0	—	0	0(0.0)	0(0.0)
専修学校	8	7	2	—	2	2(100.0)	0(0.0)
合 計	9	8	2	4.0	2	2(100.0)	0(0.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成22年 11月21日(日)	平成22年 10月18日(月)～10月25日(月)

2) 助産学概要

平成22年度は募集を停止した。

3-3 平成23年度大学院看護学研究科博士課程(前期)入学試験状況

1) 看護学専攻

概要

看護職の指導的役割を担う人材を育成し、地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、大学卒業者等又は看護師、保健師、助産師の資格を有し3年以上の実務経験がある者を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。(実践者養成については、このほか「専門問題」を実施した。)

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域	募集人員	
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	研究者養成	3名	
			実践者養成	NPコース	5名
				管理コース	2名
				広域看護学コース	5名
				助産学コース	(10名)

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
修士課程	16	16	9	1.8	9	4(44.4)	1(11.1)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接 専門問題	平成22年 11月21日(日)	平成22年 10月18日(月)～10月25日(月)

2次試験

概要

11月実施した看護学専攻実践者養成広域看護学コースでの試験結果、合格者が1名しかいなかったため、再度募集を行ったが、出願がなく試験は実施しなかった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	専攻領域	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	看護学専攻	実践者養成 広域看護学コース	5名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接 専門問題	平成23年 2月6日(日)	平成23年 1月4日(火)～1月21日(金)

2) 健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職

の人材を育成することを目的として、大学卒業等又は厚生大臣が行う医療関係職種为国家試験に合格し、資格を取得し3年以上の実務経験がある者を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（前期）	健康科学専攻	2名

試験の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内（率）	男（率）
修士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	1(100.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成22年 11月21日（日）	平成22年 10月18日（月）～10月25日（月）

3-4 平成23年度大学院看護学研究科博士課程（後期）入学試験状況

1) 看護学専攻

概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、修士の学位を有する者等を対象に募集したが、出願がなく試験は実施しなかった。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	2名

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成22年 11月21日（日）	平成22年 10月18日（月）～10月25日（月）

2) 健康科学専攻

概要

看護の基礎科学の教育・研究に携わることのできる人材（看護職及び非看護職）を育成すること、および医療・保健・福祉の領域で看護学を十分に理解し、チーム医療を支える非看護職の人材を育成することを目的として、大学卒業者等又は厚生大臣が行う医療関係職種の国家試験に合格し、資格を取得し3年以上の実務経験がある者を対象に、「総合問題」及び「面接」により実施した

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	健康科学専攻	2名

試験の概略

(単位：人、倍、%)

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入学者		
					計	県内(率)	男(率)
博士課程	1	1	1	1.0	1	1(100.0)	1(100.0)

試験科目等

試験科目	試験期日	出願期間
総合問題 面接	平成22年 11月21日(日)	平成22年 10月18日(月)～10月25日(月)

進学相談

概要

本学に進学を希望する高校生等に本学の入試情報や受験についてPRするため、看護協会や業者主催の進学相談会に参加した。県内16カ所、県外2カ所、計18カ所に教員及び職員を派遣した。全体の来場者は、県内5,230人、県外2,278人、計7,508人であり、本学の説明を受けた学生及び保護者は、県内256人、県外31人であった。

また、高大連携の観点から、県内外の高校等の進路指導担当教員を招いて学内で進学説明会を開催した。来場者は32校、33名であった。

平成23年度大学院看護学研究科博士課程（後期）進学審査状況

看護学専攻

概要

より高度な専門性を有し、看護職の指導的役割を担う人材を育成し、もって地域社会における健康と福祉の向上及び看護学の発展に寄与することを目的として、本学大学院博士課程（前期）を平成23年3月修了見込みの者を対象に、特別研究に関する発表、面接及び出願書類を総合的に評価して選抜した。

募集人員

研究科名	課程名	専攻名	募集人員
看護学研究科	博士課程（後期）	看護学専攻	若干名

審査の概略

（単位：人、倍、％）

区分	志願者	受験者	合格者	競争率	入 学 者		
					計	県内（率）	男（率）
博士課程	2	2	1	2.0	1	1(100.0)	0(0.0)

審査科目等

試験科目	試験期日	出願期間
特別研究 面接	平成22年 8月30日（月）	平成22年 8月2日（月）～8月9日（月）

3-5-1 生体科学研究室

1 教育方針

当教室ではあらゆる医学の基盤となる解剖学・生理学・生化学の教育を担当する。人体を発生・分化・構造形成から生理・代謝機能、さらには病態形成まで連関して理解・考察できる、加えて生への尊厳と畏怖を備えた医療人を育成することを教育方針としている。

2 教育活動の現状と課題

生体構造論として細胞から個体レベルまでの人体の成り立ち（解剖学）を、生体機能論として生命活動・生活行動を営むための人体の生理機能（生理学）を、両者を連鎖させながら教育している。生体代謝論として生体分子の特徴と代謝ならびに健康増進のための食物情報について教育を行っている。教育形式はテキストに準じた講義を主体としているが、学習要点と臨床医学的情報などを補填した学習材料を配布している。また、人体の構造・機能的特殊性に基づく病態生理や臨床医学的事項についてレポート作成を課すことで、自学自習による医学的興味と学習効果の向上を図っている。既に幾人かの学生からは解剖学・生理学が最も面白く好きな学科であるとの有難いコメントを頂いているが、すべての学生の医学に対する興味を大いに引き出し、自らが学ぶ姿勢を育て上げるための体制・環境や人体解剖実習教育を確立、充実させていくことが今後の課題である。

3 科目の教育活動

1) 生体構造論

1年次 前期

下田 浩、岩崎 香子

生命体としての人体の成り立ちを理解し、細胞から組織・器官・個体レベルまで人体の構造と機能形態学的特徴を説明できることを学習目標とし、人体の正常構造について系統的に概説した。さらに、「だから・なぜ」を中心に、臨床医学的側面より見た局所解剖学ならびに人体の解剖学的特徴と疾患の発生、病態生理との関連について概説した。加えて、自学自習、自らの考察を促すために、臨床医学的事項についてレポート作成を指導・評価した。

2) 生体機能論

1年次 前期

下田 浩、岩崎 香子

生命体としての人体の構造と機能を統合的に理解し、細胞から組織・器官・個体レベルまで生命活動・生活行動を営むための人体の生理機能を説明できることを学習目標とし、人体の生理機能について構造的特徴と連鎖させながら概説した。さらに、臨床医学的側面より見た生体機能調節システムならびに生理機能と疾患の発生・病態生理との関連について概説した。加えて、自学自習、自らの考察を促すために、臨床医学的事項についてレポート作成を指導・評価した。

3) 生体代謝論

1年次 後期

安部 眞佐子

生化学の教科書に沿って、生体分子の種類や性質について説明をした。生体内での反応がイメージできるように、低分子から高分子へと話しをすすめ、酵素、ビタミン、ミネラル、ホルモンや生理活性物質の性質と役割を説明した。クエン酸回路、電子伝達系、酸化リン酸化をとおして、エネルギー産生をするメカニズムを講義し、代謝の異常では、病態の生化学的な基礎の説明をした。そのうち、栄養学にすすみ、食事バランスガイドと6つの基礎食品の関連性、食事摂取基準の個々の項目、栄養状態の評価について講義した。ほぼ毎回、学生が調べた事項をプレゼンテーションする時間を作り、生体分子に親しみをもてるよう配慮した。

4) 健康科学実験 I 組織学 1

下田 浩、安部 眞佐子、岩崎 香子

細胞から組織レベルの人体の構造を熟知することは疾病の発生・進展や病態生理を理解する上で不可欠である。本実習では、器官の組織形態を理解し、各器官の構造と機能発現を説明できることを学習目標としている。組織学1では呼吸器と消化器の組織標本を光学顕微鏡で観察し、自らの目で記録・スケッチし、それを考察・完成させていくことを指導した。そのために通常のH.E.標本のみならず、多種多様の染色標本やオリジナルの組織細胞学図譜による学習材料の補足を行った。これより、生体組織の精緻な機能形態を把握し、解剖生理学の学習で得られた知識と統合することで、細胞から組織・器官・個体レベルまでの人体の理解に努めた。記録・スケッチは学術的視点より評価を行った。

5) 健康科学実験 II 組織学 2

下田 浩、安部 眞佐子、岩崎 香子

細胞から組織レベルの人体の構造を熟知することは疾病の発生・進展や病態生理を理解する上で不可欠である。本実習では、器官の組織形態を理解し、各器官の構造と機能発現を説明できることを学習目標としている。組織学2では泌尿・生殖器と内分泌器官の組織標本を光学顕微鏡で観察し、自らの目で記録・スケッチし、それを考察・完成させていくことを指導した。そのために通常のH.E.標本のみならず、多種多様の染色標本やオリジナルの組織細胞学図譜による学習材料の補足を行った。これより、生体組織の精緻な機能形態を把握し、解剖生理学の学習で得られた知識と統合することで、細胞から組織・器官・個体レベルまでの人体の理解に努めた。記録・スケッチは学術的視点より評価を行った。

4 卒業研究

- ・直腸における脂肪の吸収・輸送経路の機能形態学的解析
—直腸粘膜内リンパ管の機能形態について—
- ・尿毒症物質ホモシステインの骨芽細胞に与える影響
- ・尿毒症物質カルボキシメチル・リジンの骨芽細胞に与える影響
- ・小腸における脂肪の吸収・輸送経路の機能形態学的解析
—小腸粘膜内リンパ管の機能形態について—
- ・ホームページ「ままごはん」の作成と評価
- ・母親の食事と母乳中のドコサヘキサエン酸との関連について

1 教育方針

生体反応学研究室では看護の専門基礎分野の科目である病理学、薬理学、微生物学を看護の視点から理解させることを目標として教育を行っている。外的・内的要因に対する生体反応、これによって発症する様々な疾病、その発生メカニズム、薬の作用、病原微生物による生体反応を科学的に理解することによって、体の変調や病気の成り立ち、回復過程を科学的に捉え、これらから得た知識が2～4年次の看護実習や将来の看護実践に結びつけられるように看護の基盤教育を行っている。

2 教育活動の現状と課題

本生体反応学研究室では生体反応学概論、生体反応学各論、病態特論、微生物反応論、感染免疫学、生体薬物反応論の講義を担当している。看護学を学ぶ学生はこれらの専門基礎分野の科目の理解度が低く、2～4年次での実習に結びつけられていない場合が多い。また2年次で行なっている進級試験でもこれらの科目の正答率は低い。それ故に、看護実践を行ううえで、様々な外的、内的要因によって起こる疾病・病態や薬理作用を十分に理解しておくことの重要性を認識させ、より看護の視点からこれらの科目を理解できるように講義を進めることが重要である。教育上の工夫として、生体反応学各論では、看護専門基礎の看護疾病病態論の講義に繋げるために、系統別疾患を病理学総論の病気の基本事項と結びつけて理解させるのに努めている。生体薬物反応論では基礎的な薬物の作用から臨床に用いられている薬物について幅広く講義を行なっている。

3 科目の教育活動

1) 生体反応学概論

1年次 後期前半

市瀬 孝道

本講義は一般的には病理学総論と言われものである。病気の本体や成り立ち、修復過程が理解できるように、以下に示す病気の基本となる病変について具体的な疾患名や臨床症状等を挙げながら講義を進めた。学生が各種疾病の成り立ちや病態を理解し易い内容の易しい教科書を選択し、更に教科書を分かりやすく整理したプリント配布して講義を進めた。講義内容は以下に示すとおりである。退行性病変、進行性病変、代謝障害、循環障害、炎症、免疫、感染症、腫瘍、先天異常、小児・老人性疾患。

2) 生体反応学各論

1年次 後期後半

市瀬 孝道

これまで行って来た生体反応学演習を本年度開始された新カリキュラムから生体反応学各論とし、系統別に発生する疾病（病理学各論）についての講義を行った。病理学総論から各論へと疾病の基本から系統別疾患の病態を十分に理解させるのに努めた。講義内容は以下に示すとおりである。消化器疾患、循環器疾患、呼吸器疾患、泌尿器疾患、生殖器疾患、内分泌疾患、血液疾患、脳・神経疾患、運動器、感覚器。

3) 微生物免疫論

1年次 後期

吉田 成一、西園 晃

微生物と生体、環境との関わり、特に微生物感染症について、および病原微生物に対する生体の防御反応について、理解させることを主要な目標として、以下の項目について講義した。微生物の特徴、消毒・滅菌法、感染症、各種感染症とその原因、免疫学、アレルギー、自己免疫疾患、腫瘍と免疫。講義プリントを配布することで学生の学習がしやすくなるよう努めた。

学生にとり難易度の高い内容に関しては、異なる角度から講義することにより、理解度が上がるよう努めた。また、受講者は講義を受けるだけでなく、自ら学習し知識を習得しないと身に付かないと言うことを適宜、喚起した。同様の分野を他教科でも行っているが、関連性を見出していないことが問題であり、疾患との関連を持たせた講義内容で講義を行ったが、有効性については確認出来なかった。

4) 生体薬物反応論

2年次 前期

吉田 成一

疾病の薬物治療に用いる医薬品の作用原理に主眼を置き、薬物を投与した際の生体反応（主作用及び副作用）を中心に講義した。特に総論を始め、薬理作用の基礎知識の正しい理解が可能なような講義を行った。教科書を2冊指定するとともに、臨床での話題を織り交ぜたが、2年次生が医薬品に関する事柄を実習で体験していないため、効果は不十分であった。また、出席率が低いことと、講義範囲が広範囲にわたることから、復習を行わず、修得度が低い状況が続いている。来年度は講義内容を大幅に変更し、全体の底上げが必要である。

5) 病態特論

4年次 前期

市瀬 孝道

これまで教科書中心で病気や病態を講義してきたものを、本講義では臓器の肉眼観察や、組織の顕微鏡観察をすることによって、より深く病気を理解させることを目的として行っている。例年どおり、県立病院の臨床検査部において、炎症や代謝障害を起した臓器、種々の臓器に発生した良性腫瘍や悪性腫瘍の肉眼観察や病理組織標本の観察を行い、実際に眼下に起きている病態を理解させた。3回目の講義ではト部先生によるスライドによるプレゼンテーションも取入れた。

6) 健康科学実験 III 血液検査

定金 香里

ラット静脈血を用い貧血・感染症に関わる血液検査の実技実習を行った。検査内容は、マイクロヘマトクリット法を用いたヘマトクリット値測定、CRP定性キットを用いた血中C反応性タンパクの検出、視算法による赤・白血球数測定で、それぞれの検査で、学生各自が各々の検査値が正常か異常かを判断した。またディフクイック染色した末梢血白血球および組織中炎症細胞の形態観察も行った。貧血を評価する基準についても考察した。

7) 健康科学実験 IV 基礎微生物学実験

吉田 成一

環境中に細菌が存在することを確認させる目的でヒトの表皮、日用品に常在する細菌を培養し、観察した。さらに手洗いによる指先に付着している細菌数の変化を測定した。また、温度によって細菌の増殖に差があることを視覚的に認識した。細菌が抗生物質により発育が阻止されることを認識させる目的で薬剤感受性試験を行った。各種病原微生物の抗生物質に対する感受性を測定し、臨床使用時での使い分けについて考察した。

8) 健康科学実験 V ラットの解剖

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

ヒトの構造を知る一手段としてラットの解剖を行った。ラットを開胸、開腹後、系統立てて臓器・器官を観察し、臓器の相対的位置や相互の関連性について理解させた。また、各臓器を摘出して、色、大きさ、重さ等を測定、スケッチすると共に生きた臓器を実際に触れてその形状や感触を理解させた。スムーズに解剖が進行する工夫として、先にデモンストレーションを行いながら十分に方法や内容を説明した。また、心脈管系の図を白板に詳しく描き、実物と比較しながら理解させた。

4 卒業研究

- ・風送黄砂が気管支喘息病態を持ったマウスに与える影響
- ・風送黄砂がマウススギ花粉症に与える影響
- ・大気中の粒子状物質が精子運動能に与える影響
- ・粒子状物質が引き起こす雄性生殖機能低下を阻止する抗炎症薬・抗アレルギー薬の基礎的研究
- ・ダニ排泄物抗原で誘発したアトピー性皮膚炎に及ぼす黄砂の影響
- ・好乾性真菌アスペルギルス抽出物をアトピー性皮膚炎発症部位に塗布したときの影響

3-5-3 健康運動学研究室

1 教育方針

健康運動学研究室では、まずは体を動かすことの楽しさを体感するとともに、生物の進化等を通して、人間が機能を正常に維持するには、ある程度の運動が必要であることを知り、個人、社会、人類にとって運動がいかに重要であるかを理解することを目指している。また、理解するだけではなく、在学中に自分の健康・体力を維持・増進するために運動量を確保し、将来のために自分に合った運動習慣を身につけることも目指している。学生時代から健康と運動の関係を自分の問題として捉えることにより、将来、自分の健康管理に役立つだけでなく、他者（患者、地域住民、生徒）に対して実感を伴った看護、保健指導、健康教育、保健事業の立案ができるようになる。また、高校までは科学的知見を覚えるという学習をしてきているが、「科学」自体については教育されていない。そこで、学部及び大学院の授業や研究指導の中では、科学自体や科学的なものの方などを学ぶ機会を取り入れている。

2 教育活動の現状と課題

授業では、看護系の授業や実習を視野に入れて、学生のレディネスにも配慮しながら、授業を構成してきた。今後も、自己から他者へ、過去から未来へ、体験から指導へ、経験から理論へ、個から集団へ、基礎から専門へという流れを考慮して、体験と科学的知見に基づいた教育を進めることを意識している。

大学時代は一人暮らしになり、食事、運動、休養がおろそかになる場合も多い。さらに、本学では体育に相当する授業は1年次だけであり、運動クラブに所属する学生も少ないため、体力の低下や体脂肪率の増加も心配される。男子学生の中には放課後に自主的にスポーツを行っている学生もいるが、全体的には思いっきり体を動かす機会が少なく、ストレスが溜まっており、自律神経活動の低下やアンバランスも危惧される。このような点を考慮して、授業では実習を入れて体を動かす機会を増やす努力をしている。今後も、他の研究室の人的資源を活用して、学生の運動量や体験を増やしたり、2年次以降の選択科目として自主的にスポーツを行う科目等について検討したい。

3 科目の教育活動

1) 身体運動科学

1年次 後期

稲垣 敦

はじめに科学についての授業を行い、人間固有ともいえる二足歩行や人間にはできなかった飛行について考えた。また、身体活動量や体力測定を実施して自己評価を行い、生活習慣と結びつけて考え、改善案を各自作成した。それに関連して、運動と病気・健康の関係や運動療法について講義した。

2) 健康運動

1年次 前期

稲垣 敦、中嶋 麗理、大分トリニータ

運動の楽しさや健康の素晴らしさを体感するため、多くのレクリエーションやニュースポーツを実施した。運動量の確保にも十分に配慮した。フットサルの授業では、大分トリニータのコーチ2名の指導を受けることができ、学生の評判も良かった。また、福祉レクリエーション関係のビデオを視聴し、社会や個人におけるレクリエーションの重要性、看護や介護における必要性や可能性について考えた。

3) 健康運動論

2年次 前期

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化、加齢や不活動による体力の低下などに関する科学的根拠に基づいて、体力や運動の重要性や健康との関連性を講義し、トレーニング理論と具体的な運動の仕方についても解説した。

4) 健康運動学演習

2年次 後期前半

稲垣 敦

生物の進化に伴う形態や機能の変化から、立つことや二足歩行の意味を考えた。また、看護にかかわる動作を力学的に解説するとともに、重心・平衡性、筋力・パワー、エネルギー消費量等の測定実習も行った。

5) 運動療法特論

3年次 後期後半

稲垣 敦

概論では、運動処方の流れや心電図についても講義し、各論では広く運動療法について疾患・障害別に講義した。選択科目であるが受講者が多かったため、実習としてはシングルマスター試験を行った。

6) 運動指導特論

4年次 前期前半

稲垣 敦、大賀 淳子、中嶋 麗理

他の研究室の教員や非常勤講師に協力を頂き、精神障害者の運動表現療法、子供のレクリエーション、介護予防運動、肩こり・腰痛体操、ネイチャーゲーム、ヨガ等を体験し、指導法について講義した。

7) 健康科学実験 IX 呼吸循環器系持久力の測定

2年次 後期前半

稲垣 敦

自転車エルゴメーターを用いた最大下運動負荷時に心拍数と運動負荷を測定して、心拍数と仕事率の関係、自転車の機械的効率、仕事量と酸素摂取量の関係から最大酸素摂取量を推定し、呼吸循環器系持久力を評価した。実習ではペアを組み、被検者と検者の両方を経験できるようにした。また、テキストに加えて、測定および計算の仕方を説明したレポート用紙を準備した。説明では、患者や高齢者の運動指導を想定し、安全性や倫理に関して注意すべき点を含めた。実験にあたっては、年齢、運動習慣、運動歴、現病歴や既往歴、当日の体調に配慮した。

4 卒業研究

- ・運動の冷え性緩和効果
- ・運動の快眠効果

1 教育方針

人に関する理解を基盤とし、人と喜びや苦しみを分かち合うとともに、自他の独自性を尊重することのできる豊かな人間性を養うため、心理学の知見をベースとした、人間関係に関わる基本的な知識やスキル、人間の行動や発達についての理解・洞察を深めるために必要な知識、精神看護学の基礎となる知識の習得を目的としたカリキュラムを編成している。各科目の具体的な教育目標は以下の通り。1) 環境を認識する存在としての人の機能・人の発達についての基本的知識の習得

(「人のこころの仕組み」)、2) 人間を社会や集団内の人間関係を通して理解する視点及び対人援助に関する基本的な知識の習得(「人間関係学」)、3) 人間関係を形成し維持する方法についての体験的理解(「コミュニケーション論」)、4) カウンセリングの基礎となる理論的理解とコミュニケーションスキルの習得(「カウンセリング論」)、5) 対人援助技術の習得(「行動療法論」「カウンセリング論」)、6) 発達心理学の知見をベースとした発達障がい理解(「発達心理学」)、7) 自分自身の在り方や他者とのコミュニケーションの在り方を課題遂行を通して体験的に理解する(「人間関係学演習」) 8) 看護と関わる心理学的知識についての理解(「人間関係学」「行動療法論」「カウンセリング論」「発達心理学」)、9) 人間と社会について幅広い観点から学ぶ(非常勤担当科目)(「音楽とこころ」「美術とこころ」「哲学入門」「経済学入門」「法学入門」「社会学入門」「文化人類学入門」)、「保健医療ボランティア論」)。

授業に際しては、個々の心理現象を看護実践や各自の日常生活での体験と関連づけ、援助スキルや心理検査などを体験に基づいて理解できるよう配慮している。また、授業終了毎に学生に感想・コメントの記述を求め、学生の授業理解程度や授業評価の一助としている。

2 教育活動の現状と課題

人間関係学研究室としての基本的な教育目標、人のこころに関する基本的な知識の習得、集団レベル・個人レベルでの人間関係の理解、対人援助技術の理解、についてはこれまで同様である。授業評価アンケートや授業終了後のコメントから得られたデータに関しては、備品の整備・教室変更・演習時のボランティアの活用など、教育活動の改善へと結びつけている。

他の看護系教室の講義との連携・教育内容の調整を進めること、学生の時間外学習を支えるオンライン学習システムの構築が、今後の課題である。

3 科目の教育活動

1) 人のこころの仕組み

1年次 前期

吉村 匠平

対象や自分自身を認識する存在としての人の機能の特徴、2年次前期「人間行動論」の理解に必要な学習心理学の基本的な知識、人の発達のプロセス等について、小実験・DVD視聴を併用しながら授業を行った。前年度同様、毎回くじ引きによる座席指定を行い、講義時間中にペアで行うグループワークを積極的に取り入れた。また全ての学生のコメントに対する返信を「講義Q&A」として集約し、学生に配布することで、周囲の学生の興味関心、理解状況を理解することができる環境を構築した。社会構成主義的な授業観に基づき、授業者が終了時にまとめる形を取らず、受講者が毎回レポートを作成し、それを採点して返却する形式をとった。また、授業ブログ上に自由課題を出し、

投稿した学生には平常点を配点した。講義で利用した講義資料は、全て講義ブログ上に集約し、web上のポートフォリオを作成した。

2) コミュニケーション論

1年次 前期

関根 剛

昨年と同様、コミュニケーションにおける非言語的要素と言語的要素の重要性を中心に3回のグループエクササイズ、行動観察のまとめ方と計画と実施、プレゼンテーション技術について、講義と演習を行った。具体的には、相手の発信している情報に気づく事、受け取った情報を自分がどのように理解しているか知ること（自己の振り返り）、相手に対して適切な情報を発信することである。コミュニケーションは、これら受信－理解－発信の繰り返しであることを、プロセスレコードを例に示しながら体験的に理解させた。ほかに、後期にグループワークを行うことから、リーダーシップ、メンバーシップなどについての講義も行っている。

3) カウンセリング論

1年次 後期

関根 剛

カウンセリングスキルに関する講義およびロールプレイを実施した。今年度から、以前まで利用していたカセットテープレコーダによるロールプレイの録音を、すべてICレコーダーに切り替えることができた。これにより、自分のロールプレイの録音は、USBメモリなどに保存して、パーソナルコンピュータで音声の再生ができるようになり、レポート作成などの利便性を増すことができるようになった。あわせて、レポートに音声ファイルを添付させることも可能となった。しかし、サンプリングレートが不適切であったためか、ファイルが大きくなりすぎて、送信できないケースも多かったため、次年度は、ICレコーダーのサンプリングレートの確認などを行い、音声ファイルの添付がスムーズに行くようにしたい。

後半は、前年度と同様、精神分析や認知行動療法などのカウンセリング理論および不登校や非行、犯罪・災害被害者への危機介入など、看護職に関わる可能性があるテーマを中心に、解説を行った。

4) 人間関係学

1年次 後期

吉村 匠平

今年度より2クラス編成で授業を行った。教室の机をコの字型に配列し、学生による積極的な発言を促した。前期の「こころの仕組み」同様、毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークを積極的に行った。発言単位を個人ではなくペアとすること、発言に対し平常点を付与したことなどから、参加者が積極的に発言し、意見を交流することができた。問題演習の際には、小教室・40名前後での講義であったことから、webカメラを用いないカラーカードによる意思表示を求め、受講者の理解状況を授業者と受講者の双方がリアルタイムで確認出来るようにした。web上のポートフォリオ、講義Q&A、ショートレポートシステム、ブログ上の自由課題システムについては、人のこころの仕組みと同様である。

5) 人間関係学演習

2年次 前期後半 (集中講義)

関根 剛、吉村 匠平、佐藤 みつよ

カリキュラム変更により、前年度まで行っていたカウンセリングスキルおよびロールプレイ内容を、1年次開講のカウンセリング論に移動した。そのため、今年度からは、関根、吉村、佐藤の3名が、2日間の集中講義形式により、フィンガーペインティングなど、集中講義でしかできないような内容の、講義・演習を実施した。

6) 行動療法論

2年次 前期後半

関根 剛

より実践と体験的な内容とするため、認知行動療法に関する講義、自分自身の日常的な健康行動の改善を試みるプログラム作成と実践を行わせた。これらにより、体験的に行動療法的なアプローチについて理解することが可能になったと考えられる。

7) 発達心理学

2年次 後期前半

吉村 匠平

前年度まで、カウンセリング論の前半で取り扱っていた内容を、発達心理学として独立させた。講義内容は、前半では、進化発達心理学の知見に基づき、言語発達、運動発達の「何故」に対し、受講者がお互いに意見を発表しながら講義を進める形をとった。後半では、広汎性発達障がいを中心に、障がいの特性、サポートの視座などについて、演習形式を取りながら講義を進めた。教室の机をコの字型に配列し、学生による積極的な発言を促した。毎時くじ引きによる座席指定を行い、ペアワークを行った。発言単位を個人ではなくペアとすること、発言に対し平常点を付与したことから、参加者が積極的に発言し、意見を交流することができた。問題演習の際には、カラーカードによる意思表示を求め、受講者の理解状況を授業者と受講者の双方がリアルタイムで確認出来るようにした。web上のポートフォリオ、講義Q&A、ショートレポートシステム、ブログ上の自由課題システムについては、人のこころの仕組み、人間関係学と同様である。

4 卒業研究

- ・看護学生の就職選択に影響する要因
- ・大学生のパチンコ依存行動の分析
- ・表情認知におよぼすマスクの影響
- ・音楽刺激が認知処理に及ぼす影響～リーディングスパンテストを用いて～

1 教育方針

環境保健学研究室では、環境保健学が直接カバーする知識や問題以外に、物理、化学、生物、統計学に関係する基礎的事項から社会的な問題まで広くカバーすることで、学問の奥深さを学ぶ機会を提供している。学部教育では環境保健学概論に加えて、環境保健学詳論がスタートし、基礎的な項目と社会的な問題との関連を意識しながら、学問に対するモチベーションを育成する講義となるようにしている。健康と環境は、看護の基礎にある科学的な見方として不可欠であること、健康が

どんな要因と関係しているのか、そのことを知るためにどんなアプローチがとられていて、また、どんな考え方で健康に対処しようとしているのかを環境保健の講義から学ぶように指導している。一方で、放射線は医療において不可欠な存在であることから、放射線の基礎知識から健康影響、医学利用まで保健医療に携わる者が身につけるべき知識を教授している。

2 教育活動の現状と課題

1年次から2年次に進学すると、他の科目の負担が大きくなるために、国家試験との関係が比較的薄い内容であるためか、環境保健に対する関心が低下することは従来からの課題である。2年次の環境保健学詳論では、参加型の授業を取り入れ、環境と健康の関係を自ら調べ考えるよう指導した。4年次の選択科目である「環境倫理学」は選択する学生が年々少なくなっているため、平成23年度入学生からは、他の科目と統合して「環境疫学・生物学演習」に衣替えをし、演習方式で環境保健全体に関係する課題へのアプローチを学ぶことにした。

3 科目の教育活動

1) 環境保健学概論

1年次 前期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

環境保健全般をカバーすることではなく、基本的な考え方や健康との関係を理解するための方法を中心に講義をしている。講義内容は次の通りである。1)公害から環境リスクへ：歴史、2)現代の環境問題、3)健康影響の考え方、4)がんの生物学、5)がん以外の健康影響、6)人における発がん、7)環境疫学：基礎、8)環境疫学：事例、9)安全性試験1、10)安全性試験2、11)ライフスタイルと健康、12)環境リスク論（リスクガバナンス）、13)環境リスク心理学、14)環境リスクの諸問題とまとめ、15)試験および解説

2) 放射線健康科学

2年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

放射線と健康との関係を理解するために、放射線の物理、生物、医学、リスクまでの広範囲の知識をコンパクトにして講義を行っている。その際、物理や生物は同時期に実施している健康科学実験と合わせて理解できるように配慮している。また、医療における放射線利用に対する基礎知識を持たせる。講義内容は次の通りである。

1)放射線影響と放射線防護の歴史、2)放射線とは何か、3)放射性同位元素と放射能、4)放射線と物質との相互作用、5)放射線の線量、6)身近な放射線・放射線源、7)放射線の生体応答（DNA損傷と突然変異）、8)放射線の生体応答（染色体異常と細胞死）、9)放射線の健康影響（確率的影響）、10)放射線の健康影響（確定的影響）、11)放射線リスクの評価とその不確かさ、12)安全の考え方と放射線防護基準、13)患者のための放射線防護、14)医療における放射線利用、15)試験および解説

3) 環境保健学演習

2年次 後期後半

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

課題を与え、課題ごとにレポートにまとめる作業を教員が支援するやり方で演習を行っている。課題作業に入る前に、講義を行い、ポイントを理解させる。課題は基本的な理解を必要とする内容を選び、コンピュータのエクセルと用いて計算とグラフ作成を行う技術も合わせて学ぶように工夫してある。課題は次の通りである。1)データのばらつきと基準値、2)血圧データの分布と正規性の検定、3)身長/体重/BMIデータの分布と正規性の検定、4)生命表を用いた平均余命の計算

4) 環境リスク論

3年次 後期後半

伴 信彦、甲斐 倫明

「リスク論」は現代の環境問題の背景と複雑さに関係して生まれた理論である。環境問題の解決へ向けた取り組み等について、リスクをキーワードに、社会・政策的な側面も交えて論じた。テーマとして取り上げたのはいずれも現在進行形の問題であり、学生に多角的な視点を提供するとともに、最新の情報を伝えるよう努めた。講義内容は次の通りである。環境リスク論とは、食品安全とリスク、環境ホルモンのリスク、新型インフルエンザのリスク、地球温暖化のリスク、化学物質の発がんリスク、生態リスク

5) 環境倫理学

4年次 前期後半

甲斐 倫明

環境倫理という科目名は学生には魅力がない。しかし、生命倫理との対比で見ると興味深いことから、生殖医療などの生命倫理の事例を紹介しながら、倫理問題の難しさを触れ、現代の環境倫理問題を考える講義にしている。講義内容は次の通りである。1)倫理とは、2)代理母などの生殖問題、3)現代の生命倫理学の考え方、4)人間中心主義と生命中心主義、5)現代の環境問題と倫理、6)自然の生存権の問題、7)未来世代に対する倫理の問題、8)地球の有限性

6) 環境保健学詳論

2年次 前期後半

伴 信彦、甲斐 倫明、小嶋 光明

環境と健康との関係を方法論と事例を通して学ぶために、学生に参加型の授業を導入し理解を促す配慮をした。講義内容は次の通りである。

1)物理的因子の健康影響、2)化学的因子の健康影響、3)生物的因子の健康影響、4)リスクアセスメント、5)疫学データ解析、6)リスク比較、7)リスクと便益、8)電気と電磁界、9)温熱環境と気圧、10)騒音、振動、悪臭、11)室内汚染、12)上水道と下水道、13)食品添加物と食品中の残留物質、14)食中毒、15)試験

7) 健康科学実験 VI 放射線

小嶋 光明

本実験では、自然環境中の放射線の存在と量を理解させた。また、医療の現場で一般的に用いられている診療用X線照射装置からの散乱線を定量的に測定し放射線防護のあり方について考察した。

8) 健康科学実験 VII 空気汚染と水質汚染

甲斐 倫明

医療では様々な測定が行われ、その測定値をもって判断が行われる。測定値は、測定の原理や測定条件、あるいは測定器の特性などから同じ対象を測定しても同じ数値を得るとは限らない。本実験を通して、測定値のもつ誤差および影響を与える因子による変動を区別して理解し、測定データの読み方を学ぶ。実験内容は次の通りである。1)血圧測定の誤差と変動、2)体温測定の誤差と変動、3)血液酸素飽和度測定の誤差と変動

9) 健康科学実験 VIII 染色体異常

伴 信彦

染色体の実体と染色体異常の発生機序について理解を深めるために、正常染色体および放射線によって誘発した異常染色体の標本を、学生一人一人に検鏡させた。また、染色体異常が疾患の原因となり得る例としてダウン症候群と慢性骨髄性白血病を取り上げ、核型分析等を通して異常染色体を同定させた後、疾患との関係について簡単な解説を加えた。

4 卒業研究

- ・放射線誘発バスタンダー効果による放射線抵抗性の獲得とその機構
- ・肺がん死亡率の変遷と喫煙率との関係
- ・放射線照射したマウス長期飼育後の末梢血リンパ球における DNA 損傷の誘発とその機構
- ・乳がん死亡率の低減に及ぼすマンモグラフィ検診と補助療法の効果に関する計算シミュレーション
- ・放射線の繰り返し照射による DNA 損傷の抑制効果
- ・低酸素による放射線誘発アポトーシスの抑制効果とその持続性

1 教育方針

科学的根拠に基づいた看護実践に不可欠な、情報の収集と分析、発信のための知識・技術を身につけるといふ目的に対応して、内容の検討と教育にあたっている。

指定規則上の疫学、保健統計（情報処理を含む）に対応した教育の充実はもちろんであるが、大学時代からその後を通じた学習・情報処理のツールとして、コンピュータおよびネットワークを適切に利用できる知識・技術を早期に習得できるように配慮している。

また、選択科目においては、さらに高度な内容を扱い、学生の将来の目標に応じて、高度な能力を養成することを目指している。

2 教育活動の現状と課題

情報を取り扱うICT技術の習得状況と、情報の分析・評価のための基盤となる数的処理や論理的判断のための知識・技術の水準の乖離の傾向は継続していると考えられる。従来以上に、本研究室の担当する科目に関連するレディネスの低下に対応するため、基礎的な学習の定着状況の確認と補充、講義・演習において重要であると考えている。

そのため、講義科目においては、理解の確認のための問いかけや小テスト・小レポートの実施が必要であり、基本的な内容の補足説明を合わせると、講義の時間のかなりの部分をそちらに裂くことになっているため、扱える内容を精選して、従来よりも内容的には広がりが増していることは否めない。

学生の理解と学習を助けるため、演習では3名の教員で40数名の学生を指導し個別に進度と理解を確認しながら演習を進めるという取り組みを継続している。講義科目においては教材提供・質疑応答のためのサーバを活用して、講義以外での自己学習を積極的に支援する体制を維持している。来年度においては、学部教育から保健師部分が除外されるため、従来は保健師国家試験に対応していた疫学・保健統計の部分を看護師教育の基礎的な内容に精選し、学習効果を高めるように検討を行う必要がある。

3 科目の教育活動

1) 健康情報学

1年次 前期

佐伯 圭一郎

保健師領域の「疫学、保健統計学」の講義科目として、集団の健康の指標の意味、現状、疾病と健康に関する事象の情報収集と分析の技法を教授した。基本的な数学的知識の確認と教育に「自然科学の基礎」の数学の基礎に関する講義を利用するとともに、疫学の内容に関する演習のコマを本科目内および健康情報処理演習において実施し、具体例による理解と演習による確認を図っている。

次年度以降は、学部1年生のカリキュラムは看護師のみの養成となるが、基本的な集団の健康情報の理解としての保健統計学はほぼ現状を維持し、疫学についてはEBNの基盤となる知識の充実という観点から内容の検討を行う予定である。

2) 生物統計学

1年次 後期

坂口 隆之、佐伯 圭一郎

統計学の基本的な知識・考え方を教授した。講義前半は記述統計について、後半は推測統計について扱った。講義全体を通じて、学生が主体的に取り組めるような課題づくりを意識した。前年度までと大きく変更した点は、計算のウェイトを減らし、十分に考えて記述させるレポートを与えたことである。これは、統計学の基礎概念を多角的な視点からとらえる訓練をすることで、統計学の誤用・乱用を避ける力を身につけさせることを意図したものである。この取り組みは、次年度以降も検討を重ねながら継続したい。

3) 健康情報処理演習

1年次 通年

品川 佳満、坂口 隆之、佐伯 圭一郎

パーソナルコンピュータを活用して、学習や保健医療の場における情報管理の道具として役立つための技術について演習形式で教授した。主な演習内容は、ネットワークの利用（WWW、メール、ファイルサーバ）、ワードプロセッサ、表計算、プレゼンテーション、ホームページ作成、画像処理、データベースの利用、統計データの分析である。また、演習に加えて、実際に医療現場で扱う情報システム（オーダーリングシステム、電子カルテシステムなど）について講義形式で解説を行った。さらに、コンピュータの技術的な面だけでなく、ネットワーク、情報セキュリティ、情報モラルなど情報を扱う上で重要となる知識についても解説を行った。今年度は、講義中に行った演習や講義に関連する課題や練習問題を毎回の講義後にサーバにアップし、技術や知識のチェックが各自で行えるようにした。

4) 実務情報処理学

4年次 前期後半

佐伯 圭一郎

本年度も、主に保健師領域における具体的なトピックを扱い、各回の講義で一つずつ完結した形をとった。扱った内容は下記の通り。

- ・疫学および保健統計、統計学の復習
- ・尺度の作成と評価
- ・デザイン（印刷物や建築物）の考え方と事例
- ・統計パッケージ演習応用編
- ・因果推論の手法
- ・食中毒の疫学手法

デザインの回については実務に携わっている外部講師を依頼し、データ処理については演習を含む形で実施した。履修者は23名と比較的少数であったが、保健統計・疫学の総まとめとなるとともに、実務における応用力を養った。

4 卒業研究

- ・コホート要因法に基づく大分市の将来人口シミュレーション
- ・新卒看護師の離職願望に影響する要因―就職後1年以内に行われた調査報告より―
- ・禁煙指導の効果に影響する喫煙者の生活背景
―禁煙外来における調査報告を対象とした文献研究―
- ・ネット上の健康情報に関する質の評価の試み
―ブログにおける食習慣とコレステロールに関連する記載について―
- ・同一課題を反復思考した場合の健常者における脳血流量変化
―完全閉じ込め状態ALS患者の意思判定装置への応用を目指した基礎的研究―
- ・病院Webサイトにおける看護部ページの情報発信内容調査
―看護師による情報提供の現状と課題―

3-5-7 言語学研究室

1 教育方針

言語活動の四技能であるSpeaking, Listening, Reading, Writingをバランスよく伸ばすことを念頭に、将来の専門分野で役に立つ英語が身に付くよう、実用的で易しい英語コミュニケーション (Speaking, Listening) に取り組ませている。また、人間としての感性を養うという観点を含め、英語処理能力を高めるために、易しい英語で書かれた様々な分野、ジャンルの英語読本を積極的かつ多量に読ませる「多読」を導入、実施している。更に、教室内での活動を課外でも維持継続できるよう、CALL (Computer Assisted Language Learning: コンピューターを用いたウェブ学習システム) によるTOEIC対策英語学習プログラムを実施している。

2 教育活動の現状と課題

ネイティブ・スピーカー教員の授業では、自作の教材を毎回配布し、学生はパートナー同士、または、小さなグループで英語コミュニケーション (Speaking, Listening) を練習する。1年次の講義内容は、一般的な日常生活の話題 (Food, Shopping, Home, その他)、2年次の講義内容は、看護英語である。各話題について3-4週間かけてじっくり練習を行い、同じ学生が毎回同じグループに含まれないように配慮することで、新鮮な気持ちで楽しく学習できるよう工夫している。応用可能な文法・語法の講義をもとにして、学生同士で授業ごとの討論課題について英語で意見交換などの言語活動を行う。また、1年生前期の授業では、CALL学習を必修授業として取り入れている。授業を二部構成とし、上記の自作教材を用いたグループでの英語コミュニケーションの練習と、CALL学習を行なう。1クラスを2グループに別け、グループ毎に交互に講義を行っている。両者をバランスよく組み合わせ、学生の英語運用能力の維持、向上を目指す。

日本人教員の授業では、授業を二部構成とする。前半では、英文テキストの日本語訳を最初に配布し読ませることで、テキストの内容を理解、把握させ、それをもとに、課題となるテキスト部分についての語彙、文法、発音についての講義を行う。こうした基本的な理解を基盤として、ネイティブ・スピーカーの発話を音声CDで確認し、実際に発声の反復練習を行う。講義で取り扱った課題テキスト部分は次週までに暗唱できるようにしてることが課題となり、次週には実際に暗唱 (含む筆記) できるかの確認を行う。後半では、易しい英語で書かれた書物を、辞書を用いることなく読み、総読書語数100万語を目指す多読を実施する。「辞書は使わない・分からない部分は飛ばす・つまらない本は途中でやめる」を原則に、学生自らが読む本を自由に選択することで学習動機を維持しつつ、英語運用能力の維持、定着、向上を目指す。

言語能力の向上には継続学習が不可欠である。しかし時間的な制約もあり、教室内での活動は限定的にならざるを得ない。そこで、年間を通し、全ての学生 (1~4年次生、大学院生) が自ら自由に英語学習に取り組めるよう授業外での多読教材の貸し出しや、CALLシステムによるTOEIC対策

のための英語学習、学習期間前後のTOEIC IP試験を実施している（前期：1年次生必修。後期：全ての学生を対象に希望制にて実施）。受講した学生は、真剣に取り組み、結果として学習効果の向上がみられた。

CALLシステムについては、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月18日（日）のオープンキャンパスにて、午前・午後1セッションずつ合計2回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

学生の英語学習に対する意欲の維持や学習活動の継続を図るべく、日々学習環境の整備を模索している。さらに魅力的な教室内活動の実現と自主的な学習へのきっかけ作りをいかに構築していくかが今後も継続課題である。

3 科目の教育活動

1) 英語I-A1

1年次 前期

宮内 信治

英語の音声については、母音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、ディケンズやエマーソン、ソローなど19世紀以降に著された文学、哲学の英語名文集を教科書として用いた。テキストに併記されている日本語訳を参考に、その解釈に至る基本的な文法の理解を深め、添付の音源CDを活用してスムーズな音読を習得すべく、発声練習を試みた。学んだ英文を帳面に書写し、次の講義までに暗唱音読ができるようにすることを課題とした。現代においてもなお規範となる英文テキストの一部を暗唱をすることにより、英語の世界の教養の一端を体得できたと思う。多読による総読書量は、前期期間中一人平均31000語。最も多く読んだ学生の語数は68000語。

2) 英語I-A2

1年次 後期

宮内 信治

英語の音声については、子音を中心に発音記号と発声法について確認と練習を行い、その定着を図った。講読では、前期と同じ教科書を用いて、ホイットマン、ラッセルの作品に触れて理解を深めると同時に、国際的に著名な日本人が英語で著した規範的名文の一端に触れた。新渡戸 稲造「武士道」、岡倉 覚三「茶の本」、鈴木大拙「禅と日本文化」を読むことで、日本人とはいかなるものか、という問いに答える英語を、書写と音読、暗唱で体得した。多読による総読書量は通年で一人平均61000語。最も多く読んだ学生の語数は156000語。

3) 英語I-B1

1年次 前期

Gerald T. Shirley

This class had two components: an eight-week-long Computer Assisted Language Learning (CALL) session, and speaking and listening activities in the classroom. The CALL session focused on listening, reading, and grammar problems. Students took the TOEIC test before and after the CALL session. In classroom work, a topical syllabus was used. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities were used to maximize student interaction. Classroom work was learner-centered rather than teacher-centered, so students had to participate actively in every class.

4) 英語I-B2

1年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

5) 英語II-A1

2年次 前期

宮内 信治

原書Word PowerMade Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識を習得しつつ、性格を描写する語彙、医療職者を表す語彙を学び、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間の中ほどと終了直前には、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。

6) 英語II-A2

2年次 後期

宮内 信治

前期に引き続き、原書Word PowerMade Easyを用いて、英語語彙の増強を図った。医療職者を含めた実践者(practitioners)と、科学者についての語彙を学習し、さらにそこから派生する様々な語彙についての習得に努めさせた。学習した次の週に単語小テストを課し、学習の確認と評価とした。期間の中ほどと終了直前には、教科書本文の中から教員が指示した原文について、音読暗唱の課題を与え、評価した。多読による総読書量は一年次からの通算で後期終了時一人平均176000語。最も多く読んだ学生の語数は335000語。

7) 英語II-B1

2年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

8) 英語II-B2

2年次 後期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

9) 英語III-A

3年次 前期

宮内 信治

講読担当 医療、看護、心理に関係のある英単語に関して、ギリシャ語、ラテン語起源の語源についての知識をもとに単語の意味の成り立ちを理解させ、関連する語彙の習得と英語語彙数の増強を図った。

10) 英語III-B

3年次 前期

Gerald T. Shirley

This class used a topical syllabus. A wide variety of relevant and meaningful speaking and listening activities on everyday topics were used to maximize student interaction. These activities helped students to improve their speaking and listening abilities, increase their fluency in speaking and listening, help them gain self-confidence in communicating in English, and teach them how to use learning strategies. This was a learner-centered class rather than a teacher-centered class, so students had to participate actively in every class.

4 卒業研究

- ・外国人留学生に対する看護職の対応について—健康診断時の対応に焦点をあてて—
- ・外国人妊産婦への対応における困難さについて
- ・外国人が見る日本人看護師の印象
- ・大分県の医療・福祉従事者の方言理解度についての調査・分析
- ・0県の外国人留学生の医療機関受診に関する実態調査

3-5-8 基礎看護学研究室

1 教育方針

看護学の導入部分として看護の歴史やその発展及び看護理論を理解するとともに援助方法の基礎について学ぶカリキュラムを実施している。初学者であり、自らの看護に対する姿勢、看護の本質を考える機会としている。講義・演習・実習を行うにあたっては、個々の科目の学習進度にそって具体的な看護実践と関連づけたり、一人ひとりの学生の理解度や興味・関心について考慮しながら教授している。特に少ない講義・実習時間の内容をより効果的に履修させるための講義・実習前の予習プリントや講義・実習後のレポート指導などの事前・事後指導を強化している。

2 教育活動の現状と課題

さまざまな背景をもつ学生に対して、看護専門職について理解し、将来の進路に対しても方向づけができるように、教材の準備には時間を割いている。講義では学生が主体的に学ぶようにグループワークの展開・発表方法を変えてみた。演習の実技指導のデモンストレーションでは事例を提示し、根拠をおさえながらなぜその方法なのか考えさせるように展開した。また事前に、教員の演習をビデオ撮影・放映して、技術手順が学生にも十分理解できるように視聴覚器材の活用に努めた。今年度も昨年と同様に看護技術評価表に基づき、技術の展開に応じた技術ポイントの解説内容を入れたDVDを作成した。基礎看護技術のe-learningシステムに取り込み、小テストと合わせて学生が学習するように義務づけた。今後DVD数を多くして、学生が主体的に学習し、看護技術が習得できるようシステムの完成に努力したい。

3 科目の教育活動

1) 看護学概論

1年次 前期・後期前半

志賀 壽美代、伊東 朋子

看護学の導入として看護とは何か、看護の本質と機能および看護専門職の役割と活動について理解させ、自らの看護に対する興味関心を高揚させることができるように配慮した。初期体験実習の事前準備も兼ねて、看護の場である様々の領域について調べさせ、グループワーク活動を通じて成果発表の時間なども設け、積極的な参加が可能となるように教材を精選した。

2) 生活援助論（生活過程）

1年次 前期後半

志賀 壽美代、伊東 朋子、秦 さと子、塩月 成則、神取 美恵子

生活援助論の生活過程の学内実習は、2人1組を基本的枠組みとして2コマ続きの展開としている。演習の実技指導のデモンストレーションでは事例を提示し、根拠をおさえながらなぜその方法なのか考えさせるように展開した。また事前に、教員の演示をビデオ撮影・放映して、技術手順が学生にも十分理解できるように視聴覚器材の活用努めた。少ない時間数を補うためにも積極的に課外での時間を有効活用させて技術試験や筆記試験に臨ませている。

3) 看護理論入門

1年次 後期

志賀 壽美代、伊東 朋子

さまざまな理論を学び、対象理解のための概念や理論を学習することで実践に活用できるよう、講義、演習、グループワークを行った。

1)看護理論とは、2)患者理解のための基礎理論、3)フローレンス・ナイチンゲールの理論、4)ヴァージニア・ヘンダーソンの理論とその枠組みに基づいた記録の演習、5)ヒルデガード・E・ペプロウ、アーネスティン・ウィーデンバック他の理論で構成した。

評価は出席状況、試験（実習の事例を理論で振り返る、グルーグループワークでの役割や学びを今後どのように活用するかなど）で評価した。

4) 生活援助論（生命維持）

1年次 後期前半

志賀 壽美代、伊東 朋子、秦 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、石田 佳代子、赤星 琴美、高波 利恵、桑野 紀子、井ノ口 明美、平木 和宏

生活援助論生命維持の学内実習は、援助技術習得のために2人1組を基本的枠組みとして、2コマ続きの展開としている。少ない時間数を補うためにも積極的に課外での時間を有効活用させて、技術試験や筆記試験に臨ませている。今年度も昨年と同様に看護技術評価表に基づき、技術の展開に応じた技術ポイントの解説内容を入れたDVDを作成した。基礎看護技術のe-learningシステムに取り込み、小テストと合わせて学生が学習するように義務づけた。

5) 基礎看護学実習

1年次 後期後半

志賀 壽美代、伊東 朋子、藤内 美保、石田 佳代子、塩月 成則、神取 美恵子、河野 梢子、田中 佳子、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、薬師寺 綾、大賀 淳子、津隈 亜弥子、桑野 紀子、井ノ口 明美、平木 和宏、下山 優恵、栗林 好子

既習科目の理論と実践が統合できるように実習前指導・実習後指導には特に力を入れている。患者1名を受け持つ本格的な実習としては初めての学習であるため、実習施設の看護部長による講話を施設ごとに持ち、実習に対する動機づけを行った。また今年度は1週目に看護師に同行実習することで、患者に接近でき、看護の役割が理解できるよう試みた。実習終了後に各病棟1事例をまとめ発表会を持ち、また、看護理論の発表で実習の学びを共有できるようにした。

6) 医療技術論

2年次 前期前半

志賀 壽美代、伊東 朋子、秦 さと子、塩月 成則、神取 美恵子

医療技術習得のために2人1組を基本的枠組みとして2コマ続きの講義を行った。また、少ない時間数を補うためにも積極的に課外での時間を有効活用させて技術試験や筆記試験に臨ませた。

7) 看護と遺伝

2年次 前期後半

定金 香里、岩崎 香子、吉河 康二

講義前半では、中学・高校レベルの遺伝学の講義数を1回増やし、基礎的な遺伝の仕組みをしっかりと学習することに重点を置いた。メンデル遺伝および遺伝疾患発現、遺伝子変異が関与する疾患や体質との関連について講義し、看護師として知るべき単一遺伝子疾患の遺伝メカニズムを理解できるように配慮した。講義後半では臨床遺伝学の立場から、メンデル遺伝病、多因子遺伝病、ミトコンドリア遺伝病、および染色体異常症について概説した。さらに、遺伝学的検査の概要を述べるとともに、実際の遺伝カウンセリングにおいてどのように応用されるのかについて述べた。

4 卒業研究

- ・筋萎縮性側索硬化症患者の人工呼吸器装着に対する意思決定支援
- ・学生の基礎看護技術修得のための学習状況の実態調査
- ・認知症高齢者の食事援助に関する文献検討ー食事介助の事例検討を通してー
- ・新卒看護師の就職後6ヶ月後の職務ストレスと情緒的支援の実態
- ・打診技術修得におけるスクラッチ法併用の有用性
- ・加齢性嚥下機能の変化ー嚥下機能低下予防介入時期の検討ー

3-5-9 看護アセスメント学研究室

1 教育方針

看護アセスメント学は、基礎看護科学講座に位置づけられ、人の健康問題を科学的にアセスメントできる能力を養うことを目的としたカリキュラムを実施している。看護の基盤となる人間科学講座で教授された内容との融合を図りつつ、身体的、心理的、社会的側面から看護学の視点でアセスメントできることがねらいである。現在教授している具体的な科目は、「看護疾病病態論I」「看護疾病病態論II」「ヘルスアセスメント」「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」「看護アセスメント学実習」である。主要な疾病の理解や病態の理解、さらにヘルスアセスメントにおいては、看護師の五感を活用し頭部からつま先まで身体の観察ができる能力を身につけ、身体的なアセスメントができる知識・技術に加え、これらを踏まえて健康障害をもつ患者の看護過程の展開ができる基礎的能力を身につける。看護過程は、講義を行い、さらに演習でペーパーペイシエントによる個人およびグループワークでの看護過程の展開を行い、臨地実習で受け持ち患者をもち看護過程の展開を行う。講義・演習・実習へと段階的に進めていき、専門看護学領域への基盤とする。

2 教育活動の現状と課題

今年度は平成23年度改正カリキュラムの学生に対して行う授業科目が多く、新たな視点で講義内容の構築の見直し、方法論の検討を行った。改正カリキュラムで新たに加わった「看護アセスメント概論」「看護アセスメント演習」の科目により、看護アセスメント学実習でスムーズに実習することができ、学生の到達度も向上した。看護アセスメント学実習では、看護過程の評価までできることとし、到達目標を高くしたが、全員目標を達成し、クリティカルシンキングやアセスメントの思考プロセスが高まった。今後、さらにヒトの構造や機能、病態との融合を図りつつ、人間を包括的に観る視点と分析的に観る視点を深め、エビデンスに基づいた判断ができる能力を身につけることが課題である。

3 科目の教育活動

1) 看護疾病病態論Ⅰ

1年次 後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。アレルギー・膠原病・感染症、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚、消化器、呼吸器、腎疾患を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。後期後半の途中に基礎看護学実習が行われるため、学生は疾患をしっかりと学ぶ必要性を認識するようである。

2) 看護疾病病態論Ⅱ

2年次 前期前半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

主な疾患に関する病気の概念、症状・検査・治療などを中心に講義形式で行う。脳・神経系、代謝・内分泌系、生殖器系、血液・造血器系、感覚器系の眼・耳・鼻・皮膚を行った。各系統の解剖や生理の基礎的知識を想起させながら教授した。教科書は系統看護学講座シリーズを使用するとともに、進級試験の範囲である病気の地図帳、健康の地図帳を活用し、配布資料も提供して教授した。専門的内容が多いため、中間試験を実施して、知識の獲得ができるよう配慮した。

3) ヘルスアセスメント

2年次 前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

ヘルスアセスメントでは、身体的側面からの観察に主眼を置き、ヘルスアセスメントの意義、基本技術、健康歴聴取、消化器系、呼吸器系、循環器系、脳・神経系、運動器系のアセスメントについて、講義・演習を行った。講義と学内実習は、別の日に実施するように変更したことで、学内実習に臨むにあたっては事前に復習する姿勢が確認できた。さらにこれまで既習した知識・技術を活用することを目的に高齢者のボランティアグループに協力を得て、フィジカルイグザミネーションをさせていただき、高齢者へのインタビューや、正常と異常の判断、フィジカルアセスメントの技術等を効果的に学んだ。

4) 看護アセスメント概論

2年次 後期前半

藤内 美保、石田 佳代子

看護過程の展開の基礎的能力を身につけるため、看護過程の概要、看護過程と基礎理論、アセスメント、看護診断、計画、実施、評価について、講義およびペーパーペイシエントによる個人ワークを行いながら、理解を確実にした。個人ワークでは提出されたレポートを2人の教員で添削したが、約80名の学生の膨大なレポートを毎週添削するには限界があったが、共通する学生の問題については毎回フィードバックを行った。ペーパーペイシエントはイメージしやすい糖尿病事例を用い、身体面、心理面、身体面からのアセスメントが必要な事例で看護過程を展開させた。

5) 看護アセスメント演習

2年次 後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、河野 梢子、田中 佳子

看護過程の基本的知識を活用するために、1グループに5～6名でペーパーペイシエントによる看護過程を展開させた。事例は、4事例とし、病名や発達段階、性別、それぞれ異なる看護診断が導けるような事例を作成した。個人ワークで行っているため、一通りの看護過程の展開は各々ができるレベルであった。グループで検討することで視野が広がりディスカッションが深まったようであるが、グループで最終判断をすることには時間を要したようである。中間発表会と全体発表会を行い、患者の全体像やアセスメントの深まりは確認できたが、病態を踏まえた考え方が課題であった。看護アセスメント学実習で担当教員となる教員にも発表会に参加してもらい、実習指導の際の参考にしてもらった。

6) 看護アセスメント学実習

2年次 後期後半

藤内 美保、石田 佳代子、志賀 寿美代、伊東 朋子、井伊 暢美、江月 優子、神取 美恵子、河野 梢子、栗林 好子、塩月 成則、麻生 優恵、田中 佳子、津隈 亜弥子、津留 英里佳、平木 和宏、堀 裕子、松本 初美、薬師寺 綾

1名の受け持ち患者を持ち、看護過程を展開する基礎的能力を身につけることを目的にした。県立病院8病棟、大分赤十字病院4病棟、アルメイダ病院4階東西、5階東西の計16病棟に3～6名の学生を配置した。1年次の基礎看護学実習で配置された同じ病院で異なる病棟に配置をした。平成23年度改正カリキュラムの初めてのアセスメント学実習であったため、1年ぶりの実習であったが、個人差はあるものの全員が実習目標を到達した。実習中はインフルエンザ罹患学生はおらず、体調管理はおおむねできていた。実習終了後に、看護アセスメント学概論、看護アセスメント学演習、看護アセスメント学実習での進め方に関するアンケートを学生に対して実施し、課題を明らかにして来年度の改善点とする。

4 卒業研究

- ・介護保険施設での医行為必要時の連携実態と特定看護師（仮称）に求める特定医行為—NP確立に向けての展望—
- ・新型インフルエンザ（A/H1N1pdm）流行時学校で行われた臨時休業と感染予防対策についての実態調査—大分県内の小・中・高等学校に対するアンケート調査より—
- ・肘関節角度の違いによる介助動作の提言—生理学的・バイオメカニクスの観点から介助者の身体的負担軽減に向けて—
- ・救急現場における看護師による医療行為の実態と課題—三次救急医療に携わっている看護師・医師への意識調査—
- ・骨髄移植患者に対する口腔アセスメントシートに必要な要素の検討—全国の骨髄移植実施施設への質問紙調査—
- ・看護学生の臨床におけるタッチングと日常におけるスキンシップの関連

3-5-10 成人・老年看護学研究室

1 教育方針

成人・老年看護学の学習は、成人期・老年期の対象への看護実践に必要な専門知識・判断能力・援助技術を習得することを目標としている。そのため、成人看護学概論、老年看護学概論、成人看護援助論・老年看護援助論、成人・老年看護学演習、成人・老年看護学実習の各教科を設定している。援助論では専門的知識を習得するとともに、実践する力を養うために、臨床で働く様々な医療職者（医師、看護師、管理栄養士、言語聴覚師）を学外講師として招き、実際に医療・福祉現場で遭遇する対象者の理解や援助方法を学ぶことができるようにしている。さらに成人・老年看護学演習において、健康段階の特徴をとらえられるように、急性期・慢性期・終末期の模擬事例へのケアについて考え学びを深め、ロールプレイを通して関連の看護技術習得する機会を取り入れている。その上で、成人・老年看護学実習では、医療機関や老人施設において、知識・技術・態度を統合した看護の実践を学ぶことができるようにしている。

2 教育活動の現状と課題

成人・老年看護学は青年期から老年期までの長いライフスパンにある対象者への看護の学びであり、その学習範囲は非常に広範囲にわたっている。そのため限られた時間数の中での学習内容と方法を吟味しながら展開している。成人・老年看護学概論では基礎となる対象者の理解と看護について学生が考えることが必要であり、見近かな成人・老年者をとらえながら、対象者を理解するための理論を学習し思考を深められるように配慮している。講義方式だけではなく事例展開し、学生の主体的学習方法を取り入れるようにしている。また、成人・老年看護援助論や成人・老年看護学演習では、幅広い年齢層の対象理解や多様な疾病とその治療方法や援助方法の理解を助けるために、具体的な事例、機械器具を提示し臨床経験のない学生の関心と学習意欲を高め印象に残る講義をするようにしている。講義や試験などの質問対応、解答等の時間確保が例年と課題であり、学生との通信ネットワークを用いた対応などフィードバックを強化することに今後も取り組んでいく。

3 科目の教育活動

1) 成人看護学概論

2年次 前期前半

小野 美喜

成人期に生じる多様な健康問題と対象へ看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける成人期の位置づけと特徴を発達課題・行動、健康の側面から総合的に理解し、看護を実践していく上で基盤となる知識を教授した。今年度より新カリキュラムとなり、講義時間数が増加したことから、学習形態としてグループワークを取り入れ、学生自身が理論を使いながら、健康障害をもつ成人の理解を深めていけるようにした。これまで概念の理解には個人差が生じていたため、グループディスカッションや文献学習を通して主体的に中範囲理論を学習できるような方法を導入し改善をみた。実習経験の少ない学生に、いかに成人事例をイメージさせるかは引き続き課題である。

2) 老年看護学概論

2年次 前期前半

小野 美喜

老年期に生じる健康問題の特徴と高齢者への看護援助の概要を学ぶ目的で、ライフサイクルにおける老年期の特徴、健康問題をもつ高齢者の身体的、心理的、社会的問題を理解し、慢性疾患や機能障害を持ちながら日常生活を送る対象への看護援助に必要な知識を教授した。特に加齢による変化をとらえ、ADLの援助と自立の拡大について思考を深められるように教授した。今年度より新カリキュラムとなり講義時間数が増加したことから、高齢者の加齢による変化とADLを実際に体験し、援助を考えていく体験型学習方法を取り入れた。また、昨年と引き続き実習施設である老人施設から外部講師を招き、施設で生活する高齢者の実情について講義する機会を設けた。認知症に伴う症状や援助役割などが実例をもって示され、学生の理解が深められた。

3) 成人看護援助論

2年次 前期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期にある対象を身体的、心理的、社会的、精神的側面から総合的に理解し、急性期および慢性期、終末期の健康問題への援助を学ぶ目的で様々な領域の看護援助について教授した。周手術期、循環器系、消化器系、内分泌代謝系の障害をもつ対象の看護援助について、学生が必要な知識と技術を習得できるように講義媒体や教授方法を工夫して授業を展開した。また、臨床現場で活動する外部講師による講義を取り入れることにより、援助論の学習内容が強化されるよう実施した。特に成人看護に重要となる技術については、血糖測定やストーマのパウチ交換などを実施し、自ら患者体験をする機会も設けた。限られた時間の中で、実施すべき技術項目を精選し技術力を強化していけるよう工夫することが来年度の課題である。

4) 老年看護援助論

2年次 後期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期にある対象を身体的、心理的、社会的、精神的側面から総合的に理解し、急性期および慢性期、終末期の健康問題への援助を学ぶ目的で様々な領域の看護援助について、教授した。高齢者によくある呼吸器系、血液・免疫系、運動器系の障害をもつ対象者や、終末期にある対象者への援助について、講義媒体や教授方法を工夫して授業を行った。特に終末期の看護については、外部講師を招きホスピスケアの実際について学ぶ機会をつくり、学生が人の終末期について考えを深められるよう展開した。

5) 成人・老年看護学演習

3年次 前期

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

成人期・老年期の対象の健康問題に応じた看護過程の展開を学習する目的で、学内演習を取り入れている。学生はすでに基礎看護学で看護過程の展開を学んでいることから、ここでは、成人期・老年期の急性期、慢性期、終末期の健康問題に着目し、紙面患者を用いた対象の理解、アセスメント、看護の診断、ケアプラン、評価修正の一連を展開した。導入として演習に必要な知識を確認し、患者の個別性のあるケアプランや評価については新たな学習内容として特に強調した。その後、周手術期患者、心疾患もつ高齢者、肝疾患をもつ終末期の成人事例をグループに割り当て、看護過程の展開を個人およびグループで実施した。昨年度から引き続き、実際に立案したプランをロールプレイし、模擬患者の反応から計画を評価する方法を強化した。例年のように教員一人が12～14名の学生を担当し、個別指導することで学生の到達度をあげている。

6) 成人看護学実習

3年次 前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、秦 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、河野 梢子、田中 佳子、高波 利恵、麻生 優恵、堀 裕子、佐藤 秋子

成人看護学実習は、成人の健康レベルにおける看護の特性や看護過程をふまえ、個々の対象に応じた看護実践を学ぶことを目的とし、77名の学生に12週間（学生一人6週間）の実習を行った。一部署の学生数の削減が課題であったため、今年度は実習施設を新たに1施設増やし、9病棟に4～6名の学生を配置した。一教員あたりの学生数が減少したため、個別対応が充実した。実習中のインフルエンザなど感染症対策については問題なく対応ができた。しかし、最近の学生の傾向からメンタルな問題を抱える学生への対応が一層教員に求められており、担当教員と専任教員、大学保健室、学生生活支援委員会との連携をとりながら実習指導にあたることを今後も強化していきたい。今後の課題は、実習上で看護スタッフとの連携を自らとりながら能動的に実践できる自律した学生を育てることであり、今後の実習指導者と教員の連携や指導方法の工夫が必要である。

7) 老年看護学実習 I

3年次 前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳、秦 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、河野 梢子、田中 佳子、高波 利恵、麻生 優恵、堀 裕子、佐藤 秋子

老年看護学実習は、高齢者の健康レベルに応じた看護の特性や看護過程をふまえ、個々の対象に応じた看護実践を学ぶことを目的とし、77名の学生に12週間（学生一人6週間）の実習を行った。一部署の学生数の削減が課題であったため、今年度は実習施設を新たに1施設増やし、9病棟に4～6名の学生を配置した。一教員あたりの学生数が減少したため、個別対応が充実した。実習中のインフルエンザなど感染症対策については問題なく対応ができた。しかし、最近の学生の傾向からメンタルな問題を抱える学生への対応が一層教員に求められており、担当教員と専任教員、大学保健室、学生生活支援委員会との連携をとりながら実習指導にあたることを今後も強化していきたい。今後の課題は、実習上で看護スタッフとの連携を自らとりながら能動的に実践できる自律した学生を育てることであり、今後の実習指導者と教員の連携や指導方法の工夫が必要である。

8) 老年看護学実習 II

4年次 前期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、井伊 暢美、江月 優子、津留 英里佳

施設に入所している高齢者の生活の支援を通して、対象を理解し、保健・医療・福祉分野における看護職の役割と課題を学ぶ目的で、大分市内および由布市内にある介護老人保健施設3施設、介護老人福祉施設2施設の合計5施設において2週間の実習を行った。1グループあたり6～10名配置であり、前半・後半に分けて実習を行った。短期間の実習ではあるが、各担当教員が施設で実際に指導にあたり、学生の学習課題が達成できるようにした。これまで、学生が教員に依存しすぎず、自らスタッフと連携がとれることを課題としてきた。今年度は、授業のため教員が実習場を不在にし、実習指導者に全面的に指導を依頼する時間があった。特に事故なく学生も積極的に指導者と連携を図っていたことから、来年度も意図的な距離を保つ指導を取り入れていく。さらに、実習最終日に共通テーマを設け、グループ討議を実施した。今年度はテーマを複数に分科し、少人数のグループとしたため、意見交換が活発に行われた。

4 卒業研究

- ・ホルモン療法を受けている乳癌患者の倦怠感とQOL～健康な女性との比較～
- ・老人保健施設で働く看護師の頓用薬使用の判断に関する研究
～緩下剤と薬の判断プロセスから～
- ・救急看護師のストレスとメンタルサポートに関する文献検討
- ・化学療法を受けるがん患者への食事援助
～食事に関する症状マネジメントに焦点をあてた文献的研究～
- ・感情に着目した高齢者への絵本の読み聞かせに関する検討
- ・一般病棟看護師ががん終末期患者の家族に対して行った看護をよいと感じる要因
- ・集中治療室看護師の死を迎える患者へのケア態度と死生観

1 教育方針

小児看護学の講義と演習、実習を通して、発達過程にある小児の保健と小児看護の特殊性を理解することをねらいとしている。そのため、小児看護学では対象である小児の成長と発達について発達理論を学び、小児の健康の維持増進・健康障害の現象に対する家族を包含する小児看護の特殊性について理解を深め、小児看護の看護過程の展開とそれに必要な援助技術を学ぶことが目的である。

小児看護学では、基礎看護科学講座で看護理論や看護技術を学んだ学生に対して、小児とその家族への関わりにおいて、小児看護の倫理を思考し小児看護の実践ができるよう成長することを期待して教育を行っている。学生が健康・不健康に関わらず小児とその家族への援助者としての態度を身につけ、肯定的な子ども観を構築できるよう配慮している。

2 教育活動の現状と課題

小児看護学の講義は、2年次前期に小児看護学概論で小児を取り巻く保健、福祉、看護などの課題を学び、学生が自分自身の「子ども観」をレポートし、自己の特性を認識するように工夫している。3年次前期・後期の講義、学内演習、実習を通して、学生は多くの小児に関する専門的知識を学ぶ。学んだ専門的知識を実習で実践し、看護場面に知識を応用することは容易なことではないだろう。学生は対象である小児とその家族と出会い、小児看護とは何かを悩みつつ、看護職あるいは大人としての役割を意識し、看護活動ができるように成長するようにカリキュラムを構成している。

最近では少子化で兄弟姉妹も少なく、小児が周囲にいない、また接したことがないという学生が少なくない。講義では視聴覚教材を多用して、動的な子どものイメージを持たせるように配慮している。毎回の講義終了後に、講義内容に対する質問や意見を求め、次の講義時間に質問に答え、学生の疑問を残さないようにしている。学生の評価アンケートを2年次の小児看護学概論で実施したが、休講などで連続性が維持できず十分ではなかった。しかし、欠席も少なく学生は意欲的に参加していた。

小児看護学の学習内容の定着については、3回に分けて小テストを行い、重要な内容の知識の定着のために工夫したり、再試験を実施してフォローした。次年度は講義コマの変更も考慮して、講義の内容を見直しする。

3 科目の教育活動

1) 小児看護学概論

2年次 前期前半

高野 政子

新カリキュラムとなり7～15コマに変更となった。主として、小児看護の特質と概要を理解することを最終的な目的としている。基本的概念として小児の特徴を発達的にとらえ、小児と小児を取り巻く環境を考え、小児保健、小児医療の動向を述べ、教育や福祉の視点からも小児看護の役割と重要性について教授した。具体的な内容は次の通りである。1)小児看護学の変遷と小児看護の特殊性、2)世界の子どもの健康と医療、3)子ども観の変遷と子どもの権利、4)日本の母子保健・行政と母子福祉、家族と親子関係、5)小児の成長と発達総論、6)小児の形態・機能的発達、7)心理的・社会的・言語的発達である。8～14回までは、乳児から学童・思春期までの成長・発達について理論

を展開した。最終回は、学生のフィールドワークの親と子の観察レポートを発表して意見交換することで、子どもを意識的に観察するように動機づけを行った。

2) 発達と援助論

3年次 前期前半

高野 政子、田中 美樹、薬師寺 綾

小児の発達過程の特質を理解するための主要理論に基づき、小児の行動を多面的に捉え、発達過程の応じた日常生活の援助方法と保健を講義し演習を行った。また、健康障害のある小児とその家族への援助方法を教授した。主な講義項目は、1)小児期の主要な発達理論、2)小児各期の発達アセスメント、3)乳児期、幼児期の保育理論と技術、4)学童期、思春期の保健と看護、5)病気の子どもと家族、6)小児の健康障害と看護、7)障害のある子どもと療養生活の援助、8)親子関係に問題のある場合の看護ほか。実習は昨年同様に、総合病院の小児病棟と療育施設の2施設で実施した。学内での技術演習は、大学院生の協力を得て6名で、援助技術として検温、静脈点滴の固定、服薬介助や離乳食の実際などを指導した。指導の方法や内容は指導者間で統一して、20名ずつの4グループに分けてローテーションする方法で指導した。一方、看護過程の展開は、グループワークで実施した事例を2グループずつ発表し意見交換を行った。

3) 小児看護援助論

3年次 前期後半

高野 政子、田中 美樹、薬師寺 綾

前半は小児領域の主要な病態と疾患について講義形式で解説を行い、後半は学生のグループワークによる主要な疾患と看護について調べ学習の作業とその発表形式で行った。

後半は臨地実習でよく出会う事例を5事例提供し、グループワークで看護過程を検討しまとめ発表する。2つのグループワークを行ったが、学生は積極的な参加を求められる学生個々に事例展開を求め、グループワークを通して互いの疑問点を話し合い発表する方法で行っている。真面目な取り組みが見られたが、一部の学生が個人ワークを軽視する傾向もあり、グループワークに全員が取り組んでいるかに注意している。

4) 小児看護学実習

3年次 後期前半

高野 政子、田中 美樹、薬師寺 綾、神取美恵子

小児看護学実習は、大分県立病院に1グループ学生9～10人で6グループ(合計57人)、別府発達医療センターに学生4人で6グループ(合計25人)の配置で、専任教員と担当教員と臨床実習指導者の連携により指導を行った。学生1人に対象児1人の受け持つことを目指したが、在院日数の短縮化に伴い、約1/3の学生は実習中に2人の受け持ちを経験した。1人の子どもを継続できた場合は、学生が遊びの工夫などもみられたが、複数の子どもを受け持った学生は看護実践まで至らないということに指導側に課題となった。3日間の保育所実習は、子どもの理解やコミュニケーションができるようになること、病児と家族への関わりがスムーズとなるので健康な子どもの保育は今後も必要と考える。実習の時期は検討課題とする。7日間のうち外来実習を半日行った。外来診療の場面に立会い子どもや家族の様子、外来看護師の指導のもと、子どもの発達に合わせた看護技術について学ぶことができた。実習では、受け持ち患児のバイタルサイン測定は全員が1～3回以上経験できた。

実習終了後、実習施設の実習指導者と専任、担当教員で実習反省会を持ち、意見交換を行った。学生の実習到達度や記録に差があると報告された。実習に対して学生が動機づけられ積極的な実習

を行えるように指導することが課題と考える。

4 卒業研究

- ・がん看護における特定の医行為に関する専門看護師の意識調査
- ・先天性疾患をもつ児の親の会代表者のやりがいと困難
- ・慢性疾患および障がいをもつ子どもへの保育士の支援と看護職との連携
- ・小児がんの告知の傾向に関する文献的研究

3-5-12 母性看護学・助産学研究室

1 教育方針

母性看護学では、女性のライフサイクルおよびマタニティサイクルにある妊娠・分娩・産褥・新生児の生理・病態と母子およびその家族への援助の理論と方法について学ぶことを目的としている。科目は母性看護学概論、母性生理・病態論、母性看護援助論Ⅰ、母性看護援助論Ⅱ、臨床母性看護総論、母性看護学実習で構成している。特に母性看護学実習は周産期に重点をおいて実習を展開している。

助産学（選択科目）では、独自の判断で助産過程（母性各期および新生児期）を展開し、さらに母子および家族の健康と福祉を促進するための理論と方法を学ぶことを目的としている。科目は助産学概論、助産診断・技術学Ⅰ、助産診断・技術学Ⅱ、助産診断・技術学Ⅲ、助産診断・技術学Ⅳ、地域助産活動論、助産学実習で構成している。助産学実習の分娩取り扱いについては、指定規則において助産師または医師の監督下において1学生10例程度取り扱うことが定められており、本学では学部生9例以上、ダブルスクール学生（大学院生）12例以上取り扱うことを基本姿勢としている。助産師教育では、卒業時点までに、変動し複雑化する社会の健康上のニーズに対応でき、母子の安全性（正常・異常の区別）が守れる判断力と実践力を持つことを教育目標としている。

2 教育活動の現状と課題

母性看護学では、学内で学んだ理論と技術を実習で実践し、理論と実践を結びつけることを目標としている。母性看護学実習では、実習施設は2か所であり、実習期間中の分娩数が施設によって異なり、学生82名中28名が分娩を見学できなかった。受け持ち患者の症例も正常褥婦だけでなく、帝王切開術後の褥婦や妊婦を受け持ち対象者として工夫している。また、施設によっては受け持ち患者の対象者が少なくなっており、受け持ち患者が初日に決定しない学生がいる時はペアーで実習を行っている。今後に向けて事前学習や実習方法の検討が必要である。

助産学は3年次に助産学専攻者を決定している。助産学の講義開始にあたっては母性看護学援助論、臨床母性看護総論と並行して講義を行っている。また、助産学実習（分娩介助実習）は6週間で正規の期間では分娩例数が到達できず夜間実習と夏休みに実習期間を延長（2～3週間の延長）して、学生と教員の自己努力によって目標数に到達しているのが現状である。学部の助産学教育は時間外実習時間が多く非常に過密であることが課題である。今後は助産学を大学院教育へ移行させて講義時間、実習時間をしっかり確保した教育を行っていく必要がある。

3 科目の教育活動

1) 母性看護学概論

2年次 前期

林 猪都子、乾 つぶら

母性看護学の基本概念および意義を理解し、人間の性と生殖の側面から、女性の生涯を通じた健康生活の促進と健康問題への援助活動を学び、母性各期における母性看護の役割と重要性について認識を深めることをねらいとして、母性の概念、リプロダクティブヘルス/ライツの概念、セクシュアリティ、母性看護の歴史、母子保健施策、母子保健統計からみた動向、母性看護に関する組織と法律、母性看護の対象の理解、ライフサイクル各期の健康と看護などについて教授した。本年度はわかりやすい授業展開に努めた。来年に向けては講義資料や内容を修正して講義内容の充実に努めていきたい。

2) 母性生理・病態論

2年生 前期後半・後期

肥田木 孜、谷口 一郎、佐藤 昌司、堀永 孚郎、宇津宮 隆史、西田 欣広、上野 桂子、関屋 伸子、乾 つぶら、樋口 幸、猪俣 理恵

女性のライフサイクルにおける性と生殖に関する生理的变化と、妊娠・分娩・産褥の母体の身体的・清里的変化、及び、胎児または新生児の生理などについて、産婦人科学的、及び周産期に特有な疾患病態生理、検査・治療について教授した。講義回数は全21回で、講義終了後に筆記試験とレポート課題によって評価した。

3) 母性看護援助論 I

2年次 後期

関屋 伸子、猪俣 理恵、戸高 佐枝子

科目の目的は、妊娠及び分娩が母児及びその家族に及ぼす影響とその看護について学ぶこととした。今年度から新カリキュラムとなり授業回数は全15回であった。そのため、授業内容は、妊娠・分娩による母体及び胎児の正常な経過とその看護について強化した。具体的には、妊娠の成立、胎児の成長と健康状態の判断、母体の身体的・心理・社会的状態のアセスメントと看護などであった。妊娠期の生理的变化が正常から逸脱しないために必要な生活の工夫や生活指導については、DVDや妊婦・胎児の模型などの視聴覚教材を用いて学生がイメージしやすいよう工夫をした。評価は科目終了後に筆記試験を実施した。学生は、看護者として母性看護を実践する際には母児を一体として捉えてアセスメントと看護実践を行う必要性を自分の言葉で述べることができていた。今後は、我が国における少子化社会という背景を踏まえて母性の発達を促す看護の理解への工夫が必要である。

4) 母性看護援助論II

3年次 前期前半

関屋 伸子、石岡 洋子、猪俣 理恵、渡辺 しおり

妊娠期・分娩期・産褥期の母子及びその家族のニーズと母性看護の役割について学ぶことを科目のねらいとした。看護師業務については、「じよく婦に対する療養上の世話又は診療の補助を行う」と保健師助産師看護師法に規定されているため、主に妊娠・分娩経過が産褥と新生児に及ぼす影響と褥婦及び新生児の看護について授業を展開した。講義回数は全14回で、そのうち1回は産科臨床における看護の実際については臨地実習施設の看護師長に講義を依頼した。学生は最新の事例や臨床看護の実際を通して母性看護における看護職の役割について理解することができ満足度も高かった。今後も教育と臨床の乖離が無くなるような授業方法の工夫が必要である。

5) 臨床母性看護総論

3年次 前期前半

関屋 伸子、石岡 洋子、樋口 幸、猪俣 理恵

母性看護の実践に必要な看護技術を理解し基本的看護技術を修得する。講義回数は全8回で、評価はレポート70%と参加態度30%とした。講義内容は、妊婦腹部触診モデルやマタニティジャケットを装着し妊婦計測や胎児心拍数陣痛図モニター装着時のケア、新生児人形を用いた新生児計測と沐浴等の基本的な母性看護における看護技術の演習を実施した。また、ウェルネスの視点からみた看護過程を用いて正常産褥と異常妊娠の2つの事例のペーパーペイシエントについて妊娠期・産褥期の看護過程の展開を行った。方法はグループワーク及び個人ワークとし、最終日にはそれぞれの立案した看護過程の発表・ディスカッションを実施した。学生はグループワークや発表会において事例のアセスメントに必要な情報や分析、診断名について熱心にディスカッションをし、また、看護技術の演習では妊婦体験や新生児人形と触れる中で看護技術を実施する際の留意点や技術の要点、説明や言葉かけの重要性に気づくことができていた。

6) 母性看護学実習

3年次 後期

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら、石岡 洋子、猪俣 理恵、樋口 幸

母性看護学実習施設は2施設であり、実習期間は1グループ2週間（延べ12週間）であった。学生および教員の人数は、堀永産婦人科医院は学生4名配置（合計24名）、担当教員1名配置、大分県立病院は学生9～10名（男子学生1名）（合計58名）、担当教員2名配置した。実習は学生1名につき妊婦または褥婦を1名受け持ち、妊産褥婦、新生児の看護について学び、母性各期の特性とニーズに応じた看護過程の展開を学習した。すべての学生に生命の誕生の場面を通して自己を振り返る実習を期待し、母性各期の保健指導をそれぞれ工夫して取り組むように努力した。本年度は分娩に見学ができなかった学生が28名いた。また、帰学日は木曜日に設けることで、記録のまとめや技術の見直し、最終カンファレンスの準備がスムーズに行えた。今年度は事前学習不足や学生が自律して情報収集ができていないことを指摘されたので、今後、事前学習や実習方法についての検討が必要である。

7) 助産学概論

3年次 前期

林 猪都子、関屋 伸子、石岡 洋子

助産の基本概念および女性をとりまく社会的背景を認識し、助産師の責務と心理、社会的変化の中で期待される役割と重要性について理解する。また、日本および諸外国における助産の歴史、助産師教育、助産師活動について理解を深め、助産師活動に積極的に取り組む姿勢を養う。さらに、生命倫理や職業倫理について学び、職業人としての倫理観を醸成することをねらいとして教授した。本年度は講義資料作成に重点をおき、小人数制で学生が授業に参加しやすい参画型の授業展開に努めた。

8) 助産診断・技術学 I

3年次

乾 つぶら、樋口 幸、佐藤 昌司、戸高 佐枝子

正常な妊娠・分娩の健康水準を診断するために必要な基礎的知識、及び、正常からの逸脱を識別するために必要な妊娠・分娩の異常に関する基礎的な知識を学ぶことを目的に、妊娠期・分娩期の助産診断、助産ケアの実施するための援助技術、保健指導等についての講義、演習、グループワークを行った。妊娠期画像診断に関しては、産科医師、及び、開業助産師と協力妊婦を外部講師に依頼し、妊娠期の超音波診断の講義と演習を実施した。学生は画像を見学したり機械操作を実施することを学んだ。産前教育では学内で指導案、補助教材等を作成して模擬両親学級を体験した。分娩期の診断技術ではレオポルド触診法、胎児心音聴取等の復習と内診・クスコ診を経験し、分娩経過と児頭回旋との関連が理解できるように骨盤模型と内診モデルを活用して講義と演習を行った。

講義、演習、グループワークすべてが参加型の活動であり、学生は積極的に発言を行い参加していた。

9) 助産診断・技術学II

3年次

梅野 貴恵、樋口 幸、和田 美智代

女性のライフサイクルにおけるセクシュアリティに関する諸問題を理解し、マタニティサイクルにある褥婦および新生児の助産診断を行い、助産を実践するために求められる内容を教授した。授業方法は講義と演習を組み合わせで行った。産褥の母乳育児支援は、実践で活躍する外部講師に2コマ依頼し、講義と演習を行った。学生は助産師の支援で母乳育児を推進していくことが可能であることを学んだ。また、授乳指導の演習を取り入れ、実際の指導場面を想定し体験していた。新生児の演習では、「新生児蘇生法アルゴリズム」に則り、新生児挿管モデルで体験した。産褥期の退院指導では、4グループに分かれ、指導案、パンフレットの作成を行い、ロールプレイで発表し意見交換や自己評価を行った。学生は、すべての講義、演習に積極的に参加した。

10) 助産診断・技術学III

3年次

佐藤 昌司、飯田 浩一、宇津宮 隆史、中村 聡、嶺 真一郎、豊福 一輝、後藤 清美、乾 つぶら

マタニティサイクルにおける女性の医学的管理と異常、並びに婦人科疾患とそれに関する健康管理、新生児医療について理解を深めるため、各専門分野の産婦人科医師、新生児科医師による講義が行われた。

学生は積極的に受講し、各領域の知識を深めることができた。

講義終了後に筆記試験を実施し評価した。

11) 助産診断・技術学IV

4年次 前期前半

梅野 貴恵、石岡 洋子、樋口 幸、猪俣 理恵

分娩期の助産診断に基づき、助産過程の展開を行い、助産学実習で活用できるように教授した。日本助産診断・実践研究会のマタニティ診断の概念枠組みを活用し、助産診断の考え方について講義を行い、正常経過をたどる初産婦の事例を用いて分娩期の助産過程の展開を行なった。学生は個人課題で取り組んだのち、グループワークを行い全体検討会を実施、教員が解説することで理解を深めた。ダブルスクールの3名は、さらに異常経過の産婦1事例に取り組み、時間外に検討会を行った。評価は、提出されたレポート、および助産過程に必要な助産の基礎知識に関する筆記試験を行った。

分娩介助演習では、助産学実習で活用できるようにするために、側面介助法、正面介助法の2通りの介助法を教授した。演習では、VTRで一通り確認したのち、教員がデモンストレーションを行い、3グループに分かれ、役割（直接介助者、間接介助者、新生児係、産婦）を決め、教員の指導のもとで実施した。学生は、最初は手順に沿って実施し、その後、空き時間を利用して一通りの分娩介助技術が行えることを目標に分娩介助評価表を用いて各自5回以上の直接介助を練習した。技術の評価は、グループの他者評価者、教員が技術チェックを行った。

12) 地域助産活動論

4年次 後期前半

林 猪都子、関屋 伸子、乾 つぶら、戸高 佐枝子

助産管理の概念について、病院・産科単科病院・助産院での助産管理、助産師活動の実際、国際化時代の助産師の役割と実践、地域の中での協働と連携、助産関連法規について必要な理論と方法について教授した。講義内容は学生の興味を重視して、事例を踏まえての展開と最新情報の提供に留意した。今後、地域での助産管理の理解を深めるために、助産所の管理についての内容を強化することが課題である。

13) 助産学実習

4年次 前期

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら、石岡 洋子、猪俣 理恵、樋口 幸

助産学実習は、人間尊重の基本理念に基づき助産の診断および技術を用いて助産を実践する。母子とその家族を受け持ち健康的な生活を営むうえで必要な援助を行う能力を養うことをねらいとして実施した。本年度の助産学選考学生は14名（うちダブルスクール3名）である。実習施設は分娩介助ができる病院、診療所4施設と助産所3施設、合計7施設である。例年分娩介助数を学部生10例程度（9例以上）、ダブルスクール学生（大学院生）12例以上を目標に実習に取り組んでいる。課題は、分娩介助例数到達のためには、夜間実習と実習期間の延長によって9例に到達していることである。今年度の学生の平均分娩介助数は10.4例であった。また、地域看護学実習から休みがなかったため、実習中に体調不良の学生が続出した。今後は実習開始を1週間遅らせて実施することが望ましい。

4 卒業研究

- ・妊娠末期妊婦の入浴時における身体の洗いにくさと姿勢及び入浴用品に関する研究
- ・助産師によるいのちと性の教育を受講した高校生の受け止め方と自尊感情
- ・産後一ヶ月の母親と家族との睡眠の関連
- ・女性の出産満足度を高める要因の文献的検討
- ・母親の母乳育児への意欲とセルフ・エフィカシーとの関連
—母乳育児継続につながる助産ケアの検討—
- ・母乳育児を行う際に母親が感じる不安内容とその支援に関する文献的研究
—1980年代と2000年代を比較して—
- ・NICUにおける愛着形成への援助—看護師の援助経験に関する質的分析—

3-5-13 精神看護学研究室

1 教育方針

精神看護学の学習では、看護のすべての領域において「人の心に焦点を当てた看護を行う」ために必要な、視点・知識・技術・態度を習得することをめざす。そのためのカリキュラムは、精神看護学概論・精神看護援助論の2つの講義、学内での精神看護学演習、臨地での精神看護学実習、という流れで構成されている。精神看護学においては「対象者理解、自己理解し、および互いの関係性の理解」が重要なので、これらは特に演習・実習を通して体験的に学習できるよう努めている。卒業研究に関しては、できるだけ各学生の関心に沿ったテーマで研究を進められるよう配慮している。

2 教育活動の現状と課題

講義では、心の健康と疾患、精神看護と医療の歴史、精神的健康問題をもつ人への援助方法などについて、できるだけ具体例を紹介し、学生がイメージをもちやすいよう努めている。演習では、上記の目的に沿った体験的学習、当事者やその家族の実際にふれる機会、実習施設等の専門職の話や聴く機会などにより、続く実習への準備性を高めることをめざしている。ここでは、小レポートなどで学生の感想・疑問・希望などを把握し、次回以降に反映させることを心がけている。実習は、精神科医療機関において、精神疾患をもつ人、その家族、およびさまざまなスタッフの協力により行っている。実習に対しては不安を抱えている学生も多いが、その不安も含め、自分について、相手について、互いの関係性について振り返ることを支援した。初めはとまどいがちの学生も、さまざまな人との関わりを通して、座学では経験できない学びと、精神科医療に対する認識を深めたようであった。教材・学習支援ツールの開発に努めること、科目間の連携をいっそう密にすること、個別の学生の状況に応じた指導を行うことなどが、不断の課題である。

3 科目の教育活動

1) 精神看護学概論

2年次 後期

影山 隆之

講義内容は例年通りであるが、疾患と病態、治療の構造と方法について重点化を図った。パワーポイントで要点を示すとともに、同じ内容を印刷配布した。精神疾患をもつ当事者にふれることができる視聴覚教材をできるだけ紹介した。出席確認を兼ねて授業内に小レポートを課し、次回にコメントを添えて返却した。これとは別に、授業の最後に、興味・理解・自由質問についての無記名式アンケートを自由提出させ、これに基づいて次の時間に補足説明をしたので、十分伝わらなかった点の確認・訂正ができた。

2) 精神看護援助論

3年次 前期前半

大賀 淳子

講義内容の精選方針は例年にならい、精神科医療および実習施設の現状を重視した。精神科医療の地域移行を踏まえ、講義の早い段階で地域における精神科医療と看護師の役割について扱った。さらに、毎回のミニレポート、ミニテストのフィードバックは今年度も踏襲し、学生の講義への積極的な参加を促すことができていると判断している（授業アンケート結果より）。毎回のポイントを明確に示すこと、ハンドアウトの資料の質を高めることが次年度への課題である。

3) 精神看護学演習

3年次 前期後半

影山 隆之、大賀 淳子、津隈 亜弥子

対象者を理解すること、自分自身を理解すること、対象者との相互作用の中で互いの関係性に着目することが、看護の実践でどのように役立つかを考えること、また入院医療以外の精神保健医療サービスについて具体的に学ぶことをねらいとした。

そのために、模擬インタビュー、精神疾患を有する当事者の視聴覚教材や、過去の自分の体験の振り返りなどを取り入れ、実習での記録様式を想定した演習ノートを用い、全体でのディスカッションや各回のリフレクションをしながら、学生の理解度に応じて学習を進めた。また、実習施設の病院長による特別講義を取り入れ、入院医療以外の精神保健医療サービスを学ぶためのグループワークでは発表会に当事者・家族・実習施設等の専門職をコメンテーターとして迎えた。

毎回提出された演習ノートには学生の高い興味や関心が示された。ただし、個別の理解度の把握や授業への積極性を把握するためには、提出様式の工夫をさらに検討する必要がある。

4) 精神看護学実習

3年次 後期前半

影山 隆之、大賀 淳子、津隈 亜弥子、桑野 紀子、栗林 好子、平木 和宏

対象者の精神的健康に焦点を当てた看護を提供するために、対象者の全体的な理解、自己理解、および対象者との相互作用の中で互いの関係性に着目することの必要性を、大分丘の上病院において具体的に学ぶことをねらいとした。また、実習を通して、精神科医療についての理解を深めることを目的とした。

前年同様、学習の場を2つ（入院治療・通院治療）に分けてスケジュールを構成した。前者（病棟実習）は全員が経験したが、後者（デイケアや訪問看護など）の実習は希望者のみ（実習施設が提示した定員枠の範囲で）となった。

学生が互いの経験を共有できるようデイリーカンファレンスの進め方に配慮した結果、通院治療や多職種の関わりについて情報共有ができ、精神科医療について理解を深めることができた。また、実習で出会うあらゆる人との人間関係の中で生じてくる感情を取りあげて、その内容を吟味することにより、自分、相手、相手との人間関係、双方を取り巻く状況についての理解を深めることができた。毎日の学びの連続性を考慮し、記録様式を集約した実習ノートを導入した結果、教員・指導者が学生の学びの経過を把握しやすくなっただけでなく、学生自身もノートを有効に利用できていたようである。最終カンファレンスの進め方を学生に委ねた結果、個人発表だけでなくテーマカンファレンスでの活発な議論によって学びを深める姿が見られた。学生自身も治療的環境の一部であることや、自身の感情をアセスメントの道具として相手との関係を構築していくことが、精神疾患を有する人への看護において重要であることが、カンファレンスやレポートで述べられていた。

引き続き、学生が意欲的に臨めるような実習構成、講義・演習との連続性について、検討を重ね改善を図ってゆきたい。

4 卒業研究

- ・就労者における、ナルコレプシーに関する認知度と理解
- ・自殺念慮者への対応のスキルと自殺に関する知識・態度との関連－看護・福祉系学生への調査から
- ・地域に住む高齢者が認知症の人に抱くイメージに関する調査
- ・自傷行為に対する大学生のとらえ方

3-5-14 保健管理学研究室

1 教育方針

地域社会で生活する人々の健康を支える看護職者に必要な知識と技術を習得するとともに、学生が自律して学習する態度を身につけて欲しいと考え、教育プログラムを組み立てている。1年次は、講義により「健康」という概念を理解するとともに、初期体験実習を通じて看護職者の活動する領域と各領域における対象者の多様な健康ニーズを学び、今後の学習の動機付けができることを目指した。2年次には、保健・福祉・医療に関する諸制度・法体系の構造とその活用に必要な基本的な考え方を、3年次では、専門職に求められる行動原則としての倫理、および地域・学校・産業などの具体的な場面における保健活動の実際を学ぶとともに、演習では健康教育の展開を通して、個人・集団に視点をあてた実践的な保健活動が理解できるような講義・演習の内容とした。

2 教育活動の現状と課題

講義においては、今日の社会の変化に応える最新の知識の提供を目指すとともに、多様な健康ニーズと社会の要請に対応できるよう内容の検討を行っている。また、1年次、2年次で学習した内容から、3年次以降の講義・演習を通して、地域で活動する看護職の活動の理解に結びつけていくために、学生が具体的に実践をイメージし理解しながら知識と技術を獲得し、さらに地域実習につなげていけるよう、具体的な事例を提示するなど講義内容を工夫した。また、学生の学習段階に合わせた講義や演習内容とするために、他の領域での講義・演習の内容から、学生の学習状況を把握するよう心がけた。

今後は、新カリキュラムとして、災害看護、在宅看護など統合領域のカリキュラム内容を充実させる必要があり、地域資源を活用したケアマネジメントができる看護職を育成していきたいと考えている。

3 科目の教育活動

1) 健康論

1年次 前期前半

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、佐藤 弥生、坪山 明寛

健康の概念と健康に対する考え方の歴史の変遷を理解し、健康の意味を考え、健康の維持・増進の重要性について学ぶことを目的とした。さらに人々の健康ニーズを把握し、健康増進活動における看護職の役割を認識するとともに、生活習慣と健康との関連を意識し、学生が自らの生活体験を通して健康を考え、また生活習慣を見直すきっかけとなるよう講義を行った。また、看護系研究室より「各専門分野における健康課題と看護職の関わり」について、講義をいただいた。

2) 保健福祉システム論

2年次 後期

平野 互

社会保障が国民のいのち・健康と生活を守るための制度的保障であることを理解するために、まず「生存権」について論じたのちに、社会保険、国家扶助および保健・医療・介護・福祉を内容とする社会保障制度の概要とその意義を論じた。また保健師に必要な行政・財政について理解するため、その概要を教授した。この学年から授業回数が15回へ縮小されたため、他の講義で詳述される項目は省略したうえで、福祉・介護をはじめ高齢化社会に求められている制度を中心に講義を整理し、できるだけ体系的に理解できるよう構成した。加えて、臨床におけるルールであるインフォームド・コンセント、個人情報保護法、ノーマライゼーションの理念など患者・障がい者の諸権利を保障するための基本理念について論じ、専門職としての行動に必要な基礎知識を獲得できるようにした。

今年は例年になく講義中の私語が多く、対応に苦慮したが、学習意欲が低く出席率が低い学生は、一様に成績も良好でないため、学習意欲の向上と講義出席への動機付けを図るために、講義の方法についても工夫の必要性があると考えられる。

3) 保健活動論

3年次 前期後期

桜井 礼子、平野 互、高波 利恵、平木 和宏

地域、学校、産業における法令に基づく保健活動のあり方と実際を教授した。看護職として個人及び集団の健康の保持・増進、疾病予防のための支援のあり方を理解するとともに、保健活動の具体的な実践方法とその評価について学ぶことができるよう講義を構成した。また、地域の救急医療の現状と災害看護活動、及び救命活動の実際を理解し、救急救命処置の一つとして心肺蘇生術の実践、AEDの使用ができるよう、日本赤十字社の協力を得て演習を行った。来年度以降、カリキュラムの改正に基づき、災害看護についての授業内容を充実させる必要がある。

4) 保健管理学演習

3年次 後期後半

桜井 礼子、平野 互、井ノ口 明美、平木 和宏

保健・医療・福祉の場において、看護職の視点から個人および集団の健康問題に対して、保健活動のひとつである健康教育の展開方法とその実践力を養うことを目指した。演習は、地域、学校、産業などの保健活動の場での事例を用いて、それぞれの健康問題を明確にして、健康教育をどのように行うか、小グループに分かれてグループワークを行った。また、保健活動の根拠法、社会制度や社会資源の活用について理解するために、事例を展開するために必要な事項に関して学生一人ひとりに課題を提示し、レポートにまとめ、学生間で共有する資料を作成した。最後に発表会で各事例についてロールプレイを含むプレゼンテーションを行い、他のグループの学びを共有するとともに、ディスカッションを通してより深い考察ができるような場とした。学生は、健康教育の対象となる個人および集団を現実的にとらえアセスメントすること、また行動変容を踏まえた効果的な健康教育のプランを考えることが難しかったようである。しかし、発表会での討論ではポイントをおさえた質疑が出され、活発な意見交換ができ、学びを深めることができていた。

5) 初期体験実習

1年次 前期（7月8日（火）～7月15日（火）の6日間）

井伊 暢美、井ノ口 明美、江月 優子、大賀 淳子、神取 美恵子、河野 梢子、桑野 紀子、佐藤 弥生、塩月 成則、下山 優恵、秦 さと子、高波 利恵、田中 佳子、田中 美樹、津隈 亜弥子、津留 英里佳、平木 和宏、福田 広美、薬師寺 綾、平野 互、桜井 礼子

初期体験実習は、3日間の施設実習と学内でのグループワーク、発表会で構成されている。施設実習を通して、看護職の活動を見学し自ら体験することにより、保健・医療・福祉の場において、看護の実践の場の広がりや看護の役割を理解すること、また対象となる人々の多様な健康ニーズを理解することを目指している。さらに、施設実習後に学内でのグループワーク、発表会を通して、今後の学習の動機付けをすることも目標としている。今年度は、大分市医師会立アルメイダ病院を実習に加え、特に施設で働く助産師の活動についての内容を盛り込んでいただいた。学生にとって第一段階の初めての臨地実習であり、学生が実習で自らが体験して学ぶプロセスも重要な課題ととらえ、学生へのオリエンテーションを充実させるとともに、担当教員にも係わってもらいながら実習をすすめることができた。

実習施設：20ヶ所

事業所：新日本製鐵株式会社大分製鐵所、昭和電工株式会社大分事務所

保健福祉施設：大分県こころとからだの相談支援センター

健診機関：大分労働衛生管理センター

学校：大分県立新生養護学校、大分大学保健管理センター

病院：大分県立病院、農協共済別府リハビリテーションセンター、

湯布院厚生年金病院、別府発達医療センター、緑ヶ丘保養園、

大分赤十字病院、国立病院機構 西別府病院、大分市医師会立アルメイダ病院

介護老人保健施設等：介護老人保健施設 わさだケアセンター、
介護老人保健施設 健寿荘、特別養護老人ホーム 百華苑、
特別養護老人ホーム 寿志の里
地域保健：大分市、由布市

6) 看護の倫理

2年次 後期（新カリキュラム）／3年次 前期（旧カリキュラム）

平野 互、小野 美喜

看護職に必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的規範に基づく判断のための思考訓練を行うことを目的に講義を行った。講義は、「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の方法」・「Profession の責任と倫理」・「生殖と誕生にかかわる倫理」・「生と死に関わる倫理」・「医療従事者の責任と事故対応」および「個人の尊重、人間の尊厳と自立支援」の7回を平野、「看護職の価値観と文化、社会規範」を小野が担当した。

講義の中で、「ケースブック医療倫理」（医学書院）をテキストに事例演習を行った。また今年から、講義時間中にミニレポートを課して、講義内容の整理と出席管理を行い、ミニレポートの提出と個人課題レポートにより成績評価を行った。

今後の課題としては、学生に予習の習慣がないためか、事例演習が双方向的な討論の場にならず、教員の注釈に終始することがあげられる。学生の主体的な講義参加を促すための工夫が必要である。

4 卒業研究

- ・個別保健指導における環境への着目の実態～0県の健診機関と事業所の保健師等に着目して～
- ・高齢女性の生活習慣と健康関連体力・主観的健康観との関連
- ・三次元動作解析を用いたヒールの高さによる歩行動作の特徴と足音との関係
- ・病院臨床における倫理課題の解決に関する実態調査
－臨床倫理コンサルテーションのあり方に関する検討－
- ・訪問看護師に求められる能力－新人看護師に求められる能力と訪問看護の魅力について－

3-5-15 地域看護学研究室

1 教育方針

看護を展開する対象として個人・集団・地域へと視点を拡大し、地域全体を包括的に捉えた看護活動をおこなうために必要となる基本的な思考力を身に付け、支援方法を学ぶことを目的とし、地域看護学概論、在宅看護論、家族看護学概論、地域生活援助論Ⅰ、地域生活援助論Ⅱ、地域看護学実習を展開している。特に今年度からコマ数が倍増になった地域看護学概論、地域生活援助論Ⅰでは、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れ、地域看護活動の現状や課題について学習が深められるようにしている。担当科目および関連領域科目との講義と演習、実習の連動性を考慮して、演習や実習の内容や展開方法に工夫を凝らしている。

2 教育活動の現状と課題

地域看護学概論、地域生活援助論Ⅰの講義では実践活動との連動性を重視し、保健所や市町村で働く保健師の講義を取り入れている。さらに、実習の場において個人・家族、集団、地域を対象とした具体的な看護展開が実施できるように、学内演習では実習場面を意識した事例を用いて、ロールプレイ等をおこなっている。開講時期が実習直前である地域生活援助論Ⅱでは、地域の健康問題を踏まえた活動内容が理解できるよう、実際に学生が実習をおこなう市町村の既存資料を基に、地域看護診断をおこなっている。また、個人・家族を対象とした支援では、新生児や生活習慣病などの事例を基に、保健師がおこなう家庭訪問における看護過程の技術を展開することで、地域での看護活動の視点や具体的な支援技術について理解し習得できるように工夫している。今後も社会の変化に対応し得る看護支援を目指して、常に教育内容を繰り返し検討していく必要がある。

3 科目の教育活動

1) 地域看護学概論

2年次 後期

江藤 真紀、赤星 琴美、藤内 修二、中野 洋子

地域における個人・家族、集団への看護活動をおこなうために、地域住民の主体性を重視し地域看護学の基本的内容について講義をした。今年度より新カリキュラムになったためコマ数が倍となったためその分、公衆衛生の概要や地域看護学の概念、プライマリ・ヘルスケアとヘルスプロモーション、地域看護活動の場の特性、地域看護活動の対象と方法（個人・家族、集団、地域社会）など十分な時間の確保ができた。また、地域看護の変遷や大分県の地域看護活動等についても教授することができた。常に資料やパワーポイント、DVDなどを活用することで学生が保健師像をイメージでき、かつ地域看護学についての理解が深められるように教授した。

2) 地域生活援助論Ⅰ

3年次 後期後半

江藤 真紀、赤星 琴美、高波 利恵、加来 理香、浜野 清子

保健所、市町村を基盤とした行政機関における地域看護活動の展開や対象別地域看護活動について講義と演習をおこなった。内容としては、地域看護活動の展開、地域におけるケアシステム、家庭訪問、健康相談、地区組織化活動（セルフヘルプグループの育成）、対象別地域看護活動（母子保健活動、難病保健活動、成人保健活動、高齢者保健活動、障害者保健活動、精神保健活動、感染症保健活動、災害看護活動）、市町村における地域看護活動などであった。保健所や市町村の保健師を講師として招くことで、地域看護活動の実際や課題などについて活動方法や事例を使いながら講義をおこなった。また、地域看護活動の一部では演習を組み入れることで、二次データの使い方、地域の健康問題の抽出、生活の場としての地域の捉え方を教授した。さらに感染症保健活動では講義と連動させた感染症法に基づく二類感染症である結核の事例を用いた演習を実施し、保健師がおこなう看護過程の展開をすることで、具体的な支援方法について学習をおこなった。演習終了後には常に学生へのフィードバックをおこない、演習内容の自己評価とともに学習に深みを持たせられるように配慮した。

教育方法については、学生が知識やイメージを深められるようにパワーポイント、DVDや資料を活用した。今後も授業の進捗状況と学生の理解度に合わせた教材の選出と効果的な活用方法について検討を重ねていきたい。さらに地域保健領域での目まぐるしい法改正や保健事業の見直しなど、常に新しい情報をすばやくキャッチし、新鮮な情報を学生へ提供しつつ、複雑化する行政機関における地域看護の役割・機能を具体的に理解できるよう努力をする必要がある。

3) 地域生活援助論II

4年次 前期前半

江藤 真紀、井ノ口 明美、下山 優恵、高波 利恵、桑野 紀子、佐藤 弥生

地域看護学実習の直前の演習として位置づけ、実習地域の二次的データを用いた地域診断の実施、新生児家庭訪問時の育児指導と児の計測実技、生活習慣病の事例に対する家庭訪問時の保健指導等のロールプレイをおこなった。毎時、グループワークをおこなう中で学生の理解度、技術習得状況に応じて指導をした。特に二次的データを用いた実習地域の地域看護診断の結果を実習開始時に実習指導者に提出し、実習指導の反映させていただく資料をするなど、地域看護学実習との連動性を高く維持した。さらに新生児家庭訪問での母親に対する育児に関する訪問指導では、知識と技術の統合の重要性を実感できるように工夫した。

4) 在宅看護論

3年次 後期前半

江藤 真紀、赤星 琴美、下山 優恵、平野 互、佐藤 弥生

疾病や障害を持ちながら在宅療養をする人びととその家族に対する看護をおこなうために、在宅看護の基本的な考え方と援助方法について講義と演習をおこなった。内容としては、在宅看護の意味と位置づけ、在宅看護の場と特性、社会資源の種類と活用、ケアマネジメント、家族の特性と生活支援の方法、在宅看護過程（講義、演習）、家族の特性と生活支援の方法、医療依存度の高い人へのケア、在宅ターミナルケア、訪問看護ステーションにおける看護活動の実際であった。在宅看護過程の演習ではグループワークによって、在宅療養をしている高齢者の事例を作成し、具体的な初期訪問計画を立てる学習をおこなった。

5) 家族看護学概論

3年次 前期

江藤 真紀、下山 優恵

家族が主体的にセルフケア能力を高め、健康的なライフスタイルを獲得していくために必要とされる家族看護の基本的な考え方と支援方法について講義と演習をおこなった。内容は、家族看護学の概念、家族の機能と家族看護、家族を理解するための諸理論、家族看護における看護職の役割、家族看護過程、家族看護過程の演習である。特に家族看護過程の演習では、家族をひとつのユニットとして捉えて援助するカルガリー看護アセスメントを取り上げ、その意義や方法が理解できるようにロールプレイによる家族インタビューを用い、具体的な体験を通して学習が深まるように工夫した。また、今年度は例年、学生が苦手とするエコマップ作成の意義や意味、作成方法についての演習を強化した。

6) 地域看護学実習

4年次 前期前半

江藤 真紀、井ノ口 明美、下山 優恵、桜井 礼子、平野 亙、高波 利恵、平木 和宏、佐藤 弥生、桑野 紀子、秦 さと子、塩月 成則、神取 美恵子、河野 梢子、田中 佳子、薬師寺 綾、津隈 亜弥子、姫野 綾、白石 京子

大分県下全域の保健所（保健支所含む）9か所と市町村保健センターおよび支所19か所、訪問看護ステーション25か所、合計53か所の施設に、それぞれ2～4名の学生を配置し1～2週間（大分市保健所のみ3週間）の実習をおこなった。

実習指導体制は、それぞれの施設の看護職（保健所と市町村は保健師、訪問看護ステーションは看護師）が実習の現場で直接的な指導をおこない、担当教員は各施設を巡回することで学生と指導者の双方の状況把握をおこないながら、中間カンファレンスや修了カンファレンスでの指導、記録物の指導などをおこなった。実習内容は、市では少なくとも1件の訪問指導を、訪問看護ステーションでは数件の訪問看護を体験せきるように調整をおこなった。また、全員の学生が保健所または市で健康教育について計画・立案、実施、評価の一連の過程を体験し、集団を対象とした看護支援を学習した。

今後は、学生が法改正や保健事業の見直し等に対応できる実習を展開できるよう実習内容や形態の工夫がさらに必要となる。

4 卒業研究

- ・高齢者の転倒における視力と筋力の関連性
- ・住民の肺がん検診受診に対する受診実態把握と保健師の受診勧奨技術の検討
- ・震災時ボランティア活動の普及・啓発活動の検討～学生調査から～
- ・文献からみた病棟看護と訪問看護で行う終末期の家族支援

3-5-16 国際看護学研究室

1 教育方針

International nursing courses aim at the development of an understanding of global cooperation and networking of health and of nursing, and the development of an understanding of global health issues and strategies; and the realization of roles and responsibilities of nursing profession in the global era in the diverse socio-economic, cultural, and eco-geological context. The age of transculturalism and the trend of globalization of nursing are essential today. Globalization necessitates a comparative perspective with the maintenance of holistic care and the prevention of illnesses.

Transcultural Nursing as well as International Nursing has also emphasized a comparative and holistic perspective. Nurses must move beyond an international focus of studying the relationships between two cultures to that of considering several cultures from a transcultural comparative focus. This means expanding one's views and using critical analysis by contrasting insights and knowledge from several country cultures.

Three mandatory courses for baccalaureate students, one for sophomore class and two for junior students are planned and carried out.

2 教育活動の現状と課題

Language used for the classroom activities: Texts, presentations, questions and answers are carried out in English. To promote the understanding, texts including the lists of references with exercise questions are distributed at least one week ahead of actual lectures. English proficiency of the students are to be promoted.

Autonomy of the study; Detailed seminar orientation such as on the themes of selfstudy, references, methods of presentation, and a focus of group-study were planned and presented by the faculty at the beginning of the Quarter. Grouping of students for selfstudy and choice of the themes are assigned to the students for the student's autonomy by the class-leader.

Activities and autonomous participation by the students are to be promoted. Evaluation of the courses by the students; Students were provided with the opportunities to evaluate the course. Evaluation for the level of achievement of the aims and objectives of the course, contents of the course, time allotment and teaching methodology etc. were planned by the faculty and carried out by the students.

3 科目の教育活動

1) 国際看護学概論

2年次 後期

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives and contents;

- 1.To develop an understanding of the concept of, and to define international health and international nursing.
- 2.To describe the background, course and trends of international cooperation and globalization of health care.
- 3.To understand the context, scope, principles and approaches of international nursing.
- 4.To develop an understanding of the perspectives of international health issues and strategies.
- 5.To develop an understanding of the international health and nursing networks.

Contents ;

- 1.Orientation and introduction to the nature of international nursing -definition, characteristics, aims-
- 2.Introduction to the nature of international nursing - relations with some factors: preparation, history-
- 3.Main nursing concepts and trends of international nursing and health -Globalization nursing, transcultural nursing, international cooperation-
- 4.Trends of international nursing and health, -Global health care problems, history, models for services-
- 5.Risks to health and life in the world - Introduction, risks factors, mortality causes, communicable disease -
- 6.Risks to health and life in the world - Non-communicable disease -
- 7.International networking of health; WHO
- 8.Wrap-up, evaluation of the course

2) 国際看護比較論

3年次 後期

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives:

1. To develop an understanding of the context, scope and approaches of international nursing and international health.
2. To develop a global perspective of issues and strategies on health and of nursing
3. To develop an understanding of the need for human resources development for global health and nursing.
4. To develop an understanding of the role of the international health, nursing and relief networks and the impact of international aids during war and disaster.

Contents ;

1. Overview of international nursing From international health & nursing to global health perspectives Issues & challenges for health development (Poverty, Gender, Culture & Health Care, Environment)
2. Global strategies for all health Human resources
3. Work force related to ICN International Relief Organization: JICA
4. International Relief Organization Red Cross

3) 国際看護学演習

3年次 後期

S. W. Lee, N. Kuwano

Objectives of the Course:

1. To develop an understanding of the concept, scope and approaches of international nursing/health in the diverse eco-geological, socio-economic, cultural and political context.
2. To develop understanding of the system of and the need for planning and development of the human resources for global nursing and health.
3. To develop an understanding of the role of the international nursing, health and relief networking.

Activities:

Orientation to the course activities includes;

Aims and objectives of the course, grouping, designation of role of each member, themes of the group study and presentations, time allotment and place allocation, references, soft and hard computer aids and equipments for the study and presentation.

Group-works / studies:

Carried out by students; grouped into 4Gr.-5Gr., according to prior planned schedule.

Themes for the group-works / studies and presentations;

- I. Health issues and strategies; of a population group
- II. Health issues and strategies; of a nation
- III. Human resources for health or/and nursing of a nation
- IV. Foreign Country' s Impact and context of aids by JICA

4 卒業研究

- ・日本の看護師のターミナルケアに関する意識調査 ―韓国と比較して―
(Japan nurse' s perception about terminal care ― compared to Korea ―)
- ・中小規模事業所の労働者を対象とする看護職の活動と意識
―日本と韓国を比較して―
(Industrial nurse' s activities for the health management of worker' s
working in small company ― compared to Korea and Japan ―)]
- ・看護学生の実習体験と看護職志望意欲の関連について ―日本と韓国を比較して―
(Study on the relationship between clinical practice and nursing job
motivation of Nursing students ― compared to Korea and Japan ―)

3-5-17 共通科目

1) 自然科学の基礎

1年次 前期

甲斐 倫明、小嶋 光明、岩崎 香子、定金 香里、伴 信彦、吉田 成一、品川 佳満、佐伯 圭一郎、坂口 隆之

自然科学の基礎として習得しておくべき基本的事項を学ぶ。高校までに十分に習得できなかった項目を学ぶための講義であると同時に、自然科学の考え方について理解するための講義となっている。講義内容は次の通りである。

1) 入学後試験 (物理、化学、生物、数学)、2) 科学的自然観とは、3) 生物：細胞、4) 生物：細胞分裂の仕組み、5) 生物：DNA複製の仕組み、6) 生物：遺伝子・遺伝の仕組み、7) 生物：遺伝の仕組み、8) 生物：タンパク質合成の仕組み、9) 生物：生物の発生-受精、10) 生物：生物の発生-胚発生、11) 化学：原子の構造と化学結合、12) 化学：モルと濃度計算、13) 化学：化学変化：酸化と還元、14) 酸とアルカリ、15) 化学：有機化合物の構造、16) 物理：力とエネルギー、17) 物理：熱・温度と相変化、18) 物理：電気と磁気、19) 数学：数学の基礎1、20) 数学：数学の基礎2、21) 数学：数学の基礎3

2) 健康科学実験

2年次 後期

下田 浩、岩崎 香子、安部 眞佐子、市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里、甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明、稲垣 敦

本健康科学実験は2年次生に実施しており、基本的な実験演習や測定を通じて、人の身体、健康に関係した事項や人間をとりまく自然環境に関する基本的な現象を体得し理解を深めることを目的としている。今年度も例年どおり9テーマからなる実験を行った。1) 組織学実習 (担当者：下田 浩、岩崎 香子、安部 眞佐子)、2) 血液検査 (担当者：定金 香里)、3) 基礎微生物学実習 (担当者：吉田 成一)、4) ラットの解剖 (担当者：市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里)、5) 室内空気汚染と水質汚染 (担当：甲斐 倫明)、6) 放射線 (担当：小嶋 光明)、7) 染色体異常 (担当者：伴 信彦)、8) 最大下負荷での呼吸循環器系持久力の測定 (当者：稲垣 敦)、9) 心電図の成り立ちと心拍解析 (担当者：外部講師)

3) 総合人間学

4年次 後期前半

市瀬 孝道

さまざまな分野で活躍され、かつ造詣の深い講師の物の見方や考え方を通して、人間として、医療者として備えておくべき豊かな知識と感性を養うことをねらいとしている。なお、本科目は公開講義とし、県内に広く情報を提供して参加を促している。本年度の開講日、テーマ、講師を以下に示す。

第1回10月6日：どんなときでも、命は輝く～訪問看護の現場から～ 秋山 正子

第2回10月18日：大分の笑い～なしかのころ～ 吉田 寛

第3回10月25日：医療政策・病院経営 小山 秀夫

第4回11月1日：看護に必要な医療安全 森 照明

第5回11月8日：社会人のマナー 酒井 祐一

第6回11月15日：情報をキャッチする楽しさ、活かす喜び 相原 利衣子

第7回11月22日：エクスポージャーのすすめ～体験し、学び、行動へ～ 平井 朗

第8回11月28日：NPとしての1日～この能力を獲得するまでの道のり～

エクランド源 雅子

4) 総合実習

4年次 前期後半

市瀬 孝道、看護系教員全員

本科目は実習教育の最終段階に位置づけられており、学生の自律性と総合的な判断力を育成することをねらいとしている。学生は第4段階までの実習体験から各自の到達度を踏まえて課題を明らかにし、自らが希望する領域と実習施設を選択する。各施設（部署）には原則として学生1名の配置とし、自ら実習目標・計画を立て、主体的に実習を展開する。

総合実習の具体的な準備については、教育研究委員会所管の総合実習WGが担当した。実際の実習では看護系教員全員が学生を分担し、学生は配置決定後の2月から担当教員の助言を得ながら実習目標・計画の立案を行なった。実習に際して、担当教員は学生に同伴しないが、施設側との情報交換を十分に行い、学生の実習目標の達成を支援した。今年度は大分県内の42施設の協力を得て実習を行なった。

5) 看護研究の基礎 I

3年次 後期後半

市瀬 孝道

本科目は、卒業研究の意義や論文作成迄の一連の過程で必要とされる基本的な考え方、進め方、知識や技術を修得することを目的としている。2日間の集中講義で行なった。講義のテーマと講師は以下のとおりである。

平成23年2月21日

(1) 卒業研究の意義 : 江藤 真紀

(2) 研究の倫理と安全 : 平野 互

(3) 実験研究の進め方の基礎 : 下田 浩

(4) 文献的研究の進め方の基礎 : 安部 眞子

平成23年2月22日

(5) 調査研究の進め方の基礎 : 林 猪都子

(6) データ解析の基礎 : 品川 佳満

(7) 文献検索の方法・文献の入手法 : 小嶋 光明

(8) 論文のまとめ方・発表の方法 : 梅野 貴恵

6) 看護研究の基礎Ⅱ (原著購読)

4年次

市瀬 孝道

本科目は卒業研に究関連する原著、原書を検索、選択、購読し、専門論文の大意を把握し、研究を進める上での論理的な展開法、論文の書き方、作成法を学ぶことを目的としている、学生は卒論の研究期間中に3編の英語の原著論文についてまとめ、それぞれの研究室で行なう抄読会で発表した。

7) 看護研究の基礎Ⅱ (総合看護学)

4年次 後期前半

市瀬 孝道、桜井 礼子、藤内 美保、赤星 琴美、桑野 紀子、秦 さと子、関屋 伸子、
田中 美樹、津隈 亜弥子、津留 恵里佳

4年次生後期に看護基礎教育の総仕上げとして、人間科学講座の専門基礎科目と看護の専門科目で学んだ知識・理論を有機的に統合し、適切なアセスメント能力および看護技術を提供できる能力を養うことをねらいとしている。専門領域の6事例(小児、母性、急性期、慢性期、ターミナル、在宅)を用いて、アセスメント能力や、安全安楽な看護技術を提供できることを目標とし、グループワークおよびロールプレイを行った。これまでの実習では遭遇したことがない事例が多いため、学生は試行錯誤を繰り返しながらであったが、熱心なディスカッションや技術練習を行っていた。ロールプレイの場面では、教職員が患者・家族役等を務め、その後感想を述べてもらったが、患者・家族の目線にたったコメントで学生の気づきは大きかった。また医療チームとしての看護職の役割を改めて認識できていた。事例を通し、解剖生理、疾患の理解、アセスメント、看護ケア、医療チーム、倫理観などさまざまな要素を統合して考えていくことができ、この時期にこの演習があつて良かったとの学生の感想も得られたが、病態生理やアセスメント力を強化する必要がある。これまで3コマを2回で行う発表を、今年は2コマ連続で3回のロールプレイの発表を行い、効率的に進められた。

3-6 大学院における教育活動

3-6-1 博士(前期)課程

1) 看護アセスメント学特論

1年次 後期

藤内 美保、高野 政子、伊東 朋子、石田 佳代子

クライアントマネジメントを遂行するために、看護職が問題解決過程を展開し、信頼性のある方法論に従った身体的、包括的な機能評価のための情報収集の基礎理論と技法について教授した。1つは臨床現場における看護判断のための思考プロセスを強化する目的で、事例を用いて、看護過程の展開を講義演習形式で行った。2つは小児のフィジカルアセスメント、看護過程の展開を行い、レポートさせた。3つ目は在宅看護における神経難病の患者理解と看護判断についての演習をした。いずれも、基礎理論を踏まえた看護判断に関する具体的適用方法を課題学習を行い、レポートおよび出席状況により評価した。

2) 精神保健学特論

1年次 前期

影山 隆之、大賀 淳子

ストレス論、睡眠障害、産業精神保健、自殺対策など近年の精神保健学のトピックスについて講義と討論を行った。Keltnerの精神保健看護学のテキストの抄読を行った。

3) 基盤看護学演習

2年次

志賀 壽美代、影山 隆之、藤内 美保、伊東 朋子

基盤看護学における教育、研究の方法について、さまざまな視点からその手技方策を具体的に探求する。担当教員が専門とする内容について、看護援助、健康増進のための方法論、技術論や看護実践への具体的適用方法を課題学習し、レポートで評価した。

4) 老年アセスメント学演習

2年次生 後期前半

下田 浩、兒玉 雅明、立川 洋一、小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子

老年ナースプラクティショナー養成コースの授業科目として、老年看護の対象（高齢者・家族・地域社会）への健康アセスメント、看護的治療アセスメントを行うための専門的知識と技術の習得を目的として、消化器疾患と循環器疾患に対する診療トレーニングとその指導を行った。

5) 小児NP特論

1年次 後期後半

高野 政子、田中 美樹、佐田 佳子、宮成 美弥

講義はEBNに基づいたケアを展開できる実践能力を高めるために、臨床実践で活躍している糖尿病認定看護師と皮膚・排泄ケア認定看護師を含め4名でオムニバス形式で実施した。まず、米国で小児NPとして活躍するエクランド稚子氏の講義を聴講しレポートをまとめた。その後で小児NPに求める能力について解説し、続いて“Essential Elements of the Advanced Practice Role for Pediatric Nurse Practitioners”の原著を和訳する課題に取り組み、解説した。その他の内容としては、小児看護で用いる倫理、予防接種、小児医療における倫理、糖尿病をもつ小児と家族への看護、小児の皮膚排泄ケアなどを講義した。レポート課題や参加で評価した。

6) 小児疾病特論

1年次 前期後半

高野 政子、田中 美樹、玉井 友治、井上 敏郎、飯田 則利、岩松 浩子、金谷 能明、福永 拙

講義はオムニバス形式で実施した。1. 小児医療と小児慢性特定疾患の現状と課題、2. 小児医療におけるインフォームド・コンセントとチームアプローチ、3. 小児の神経系の病気と治療、4. 小児の内分泌・代謝系の病気と治療、5. 小児感染症と治療、6. 先天性心疾患と治療、7. 小児の血液・造血器系の病気と治療、8. 小児の呼吸器系の病気と治療、9. 小児の腎・泌尿器系の病気と治療、10. 小児の運動器系の病気と治療、11. 小児の消化器系の病気と治療、12. 小児の悪性腫瘍、免疫系の病気と治療、13. 小児虐待、14. 小児の心の病気と治療などであった。最後は筆記試験を行い理解度などを評価した。

7) 成人看護学特論

1年次 後期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、志賀 寿美代、伊東 朋子

EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、オムニバス方式で教授した。看護実践のための理論や知見をもとに事例をとらえることで、各健康レベルにある成人看護の健康問題と援助方法、課題を考察した。

8) 老年看護学特論

1年次 後期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、安部 眞佐子、影山 隆之、佐藤 弥生、
宮成 美弥、木本 ちはる

EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、看護を实践する理論、方法を探究することを目的として講義を行った。各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する認定看護師などがオムニバス方式で教授した。講義の最後に学習を統合させる目的で、NPコースの学生と合同で学生の身近な高齢者ケースをアセスメントしマネジメントプランを立案する課題を課しプレゼンテーションを行った。発表に対する意見交換によってNPとは異なる看護師の課題が明らかになり、今後の学生に継続する学びとなった。来年度も、同様の指導方法を継続し学生の主体的な学習の支援を強化することが課題である。

9) 老年NP特論

1年次 後期後半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、安部 眞佐子、影山 隆之、佐藤 弥生、
宮成 美弥、木本 ちはる

EBNに基づいたケアを提供できる実践能力を高めるために、加齢に伴い生じる身体的・精神的・社会的機能の変化と、老年期の発達課題を理解し、看護を实践する理論、方法を探究することを目的として老年NPコースの学生へ講義を行った。各健康レベルにおける看護を専門とする大学教員や臨床で活動する認定看護師などがオムニバス方式で教授した。学習を統合させる目的で、NPコースの学生と合同で学生の身近な高齢者ケースをアセスメントしマネジメントプランを立案する課題を課しプレゼンテーションを行った。課題を当初からオリエンテーションしていたため、十分に時間をかけた取り組みができていた。また発表に対する意見交換によって各自の課題が明らかになり、今後の学生に継続する学びとなった。来年度も、同様の指導方法を継続し学生の主体的な学習の支援を強化することが課題である。

10) 老年疾病特論

1年次 後期

下田 浩、兒玉 雅明、麻生 哲郎、伊奈 啓輔、藤富 豊、増井 玲子、竹下 泰、小寺 隆元、森 照明、財前 博文、佐藤 博、古川 雅英、糸永 一郎

老年ナースプラクティショナー養成コースの授業科目の一つとして、老年看護の対象者に適切なプライマリーケアを提供するための知識を習得する目的で、老年期によくみられる症状や慢性経過をたどる疾病（消化器系・糖尿病・終末期医療・精神疾患・腎泌尿器系・運動器系・脳神経系・循環器系・呼吸器系疾患）とその診断・治療について講義・演習を行った。今後も診療ガイドラインを用いて基本的な治療を学習することを強化していきたい。また、ナースプラクティショナーに必要なデブリドメント、局所麻酔、抜糸、胃ろうカテーテル交換の技術などを習得する時間が確保できずに、実習前に補足の集中講義と演習をもった。来年度は技術トレーニングを十分実施できるような授業の組み立てをすることを課題としている。

11) 老年薬理学演習

2年次 前期前半

森本 卓哉、松崎 忠史、須崎 友紀

高齢者の初期診療や継続治療（高血圧、糖尿病など）の薬理に関するアセスメントと医療処置管理ができることを目的に、事例をもとにその高齢者に適した薬物を選択、マネジメントする演習方式（p-drug）で行った。基本的な治療を学び、高齢者への副作用から経済状況まで加味した吟味が行われ薬物を選択するステップを学習した。

12) 老年NP実習

2年次 前期後半・後期前半

小野 美喜、福田 広美、松本 初美、桜井 礼子、石田 佳代子、下田 浩、立川 洋一、小寺 隆元、財前 博文、増井 玲子、福永 充、石丸 修、麻生 哲郎、川上 克彦

老年NPカリキュラムでの知識・技術を統合し、実際のプライマリ診療を行う場で実践力を身につけることを目的にNP実習を展開した。実習は病院施設8週間、老人保健施設3週間、診療所3週間の合計12週間で構成され、1施設1名の学生配置で4名の学生が履修した。指導方法として、実習前に施設長、主指導医、看護部長、大学側との合同会議を設け、実習目標を明確にするとともに共通理解を深めたうえで実施し、終了後も合同会議で実習状況と評価を共有するなど大学と各施設との連携をとった。実習中の指導は、主指導医が主に指導にあたり、大学教員は指導医と連携を取りながら学生を対応し、学習内容の確認やメンタルサポートを行い、すべての学生が事故なく履修を完了した。課題として、12週間連続した実習であったためケースの振り返りが不十分であったこと、老人保健施設や診療所での実習のねらいを明確にし実習方法を工夫することがあげられる。また、実習中の施設スタッフと教員との連携も大きな課題である。来年度は実習のもちかたを工夫し、連携を強化できるように体制を整えていく。

13) 生殖看護学特論

1年次 前期前半

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら、戸高 佐枝子

思春期、成熟期、更年期、老年期の各期における女性とその家族の健康の維持・増進、健康逸脱時の援助のための対象の捉え方を性と生殖の側面から理論的に探究するとともに、各ライフステージにおける女性の身体的、精神的、社会的特徴とウェルネスを考察し、その看護援助の方法及びセルフケアのための教育のあり方について教授した。さらに周産期にある女性と家族の親役割の獲得、愛着形成及び生殖機能の正常性維持のためのリスク回避に関する看護援助活動について追及した。

14) 助産学特論

1年次 前期後半

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら、佐藤 昌司、池田 裕美、渡邊 めぐみ

近年の産科医療は急激な勢いで産科医師不足・産科病棟閉鎖という事態が生じている。妊産婦の生活圏内に出産場所を堅持するためにも、本来の助産師の専門性を生かした働きを推進することが急がれている。そこで正常分娩における医師との役割分担を担い、病院の助産師が自律（自立）して助産ケアを行う体制作りの仕方及び自信を持って助産外来、院内助産ができるための知識・助産診断を深め、多様化するお産に対応できる即戦力と自律した助産師の育成をねらいとして教授した。

15) 助産学演習

1年次 前期後半・後期前半

梅野 貴恵、林 猪都子、関屋 伸子、乾 つぶら、樋口 幸

周産期にある対象や女性のライフサイクル全般における健康問題を身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解し、科学的根拠に基づいた診断技術および支援方法を学び、その後の妊娠期診断学実習、妊産婦保健指導実習、NICU実習に活かすための科目とした。内容は、妊娠期の超音波診断、妊娠期の生活指導、分娩監視装置の見方、新生児蘇生法、母子愛着形成、NICU看護、マタニティビクス、アフタービクス、性教育である。演習方法は、課題に基づき学生が主体的に企画し運営するものや学習成果を発表するという参加型で行った。

16) 妊娠期診断学実習

1年次 後期

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら

人間尊重の基本的理念に基づき、妊娠期の助産診断および技術を用いて、妊婦および胎児の健康水準を診断し、科学的根拠に基づいた実践ができる即戦力をもった助産師の育成をねらいとした。渡邊助産院、堀永産婦人科医院に2名、生野助産院、アルメイダ病院に1名、大分県立病院周産期母子センター、サエラ助産院、貞永産婦人科医院に3名配置して妊娠期の経過診断の実習を行った。

17) 妊産褥婦保健指導実習

1年次 後期

林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら

助産師は、助産および妊婦・褥婦もしくは新生児の保健指導を業とする専門職であり、実務実践には、より高度の知識・技術が要求されている。この保健指導実習においては安全性・快適性を踏まえて、ニーズに寄り添う妊婦・産婦・褥婦の一貫した継続支援およびより高度な保健指導技術の獲得・充実をねらいとした。渡邊助産院、掘永産婦人科医院に2名、生野助産院、アルメイダ病院に1名、サエラ助産院、貞永産婦人科医院に3名配置して妊産褥婦保健指導実習を行った。

18) NICU実習

1年次 後期前半

梅野 貴恵、林 猪都子、関屋 伸子、南 智子

ハイリスク新生児の生理的特徴を理解し子宮外生活適応の過程をアセスメントし、基本的ニーズに応じた看護が展開できる助産師の育成を目指す目的で、大分県立病院総合周産期母子医療センターNICUで、3名の学生が2週間実習を行った。学生1名に対してハイリスク新生児1名を受け持ち、受持ち児と保護者のニーズに応じた看護過程の展開を実施し、保護者への退院指導の一部を実施した。また、NICUに入院中の超低出生体重児の看護援助の見学を実施した。産科とNICUとの連携も見学により理解を深めることができた。学生は、母子分離された両親への愛着形成促進のためのケアや助産師としての役割を学ぶことができた。

19) 地域看護学特論

1年次 後期

江藤 真紀、佐藤 玉枝

ヘルスプロモーションを基盤としたコミュニティエンパワメントの視点から、地域における個人、家族、集団へのアプローチの方法や地域看護診断の手法と理論を用いながら教授した。さらに行政システムの看護の視座から、新たな健康ニーズへの対応や地域看護の機能についてもディスカッションを含めて講義を展開した。

20) 放射線保健学特論

1年次 後期後半

甲斐 倫明、伴 信彦

放射線の基礎の全般と、臨床での放射線保健事例として妊娠期の放射線の健康影響を中心に講義をした。医療現場で不安感の高い妊娠と医療放射線をICRP Publication 84をテキストとして用い、解説した。

21) NP論

1年次 前期前半

草間 朋子、林 猪都子、藤内 美保、桜井 礼子、高野 政子、小野 美喜

米国および韓国から学ぶNPの歴史の変遷、NPの役割と実践活動と、日本におけるNPの必要性と教育カリキュラム、NPの求められる能力について教授し、今後の自分たちの目指すNPの活動の場と実践内容について検討した。

22) フィジカルアセスメント学特論

1年次 前期後半

藤内 美保、石田 佳代子、下田 浩

対象者の身体的健康状態のアセスメント能力を高めることを目的に教授した。五感を駆使した問診、視診、触診、打診、聴診の基本技術を身につけるため、講義および演習形式で行った。全身、頭部、頸部、胸部（肺および心血管系）、腹部、直腸、四肢、神経系のフィジカルアセスメントを系統的に実施した。演習では異常な状態把握ができるようにフィジカルアセスメントモデル、高機能シミュレーター、眼や耳のシミュレーターを使用した。確実な知識・技術が身につくように中間試験と総合試験を実施した。試験は筆記試験およびOSCEを行った。OSCEの実施の後は、学生全員とOSCEのビデオを視聴しながら、振り返りを行った。

23) 病態機能学特論

1年次 前期

下田 浩、市瀬 孝道、卜部 省吾

体の基礎的な仕組みを理解させる為に、先ずヒトの構造や機能について講義した（下田）。また疾病の基本的事項を理解するために生体防御システムに関わる炎症、免疫やアレルギー、腫瘍、更に系統別の疾患についてハンドアウトを用いて詳しく講義した（市瀬）。また、病理標本の作成法、病気の肉眼標本やプレパラートを用いた顕微鏡観察を行い、種々の臓器に発生した炎症やがん組織・がん細胞を理解させた（卜部）。

24) 臨床薬理学特論

1年次 後期後半

吉田 成一、伊東 弘樹

診断後、医薬品を処方するにあたり必要となる基礎的な薬理学総論および各種疾患の治療に用いる医薬品に関し、作用、副作用、相互作用等の面を重点的に身につけるための講義を行った。医薬品の商品名と一般名の双方を理解できるよう心がけ、講義を行った。最終日に筆記試験を行い、当該科目の理解度を確認した。

全ての学生は看護職のため、自身の勤務先で使用している医薬品に関しては商品名での理解は高いものの、一般名に触れる機会がないため、習得が難しい部分が散見された。また、修得すべき事柄が多く、現在のカリキュラムでは十分な教育内容と言えないため、次年度より老年と小児を対象を分けて講義を行うこととした。

25) 診察・診断学特論

1年次 後期

下田 浩、岩波 栄逸、伴 信彦、糸永 一郎、矢野 庄司、三重野 龍彦、岡崎 敏郎、石飛 裕和、林 良彦、安部 航、吉岩 あおい

プライマリーケアの修得を目的として、症状や徴候から病因や病態を診断するための診察や検査（尿・血液検査、X線レントゲン、超音波など）の基礎知識と基本技術について教授した。5施設の臨床医師9名により、大学院後期カリキュラムにおいて行われた。講義・演習は医師所属の医療施設や本学講義室などで行われ、最終日には筆記試験を実施した。

26) 健康増進科学特論

1・2年次 前期前半

江藤 真紀、稲垣 敦、桜井 礼子

ヘルスプロモーションの概念を理解するとともに、日本および世界における保健医療の動向と保健施策、健康の保持・増進のための健康教育のプロセスを講義した。さらに、運動、身体活動、体力と健康の関係についても講義し、実習を行った。

27) 人間関係学特論

1・2年次 前期

関根 剛、吉村 匠平

毎回、参加者各人の関心のあるテーマを中心に、関連書籍や文献の購読、紹介などを行なわせた上で、全員での討議、講師による解説などを行った。また、今年度は、夜間開講希望者と昼間開講希望者がいたため、昼夜ともの開講を行った。

28) 保健情報学特論

1年次 前期

佐伯 圭一郎、品川 佳満

前半において、コンピュータなどの情報を取り扱う技術についての知識を教授し、医療・保健分野でのデータ処理の概要とシステム管理についての実例を交えて解説した。

後半においては、看護実践の場での情報科学技術の活用能力を高めるため、データ収集と解析、判断に関する理論と技術を演習を含めながら教授した。

29) 看護科学研究特論

1・2年次 前期

伴 信彦、高野 政子、石田 佳代子、藤内 美保、小嶋 光明、平野 互、吉村 匠平、稲垣 敦、坂口 隆之、関根 剛

EBNの基礎をなす看護科学研究の理論および手法を概観し、研究活動を自ら展開するために必要な事項を論じた。さらに、実際の研究例の輪読と検討により、研究活動に関する実践的能力の育成をおこなった。

- | | |
|------------------|----|
| 1. 看護研究の意義 | 高野 |
| 2. 調査研究の進め方 | 石田 |
| 3. 質的研究の進め方 | 藤内 |
| 4. 実験研究の進め方 | 小嶋 |
| 5. 文献研究の進め方 | 平野 |
| 6. 研究の倫理と安全 | 吉村 |
| 7. 文献検索の方法 | 稲垣 |
| 8. データ解析の基礎 | 坂口 |
| 9. 研究のまとめ方・発表の方法 | 伴 |
| 10. 研究デザイン | 伴 |
| 11. 観察研究 | 坂口 |
| 12. 介入研究 | 吉村 |
| 13. 二次研究 | 伴 |
| 14. その他の研究 | 関根 |
| 15. まとめ | |

30) 看護管理学特論

1・2年次 後期前半

志賀 壽美代、桜井 礼子、福田 広美、山西文子

保健・医療・福祉に関する制度と組織、看護管理の基本となる理論とその展開について学ぶ。また、具体的な管理プロセスに対する理解を深めるとともに、質の高い看護サービス提供のために看護組織が備えるべき機能について考える。

1. 看護管理理論
2. 管理プロセス
3. 保健・医療・福祉に関する法制度 (1)
4. 保健・医療・福祉に関する法制度 (2)
5. 保健・医療・福祉施設における看護組織
6. 人的管理のあり方
7. 看護職の業務管理のあり方 (1)
8. 看護職の業務管理のあり方 (2)
9. 看護業務と安全管理
10. 看護職の専門性と倫理的責任
11. 看護職の能力開発と卒後の継続教育のあり方
12. 看護職の能力開発と卒後の継続教育のあり方
13. 看護の質評価の方法論
14. 看護管理に関する研究
15. 看護管理の実際
16. 看護管理の実際

31) 看護理論特論

1年次 前期前半

S. W. Lee, M. Tonai, M. Tanaka

Course Description:

This course is an introduction to the nature of scientific explanation and inquiry of theoretical conceptualizations in nursing. Origins of and strategies for theory development in nursing are examined. Analysis of the role of theory in nursing practice and research are explored.

Course objectives:

1. Explains the nature of scientific inquiry and explanation.
2. Explains how the components of a theory are related and function in description and explanation.
3. Explains philosophical controversies in current thought on nursing science and nursing knowledge development.
4. Applies criteria for theories to evaluation of theories and conceptual models used in nursing.
5. Evaluates alternative strategies for developing nursing sciences.

32) 看護教育特論

1年次 後期後半

高野 政子、宮崎 文子、梅野 貴恵、石田 佳代子

講義はオムニバス形式で実施した。講義内容は1.看護の専門性と教育的意義、2.看護教育の歴史的意義、3.看護教育制度と現状、4.看護教育におけるカリキュラム、5.看護教育評価、6.看護基礎教育と継続教育、7.自己教育力・生涯教育能力の開発、8.現任教育の在り方、スタッフ教育、9.看護実践能力の育成、10.認定看護師制度と専門看護師制度、11.看護教育方法論(1)、12.看護教育方法(2)、13.看護教育方法(3)、14.レポート課題発表と討論を行った。最終評価はレポートと発表、参加状況を教員間で協議した。

33) 看護コンサルテーション論

1年次 前期

大賀 淳子、吉村 匠平、関根 剛、志賀 壽美代

我が国における看護コンサルテーションの歴史は浅く、確かな理解のもとに実践されているとは言い難い。よって、本講義では、まず原著購読によって看護コンサルテーションの概念を捉えることを重要視した。その後、対象者理解のための心理的アセスメント、心理教育、心理的援助について学び、演習を経て、最終的に我が国における看護コンサルテーションの課題について考察を深めた。

34) 看護倫理学特論

1・2年次 前期

平野 互、小野 美喜、志賀 壽美代、関根 剛

倫理的思考は、すべての看護職に必要であることから、各受講者が専攻する領域での臨床に活かせることを基本とし、必要な生命倫理学の知識を習得するとともに、倫理的行動規範に基づく思考訓練を行うことを目的とした。11回の講義と3回の事例演習を行い、さらに最終回には受講生の事例報告による評価を行った。講義は、「看護職の責任と倫理規程」・「看護職の価値観と倫理」を小野、「看護場面の倫理的ジレンマとその解決ステップ」を志賀、「Profession の責任と倫理」・「Bioethics・新しい医療倫理の展開」・「生命倫理の基本原則と思考方法」・「人間の尊厳と患者の権利」・「個人の尊重と自己決定権・プライバシー権」・「ケアとしての苦情解決」を平野、「倫理的行動とコミュニケーション」・「問題解決のためのコミュニケーション・スキル」を関根が担当した。事例演習は、4名の教員各々が講義と関連付けて行い、受講生による事例報告は4名の教員すべてが出席してコメントし、評価を行った。

選択科目であったが、オリエンテーション時に履修促進が行われた結果、多数が受講した。そのため事例報告においても、活発で有意義な討論ができた。

35) 看護政策論

1年次 後期前半

草間 朋子、薬師寺 道代、森 照明、藤内 修二、小山 秀夫、甲斐 倫明

保健・医療・福祉を取り巻く制度や政策がどのようなプロセスで決定され、決定された政策が看護の現場にどのような影響を及ぼすかを考える。講義内容は次の通りである。1)政策決定過程を知る、2)看護の自律を目指した看護政策を実現するために、3)我が国の保健政策、4)大分県の健康政策、5)医療事故発生時対応、6)保険と医療費、7)看護政策の課題、8)グループ討論

36) 原書講読演習

1年次 後期

宮内 信治

原著論文「Outcomes of Nurse Practitioners in Acute Care: An Exploration」を教材として英文解釈の基礎に取り組んだ。その後、各自の興味関心のある分野に関連する文献を学生自身が選択し、担当教員の助言を受けながら英文の内容解釈に取り組んだ。

37) 英語論文作成概論

1年次 前期前半

甲斐 倫明、影山 隆之

修士論文で英文アブストラクトを書くための基礎的事項を学ぶ。講義内容は次の通りである。1)英語科学論文の特徴、2)論文を科学的に構成する5つのステップ、3)日本人のまちがいがやすい英語表現を克服するポイント、4)調査研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方、5)実験研究データ特有の英語表現の事例とアブストラクトの書き方

38) Intensive English Study

1年次 前期

Gerald T. Shirley

Competence in English is important for graduate students. This course aimed at improving the basic English language ability of students through intensive practice in reading, listening and grammar. It was an eight-week course in which students practiced reading, listening and grammar problems to help them improve their basic language abilities in these important areas. The course used a Computer Assisted Language Learning (CALL) system. The CALL course is designed so that students can access and practice CALL at any time on their computers at home and in the Graduate Student Room. There were no classroom sessions in this course. Students practiced the CALL course problems during their own time. Their progress was monitored and evaluated by the instructor during the eight-week course. Individual assistance and instruction was available to each student through consultation with the instructor. The course consisted of an orientation session in the CALL classroom in which the CALL course was introduced and class guidelines were discussed. The CALL course was offered from May 6 to June 30. The TOEIC-IP test was administered before and after the CALL course, and it was mandatory that students take both tests.

39) 特別研究 (看護学専攻)

1～2年次

各指導教員

3名が修士論文を提出し審査に合格した。論文題目および指導教員は次の通りである。

1) 江月 優子

一般病棟看護師のがん患者家族アセスメントの実際：その視点及び実施頻度に関連する要因

主指導教員：影山 隆之、副指導教員：吉村 匠平、石田 佳代子

2) 桑野 紀子

イギリスにおけるNurse Practitioner (NP) の実態とNPの発展に影響を及ぼした社会的背景に関する考察

主指導教員：桜井 礼子、副指導教員：伴 信彦、品川 佳満

3) Nia Damiati

Nurses' Attitudes towards Death and Caring for Terminally Ill Patients:

A Comparative Study among Indonesia, Japan, and Korea, Supervisor: Prof. S. W. Lee,

Sub Supervisors: Prof. H. Fukuda, Prof. M. Kai

40) 課題研究 (NP)

全期

高野 政子、桜井 礼子、藤内 美保、小野 美喜、江藤 真紀、石田 佳代子、福田 広美、田中 美樹

教員の指導を受けて、それぞれの課題に取り組んだ。修士1年次の学生は、8月2日に課題研究計画報告会を実施した。また修士2年次の学生は1月17日に成果報告会を実施した。

41) 課題研究（助産）

通年

1年次 林 猪都子、梅野 貴恵、乾 つぶら、吉村 匠平、稲垣 敦、小嶋 光明、松本 初美、吉田 成一、市瀬 孝道、関屋 伸子

2年次 林 猪都子、梅野 貴恵、関屋 伸子、乾 つぶら、吉田 成一、小嶋 光明、佐伯 圭一郎、岩崎 香子、関根 剛、坂口 隆之、影山 隆之、安部 眞佐子

1年次生課題研究の選択者は3名である。それぞれの大学院生の助産実践に関する課題を挙げ、テーマの明確化、研究方法および研究計画について指導した。中間発表会を平成22年8月2日（月）に行った。

2年次生課題研究の選択者は4名である。下記の課題研究発表会を平成22年12月15日（水）に行った。

- (1) 骨盤支持ベルト装着による健常成熟期女性への影響
- (2) アクティウォッチによる産後1ヶ月の母親の睡眠に関する研究
- (3) 月経随伴症状の軽減に関するカイロ貼付の効果
- (4) 妊婦の下肢の洗いづらさを軽減するマタニティ入浴用品の検討
—椅子座位姿勢における身体柔軟性に着目して—

42) 研究のすすめ方

1年次 前期

伴 信彦、高野 政子、石田 佳代子、藤内 美保、小嶋 光明、平野 互、吉村 匠平、稲垣 敦、坂口 隆之

以下の内容で、研究を進める上で必要な技術的側面について講義し、研究活動の実践に必要な知識と技術を養った。

- | | |
|------------------|----|
| 1. 看護研究の意義 | 高野 |
| 2. 研究の倫理と安全 | 吉村 |
| 3. 実験研究の進め方 | 小嶋 |
| 4. 文献研究の進め方 | 平野 |
| 5. 調査研究の進め方 | 石田 |
| 6. 質的研究のすすめ方 | 藤内 |
| 7. データ解析の基礎 | 坂口 |
| 8. 文献検索の方法 | 稲垣 |
| 9. 研究のまとめ方・発表の方法 | 伴 |

43) 健康運動科学特論 I

1年次 前期

稲垣 敦

科学の特性について、具体例を上げて解説し、運動に関する基本的な事柄をとりあげ講義した。また、修士論文の計画作成や指導の中で、科学、健康、運動について議論した。

44) 健康社会科学特論

1・2年次 後期

平野 互

人間の健康に関する考察・研究においては、個々の人間行動の分析・探求と並んで、社会政策など社会システムに対する分析、人間行動に対する社会学等の社会的アプローチが重要である。これら社会科学的思想と方法論の基礎を習得することを目的として、講義と課題演習を行った。講義は、「社会システム論1 法と行政」、「社会システム論2 生存権と社会保障制度」、「障がい論とノーマライゼーションの理論」、「人権と研究倫理」、「社会学の方法」、「医療人類学の方法」、「医療経済学の方法」の各講で、課題演習は、1) 日本における医療・保健・介護の各政策に関するレポート作成、2) 医療・保健領域における社会諸科学の方法論による文献検索に基づくレポート作成で、いずれもレポートをもとに討論と教員からの解題を行った。

45) 身体機能適応科学特論

1年次 後期

稲垣 敦

修士論文テーマに関連する論文を学生が選び、また、科学的常識を学べる論文をと教員が選んで精読し、論文精読フォームにまとめて発表した。

46) 放射線健康科学演習

2年次 前期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

医療被ばくと健康影響に関する英文文献を渡し事前に論文を読ませ、理解できない点を補足解説するやり方で実施した。取り上げたテーマは次の通りである。1) 我が国における肺がんのCTスクリーニング、2) 諸外国における肺がんCTスクリーニング、3) CTスクリーニングの肺がん死亡率低減効果、4) CT診断に伴う被ばく線量とリスク

47) 放射線生物物理演習

2年次 後期

甲斐 倫明、伴 信彦、小嶋 光明

ガラス線量計を用いて医療被ばくの線量を測定する実験を行い、従来、論文で報告されている線量と比較検討を行った。CTの理論計算には本研究室で開発しているWAZA-ARIを用いた。

48) 広域看護学演習

2年次 後期

李 笑雨、甲斐 倫明、江藤 真紀、桜井 礼子、平野 互

あらかじめ指定された英語論文をもとに、各教員が広域看護学の各領域別に指導するやり方で演習を行った。

49) 特別研究（健康科学専攻）

1～2年次

各指導教員

1名が修士論文を提出し審査に合格した。論文題目および指導教員は次の通りである。

平岡 徹

肺がん検診における低線量CTの有効性の検証-低線量TSCTと標準線量HRCTの画像比較-

主指導教員:甲斐 倫明、副指導教員:伴 信彦、小嶋 光明

3-6-2 博士（後期）課程

1) 看護専門科学演習

2年次 後期後半

高野 政子、藤内 美保、桜井 礼子、江藤 真紀、志賀 壽美代、李 笑雨、小野 美喜、林 猪都子

受講希望の院生は、広域看護学領域の学生であった。本科目は臨地実習と学内での演習を組み合わせることであり、学生にはレポート提出を課題とした。

2) メンタルヘルス学特別演習

2年次 前期後期

影山 隆之

ストレスと疲労の評価、職業性ストレス要因の評価、睡眠の評価の方法について、質問紙を用いた演習や、アクチメトリーを用いた評価の演習を行った。

3) 特別研究（看護学専攻）

1～2年次

各指導教員

各指導教員が2年次生10名の学生に継続して研究指導を行った。

4) 特別研究（健康科学専攻）

1～2年次

各指導教員

指導教員が2年次生1名の学生に継続して研究指導を行った。

3-7 ボランティア活動

1) きょうだいクラブ

井伊 暢美

3年次生：川添 絢子、柳武 明日香

きょうだいクラブは、自閉症児のきょうだいを対象として、きょうだい達の交流やその経験を知ることが目的としている。今年度は2回のレクリエーション活動を行った。8月は映画鑑賞とボーリング、12月はケーキ作りを行った。

2) 託児ボランティアの養成

井伊 暢美

3年次生：川添 絢子、徳丸 裕恭、桎木 夢加、柳武 明日香、渡邊 希

2年次生：後藤 和恵、佐藤 謙次

1年次生：関安 香里、松坂 初美

TEACCHプログラム研究会のミニトレーニングセミナーに参加する保護者の子どもを託児するために、専門ボランティアの養成を行った。託児の対象には自閉症児も該当するため専門知識を有して臨めるように7月と8月に2回研修を行った。本学の学生の他にも大分大学、府内学園の生徒も対象となった。

3) ボランティアサークル(旧神経難病研究会)

伊東 朋子

4年次生：安部 百恵

3年次生：徳丸 裕恭、川添 洵子

2年次生：後藤 和恵、佐藤 謙次、佐藤 真人、三ツ井 理恵、高司 未由希

1年次生：松坂 初美、河津 美穂、下岡 美紀、伏谷 ルキ、川野 有梨沙、杉安 咲子、
荒倉 香織

ボランティアサークル(旧神経難病研究会として参加)の活動の一環として、第16回日本ALS協会大分県支部総会、患者・家族のつどい(平成22年5月30日)に参加し、会場設営、受付、司会・進行補助、患者移動介助などの活動を行った。

4) 第34回収穫祭ボランティア

伊東 朋子

4年次生：中尾 勇祐、永井 仁、大畑 州三、秦 祐樹、中山 恵輔

1年次生：山川 徹、安部 有香、浦郷 美佳、小野 真衣子、小野 由稀、鹿野 葵、釘宮 里佳、
後藤 優子、小藪 史郎、杉原 健太、関 安香里、浜脇 里奈、廣島 枝里奈、森原 慎大

旧神経難病研究会に、福祉農場コロニー久住より第34回収穫祭(平成22年10月31日)でのボランティア活動の要請があり、19名が参加し、ステージ発表(タキオソーラン)や模擬店、障害者移動介助などを行った。

5) 第25回Young Wing Summer Camp

高野 政子、薬師寺 綾

3年次生：安部 早紀奈、穴見 美穂、衛藤 裕美、渡辺 希

2年次生：高橋 美琴、濱田 亜樹

サマーキャンプは糖尿病をもつ子どもとその保護者を対象とするキャンプで、学生は他の大分大学教育学部、医学部、別府女子短期大学等の学生や医師、看護師等と協働して運営に参加した。キャンプの活動は、同じ病気をもつ子どもの仲間づくりや、病気の正しい理解や自信を持たせるといった目的がある。この目的を達成するために、学生は5月から、8回の事前ミーティングをもち企画や役割を担い、8月7日～12日まで活動を支援した。教員は全体会議に参加し、また、キャンプにも参加して学生を支援した。

4 学内セミナー

4-1 CALL英語学習システム講座

CALLシステムについて、授業での取り組みを将来看護の道を目指す多くの学生に知ってもらうため、7月18日（日）のオープンキャンパスにて、午前・午後1セッションずつ合計2回の模擬授業を実施した。参加した学生や保護者の方々に、実際にCALLシステムを体験してもらい、授業への理解を深めてもらった。

5 学内プロジェクト研究

5-1 看護技術e-learningシステム開発プロジェクト

研究者 秦 さと子、伊東 朋子、志賀 寿美代、塩月 成則、神取 美恵子、佐伯 圭一郎

看護基礎教育における看護技術教育は、看護を科学的に思考する力と技の修得と、それをもとに対象の状況に即したケアを組み立てていくという思考能力の育成を目指している。しかし、本学学生はこのような看護技術に関する能力の達成度は十分とは言えない現状にある。そのため、本プロジェクトでは、学生にいつでも主体的に学習できる反復学習システム環境の提供を目的に、視聴覚教材の開発とe-learningシステムの構築、実用化をめざして取り組んでいる。昨年度のアニュアルミーティングでは、e-learningシステム構築の取り組みの背景と目的、進行状況について中間報告を行った。本年度は、VOD教材の追加とシステムのモックアップの完成、システム試行を行い、今後のシステムの実用化につなげることを目的に取り組んだ。

5-2 慢性期NPが実施できる医行為の同定プロセスおよび具体的行為に関する研究

研究者 藤内 美保、高野 政子

研究1「介護保健・介護福祉施設における特定看護師（仮称）の医行為に関する研究

本学のNPが活動する場の1つとして、介護保健施設（以下、老健）や医師が常時不在の介護福祉施設（以下、特養）を視野にいれている。これらの施設で特定看護師（仮称）（以下、特定看護師）が求められている役割や医行為はなにか、求める医行為に両施設の違いがあるのかを明らかにする。九州圏内2県の老健112施設の管理者63名、看護師594名、医師64名および特養140施設の管理者85名、看護師85名、医師85名に自記式質問紙を郵送した。特養と老健の比較、厚労省が2010年に全国に実施した看護業務実態調査との比較も行った。厚労省の調査では、介護保健施設・介護福祉施設は調査対象になっていない。病院受診件数（前月）は、老健・特養では13.7件、13.9件。1年間の救急車等の施設搬送件数は老健・特養で19.4件、30.1件であった。内服薬継続処方や補液、疼痛時などは厚労省調査よりも老健・特養ともに特定看護師が行うことが望ましいが高かった。緊急時の血管確保は特養で、特定看護師が行うことが望ましいが高かった。侵襲性の高いデブリドマンや挿管、創部切開などは厚労省調査結果のほうが高かった。病院受診件数や救急車の搬送件数、回診件数などから特定看護師（仮称）の担う役割の可能性は大きいと考える。医行為について、日常的な継続処方や疼痛時などの処方では、特定看護師に望まれる医行為であり、特に介護福祉施設では期待される。

研究2「小児がんにおける特定の医行為に関する専門看護師の意識」

小児領域において、がん看護は専門性の高い知識と看護技術が必要とされる分野である。専門看護師（以下、CNS）が小児がん医療における、従来は医師のみが行うとされてきた行為をどのように考えているかを明らかにする。

調査は無記名の自記式質問紙調査法で、平成22年8月～10月に実施した。対象者は日本看護協会のホームページのCNS登録者一覧で、氏名と所属機関が共に公開されている小児看護CNSとがん看護CNSとした。調査項目は属性8項目、小児がん医療における特定の医行為に対する意見10項目と特定看護師導入による特定の医行為の実施についての意見の自由記述の合計19項目。

配布数は213部、回収数は88部（回収率41.3%）で、86部を有効とした（有効回答率97.7%）。対象者は、がん看護CNSが73名（84.9%）、小児看護CNSが13名（15.1%）、平均年齢は39.8±4.45歳、看護師経験年数は平均16.6±4.69年で、小児看護CNSは全員小児がん看護の経験があり、がん看護CNS28名（38.4%）に小児がん看護の経験があった。特定看護師を知らない人はいなかった。小児がん医療において、将来特定看護師が実施することが可能か否かを質問したところ10項目の内、8項目で賛成の割合が多かった。

小児看護CNSとがん看護CNSは特定看護師による特定の医行為の実施に肯定的であるが、侵襲性の高い医行為は専門的技術の訓練があればよいと条件付きで考えていた。

小児は言語能力も認知能力も発達途上であり、急激な身体症状を訴えることができないため、日々の変化や異常を早期に把握できる特定看護師が特定の医行為を実施することの必要性を感じていると考えられた。

5-3 健康増進プロジェクト

研究者 稲垣 敦、桜井 礼子、平野 互、平木 和宏、江藤 真紀、赤星 琴美

今年度を実施した主な研究の概要を以下に示す。

1. 高齢女性の生活習慣と健康関連体力・主観的健康観との関連

体力の自己認識と体力測定値とは差があることから、体力測定には自己認識を明確にするという意義があると考えられた。また、主観的健康感には体力や痛みと関連が見られ、主観的健康感が生存率やQOLに影響を与えることから、この意味でも体力の維持・増進が重要である。

2. 高齢者の転倒における視力と筋力の関連性

視力と筋力には関連が認められなかったが、視力矯正と筋力には関連が見られ、視力の矯正が活動性を高め、筋力低下を防ぎ、転倒を予防する効果があると推測された。

3. ウォーキングおよび半身浴の快眠効果

アテネ不眠尺度、自律神経機能の点から見た場合、ウォーキングおよび半身浴に快眠効果があるという積極的な根拠は得られなかった。一因として、被験者の生活が不規則であったことが結果に影響した可能性があると考えられた。

4. ウォーキングおよびダンベル体操の冷え性緩和効果

冷え性傾向尺度、皮膚表面温度、安静時エネルギー代謝、自律神経機能の点から見た場合、運動に冷え性の緩和効果があるという積極的な根拠は得られなかった。

5. 高齢者用最大酸素摂取量の測定理論

任意の一定のペースで歩行あるいは走行、任意のペースで任意の規格の階段の昇りあるいは踏み台昇降によって最大酸素摂取量を推定する理論を提案した。現在、測定機器の共同開発をメーカーと検討中である。

6. 介護予防運動「お元気しゃんしゃん体操」の効果

この介護予防体操の体力に及ぼす効果は、男性よりも女性、前期よりも後期高齢者、初期水準の高い者より低い者で効果が高かった。これは、体操の運動負荷が比較的低いことが一因と考えられた。

7. 姫島村高齢者の健康・長寿と身体活動量、体力、生活習慣の関係

姫島の高齢者に体力、身体活動量、生活習慣を調査した結果、姫島の高齢者が健康かつ長寿である理由として、1) 歩行や自転車等で身体活動量が多いこと、2) 睡眠で休養がとれていること、3) 極端な飲酒、喫煙が少ないこと、4) ストレッサーが少ないこと、5) コミュニケーションが多いこと等が一因と推測された。また、これらは、姫島の気候風土と無関係ではないことが推測された。

8. 森林ウォーキングのストレス低減効果

POMSから、気分には快方向への有意な変化がみられたが、唾液アミラーゼからみたストレスの変化には個人差が大きかった。また、心拍R-R変動からみた自律神経化活動の変化は有意ではなかったが、通常の運動に類似した変化が見られた。

6 先端研究

6-1 カルボニル化合物尿毒症物質の骨代謝に対する影響

研究者 岩崎 香子

慢性腎不全患者は様々な合併症を有するが、中でも骨折は患者の生命予後に大きく影響する。腎機能低下に伴って骨折率が増加することが最近報告されたが、その詳細はいまだ不明である。一方、腎機能が低下すると、本来尿より体外に排泄される物質（尿毒症物質:UTx）が血中に蓄積するため、諸臓器に障害をもたらし、患者のQOLおよび生命予後を低下させることが知られている。UTxは現在100種以上存在するが、骨代謝に影響を及ぼすUTxについては数種のみしか検討されていない。そこで本研究ではUTxのうち、腎不全患者の血中に多量に蓄積しているカルボニル化合物尿毒症物質のうち、カルボキシメチルリジン（CML）に着目し、初代培養骨芽細胞に対する影響を検討した。その結果、腎不全患者の血中濃度に当たる20 μ M濃度で骨芽細胞の増殖、分化、石灰化に抑制が見られた。また細胞生存率も低下し、これはアポトーシスによるものと考えられた。

6-2 マウス脾臓細胞を用いたユズ果皮抽出物のアレルギー軽減効果の検討

研究者 定金 香里

マウス脾臓細胞を用いたin vitroスクリーニング法によって、ユズ果皮抽出物のアレルギー軽減効果を評価できるか検討した。マウスの系統はC57BL/6NおよびNC/Ngaで、それぞれ卵白アルブミンまたはヤケヒョウヒダニ抗原を腹腔内に3回投与し感作した後、脾細胞を採取、抗原存在下でユズ果皮抽出物に48時間曝露した。またNC/Ngaマウスでは、未感作および1回感作した脾細胞を用いて同様の実験を行った。その結果、卵白アルブミンを投与したC57BL/6Nマウスから採取した脾細胞は、抗原存在下で25、2.5 μ g/mLユズ果皮抽出物曝露によりIL-4産生の低下がみられた。ヤケヒョウヒダニ抗原を投与したNC/Ngaマウスから採取した脾細胞は、抗原存在下で25 μ g/mLユズ果皮抽出物曝露によりIL-4産生の低下傾向がみられた。以上の結果から、ユズ果皮はマウス脾細胞の炎症性サイトカインIL-4の産生を抑える可能性が示唆された。濃度はいずれの実験でも25 μ g/mLで効果がみられた。

6-3 胎仔期粒子状物質の曝露が出生仔免疫担当細胞に及ぼす影響

研究者 吉田 成一

本研究では、出生仔の免疫系に生じた影響メカニズム解明の一助とすることを目的とし、出生した子マウスの制御性T細胞への影響を検討した。ICR系妊娠マウスをSPM群と対照群に分け、SPM群には、SPM (200 μ g/匹)を妊娠7日目に気管内投与した。出生仔が6週齢に達した時点からOVAを気管内投与し、気管支ぜん息モデル動物を作成した。10週齢の出生仔を解剖し、脾臓および気管支肺胞洗浄液を採取した。採取した脾臓は定法に則り赤血球を破壊しリンパ球を得た。気管支肺胞洗浄液 (BAL)中の炎症細胞および、脾臓由来リンパ球を葉酸レセプター (FR)あるいは転写制御因子の一種 (Foxp3)を制御性T細胞の指標であるマーカーとし、また、CD25を活性化T細胞の指標マーカーに用いフローサイトメトリー (FCM)で解析した。FCMを用い、制御性T細胞の解析を検討したところ、FRとCD25の組合せではなく、CD25とFoxp3の組合せで検討することが望ましいことが脾臓由来リンパ球を用いた解析で明らかになった。そこで、CD25 (PE)、Foxp3 (FITC)を用い、以下の4種類のマウスの脾臓由来リンパ球およびBAL中の炎症細胞を解析した (4種類は、対照群、胎仔期SPM曝露群、出生後OVA曝露群、胎仔期SPM出生後OVA曝露群)。対照群と胎仔期SPM曝露群を比較すると、脾臓由来リンパ球およびBAL中炎症細胞ともに、制御性T細胞は胎仔期SPM曝露群で対照群より増加する可能性が認められた。同様に、OVA曝露群とSPMとOVA両曝露群でも、後者が前者より増加する可能性が認められた。

7 奨励研究

7-1 In vivoにおけるバイスタンダー効果の割合の検討

研究者 小嶋 光明

放射線を照射した細胞が周辺の細胞に何らかの細胞生物学的影響を引き起こす現象をバイスタンダー効果という。しかし、バイスタンダー効果に関する報告は、培養細胞を用いた in vitro (試験管内) 実験によるものがほとんどであり、in vivo (生体内) でも同様の現象が生じるのか明らかではない。そこで本研究では、in vivo でのバイスタンダー効果を明らかにするための一環として、1) 放射線を全身照射したマウスの末梢血リンパ球がバイスタンダー効果を誘導するのか、2) 放射線を全身照射したマウスの末梢血リンパ球がどれくらいの期間バイスタンダー効果を誘導し続けるのかを検討した。その結果、1Gy のX線を全身照射したマウスの末梢血リンパ球は、照射後7日間バイスタンダー効果を誘導し続けることが分かった。また、全身照射によって生じた DNA 損傷の約 50~60 % がバイスタンダー効果によって生じている可能性が考えられた。

7-2 造血幹細胞移植患者に対する口腔ケアを行うためのアセスメントシートの検討

研究者 田中 佳子

造血幹細胞移植患者にとって口腔粘膜炎の悪化を防ぐために口腔セルフケアを行うことは重要であるが副作用により実施は難しい。看護師は患者の口腔セルフケア能力を評価し口腔セルフケアを促す援助が必要であるが、口腔セルフケア能力を評価するためのツールはない。本研究では口腔セルフケアを実施するための口腔アセスメントシートを検討することを目的とした。

2007年度日本造血移植学会の骨髄移植診療科別報告件数が20件以上である施設を対象に自記式質問紙調査を行った。看護師は患者の口腔セルフケアを妨げる要因を「移植に伴う身体的変化」の他に「意欲・気力」「自立度」「人格や性質」などを挙げていたが、現在使用している口腔アセスメントシートでそれらをセルフケア能力の評価ができる形で取り入れている施設はなかった。今後は口腔セルフケア能力の評価方法を検討し、口腔アセスメントシートに取り入れる項目を厳選していく必要がある。

7-3 新型インフルエンザ (A/H1N1) の流行に対する学級閉鎖の実態とその効果の検討

研究者 河野 梢子

2009年5月から全世界を震撼させた新型インフルエンザ (A/H1N1) は日本でも、特に10代の若者を中心に感染を広げた。2学期 (9月) 以降多くの学校が臨時休業という対策をとってきたが、県によってその基準は異なり、その効果についての検証はまだなされていない。そこで今回、新型インフルエンザ (A/H1N1) についてこれらを臨時休業の実態を調査、整理し、その効果の検証のための基礎資料を得ることとした。大分県の全小・中・高の学校長に郵送法にてアンケート調査を行った。配布数500部、回収数337部(67.4%)、有効回答数335部(67.0%)であった。臨時休業の期間についての質問では、1クラスの平均人数が多いほど「休業措置の期間が5日以上になった」学校が多く ($p=0.003$)、流行の終息期に「休業措置の期間が4日未満になった」学校が多いことが明らかになった。また、人数の基準についての質問では、1クラスの平均人数が少ないほど「目安にそぐわずに臨時休業を行った」学校が多いことが明らかになった ($p=0.000$)。また、流行を終えた今、次の新型インフルエンザ対策を行っていない学校が34校あることが明らかになった。今回の調査より、臨時休業の基準は一律ではなく、学校の規模や流行の時期を考慮しながら決定したほうが、現場に合っていることが示唆された。

7-4 保育所における慢性疾患・障がいをもつ子どもへの看護職・保育士の支援と専門職としての役割

研究者 田中 美樹、薬師寺 綾、高野 政子

保育所に通う慢性疾患および障害をもつ子ども（以下、患児）に対して看護師・保育士が行っている支援および、看護職配置の有無による支援や困難に感じていることのちがいを明らかにし、患児への支援における保育士と看護職の連携のあり方と看護職の役割を検討することを目的に無記名の自記式質問紙法による調査を行った。担当した患児の慢性疾患および障害は発達障害が152件と最も多かった。保育士による支援は、看護職の有無による有意差はなく「保護者との情報交換」90%以上、保護者への保健指導」10%未満であった。保育士が看護職に望むことは「医療職として知識・情報の提供」「異常の早期発見・緊急時の対応」であった。保育所のケアの質を高めるため、保育士への疾患や障害に対する知識の普及や看護職の小児看護の知識の向上が必要である。

7-5 低リスク妊産婦への院内・院外助産サービスに関する質的分析～産む側とサービス提供者側の受け止め・見解について～

研究者 猪俣 理恵

近年、産科医師不足による助産師の活用や満足できるお産へのニーズの高まりから、院内助産、助産所や自宅での出産が注目されてきているが、安全な出産のために医療機関での出産を望む意見もあり、多様な見解が混在している。このような中、主な援助の担い手である助産師はどのように受け止め、考えてサービスを提供しているのかということ进行分析し、出産サービスの在り方に与えている影響、関係性を明らかにすることを目的とした。

研究対象者の助産師は、院内・院外助産に対してポジティブな受け止めをしており、院内・院外助産サービスを受けた妊産婦の高い満足度を理解していることがうかがえた。同時に、院外助産において、医療の介入が行えない環境での助産師の責任の重さや連携の難しさも認識しており、院内・院外助産の現実を知った上で中立的な立場で、情報提供や助産ケアを行っていることが示唆された。

ただし、対象者はクリニックと助産所での勤務者であり偏りがあるため、今後、周産期センターなど、搬送を受け対応する施設に勤務する助産師にも対象を拡大し、調査を続ける必要がある。

7-6 終末期およびクリティカルケア領域実習で目指す学生像～臨床指導者の視点から～

研究者 江月 優子、津留 英里佳、井伊 暢美、松本 初美、福田 広美、小野 美喜

平成21年度から文部科学省により看護教育基礎教育カリキュラムの改正が行われ、成人看護領域では、終末期およびクリティカルケア領域の応力の向上が求められている。終末期やクリティカル期にある対象は生命および心理的危機状態にあり、学生の実習を受け入れるには困難な環境である。しかし、実践能力を高めるためには臨地実習は不可欠であり、その実習を行うためには、大学と施設が協同して取り組む必要がある。そこで、看護学実習を受け入れている病院の看護師を対象に、終末期及び、クリティカルケア領域実習で、看護師が求める実習学生像についての意識を調査することを目的とした。方法は半構成的インタビューで、平成23年1月から2月に実施した。現在は逐語録から、内容分析を行った。

8 インターネットジャーナル「看護科学研究」

平成11年12月に「大分看護科学研究」として創刊し、平成17年に名称変更したインターネットジャーナル「看護科学研究」は、第9巻1号が平成22年4月に、第9巻2号は平成23年3月に刊行された。論文および執筆要項等は本学ホームページ (<http://www.oita-nhs.ac.jp/journal/index.html>) に公開されており、誰でも無料で投稿および講読することができる。

第9巻第1号

資料

外来で利用できる看護記録の提案—急性の痛みを伴う患者に着目して— 甲斐 仁美、桜井 礼子、藤内 美保、草間 朋子

資料・報告

看護系大学の新人教員に対するファカルティ・ディベロップメント (FD) 推進のための文献調査に基づく課題 石田 佳代子

トピックス

大分県立看護科学大学 第11回看護国際フォーラム

「終末期患者のための緩和ケア」 (Dr. Ian Maddocksの講演から) 福田 広美

「いのちの限り」と向き合う人に寄り添うケア」 (田村恵子先生の講演から) 小野 さと子

「ホスピス・緩和ケア：韓国の現状と課題」 (Dr. Hyun Sook Kimの講演から) 桑野 紀子

第9巻第2号

原著

労働者の健康的な生活習慣への改善のプロセス—組織的な健康づくりを行うA大規模事業所の中年期の男性労働者への面接から— 高波 利恵、佐藤 しのぶ、松尾 太加志

トピックス

米国のナースプラクティショナーの活動と課題—米国ナースプラクティショナー学会会長講演より— 高野 政子

大分県立看護科学大学 第12回看護国際フォーラム

「高齢社会における身体的・精神的・社会的ヘルスケア～韓国の現状と課題～」 (趙飛龍先生の講演から) 高波 利恵

「アメリカ合衆国における認知症ケア」 (Dr. Mackinの講演から) 影山 隆之

「On Lok Lifewaysにおける包括的ケア・プログラム」 (J. Fujii先生の講演から) 松本 初美

「日本における認知症ケア—看護師が行う認知症の医療と生活の質を高めるケア—」 (得居みのり先生の講演から) 津隈 亜弥子

9 業績

著書

著書：安部 眞佐子 他、編集：加藤 征治

からだの動きの解剖生理学，金芳堂，京都府，2011

岩崎 香子、大和 英之

THE BONE，メディカルレビュー社，東京都，2010

研究論文

- 中村 祥子、安部 眞佐子、堤 ちはる、吉留 厚子、大分市の子育て施設の食物アレルギーへの対応、*チャイルドヘルス*, 13 (10), 45-48, 2010.
- 石田 佳代子、看護系大学の新人教員に対するファカルティ・ディベロップメント(FD)推進のための文献検討に基づく課題、*看護科学研究*, 9 (1), 10-18, 2010.
- M. He, T. Ichinose, S. Yoshida, M. Nishikawa, I. Mori, R. Yanagisawa, H. Takano, K. Inoue, G. Sun, T. Shibamoto, Urban particulate matter in Beijing, China, enhances allergen-induced murine lung eosinophilia, *Inhal Toxicol*, 22 (9), 70-718, 2010.
- M. He, T. Ichinose, S. Yoshida, M. Nishikawa, I. Mori, R. Yanagisawa, H. Takano, K. Inoue, G. Sun, T. Shibamoto, Airborne Asian sand dust enhances murine lung eosinophilia, *Inhal Toxicol*, 22 (12), 1012-1025, 2010.
- Y. Hiraku, S. Kawanishi, T. Ichinose, M. Murata, The role of iNOS-mediated DNA damage in infection- and asbestos-induced carcinogenesis, *Ann N Y Acad Sci.*, 1203, 15-22, 2010.
- A. Yasuda, K. Inoue, C. Sanbongi, R. Yanagisawa, T. Ichinose, T. Yoshikawa, H. Takano, Dietary supplementation with fructooligosaccharides attenuates airway inflammation related to house dust mite allergen in mice, *Int J Immunopathol Pharmacol.*, 23 (3), 727-35, 2010.
- 島田 三恵子、足立 智美、神谷 整子、瀬川 昌也、早瀬 麻子、乾 つぶら、坂口 けさみ、乳児における夜間の就寝時刻が最長睡眠時間の長さに及ぼす影響、*小児保健研究*, 69 (5), 2010.
- 乾 つぶら、島田 三恵子、早瀬 麻子、鮫島 道和、新川 治子、緒方 敏子、時本 秋江、保条 麻紀、竜岡 久枝、Pittsburgh Sleep Quality Indexによる妊娠末期から産後4ヶ月の母親の睡眠の質に関する縦断研究、*周産期医学*, 40 (12), 2010.
- 梅野 貴恵、長期母乳育児経験のある女性のSMI得点に関する共分散構造分析、*母性衛生*, 51 (2), 498-505, 2010.
- 右田 温美、梅野 貴恵、熊谷 淳二、和田 美智代、祖母の母乳育児に対する意識に関する研究—祖父母学級受講の有無による比較—、*ペリネイタルケア*, 9 (8), 92-99, 2010.
- 榎本 恭子、梅野 貴恵、軽部 薫、母乳育児に対する父親の意識とその要因に関する研究—母親との比較から—、*母性衛生*, 51 (4), 730-737, 2011.
- 江藤 真紀、草間 朋子、大学院修士課程における保健師教育の開始—2011年度から—、*保健の科学*, 52 (11), 737-742, 2010.
- M. Ojima, A. Furutani, N. Ban, M. Kai, Persistence of DNA double strand breaks in normal human cells induced by radiation-induced bystander effect, *Radiat. Res.*, 175, 90-96, 2011.
- 小野 美喜、喜び・苦悩・学び—若手看護師のよい・よくない看護師体験から—、*日本看護倫理学会誌*, 3 (1), 11-18, 2011.
- 林 美貴子、笹原 信一郎、友常 祐介、羽岡 健史、梅田 忠敬、宇佐見 和哉、富田 絵梨子、吉野 聡、影山 隆之、小林 敏郎、松崎 一葉、メンタルヘルス不全による休業事例の検討—職場復帰への影響要因を探る—、*産業精神保健*, 18 (3), 218-225, 2010.
- Y. Horiuchi, Y. Harushima, H. Fujisawa, T. Mochizuki, M. Kawakita, T. Sakaguchi, N. Kurata, A simple optimization can improve the performance of single feature polymorphism detection by Affymetrix expression arrays, *BMC Genomics*, 11 (315), 2010.
- 桜井 礼子、福田 広美、栗屋 典子、看護ケアの質評価・改善システム アウトカム評価、*看護研究*, 43 (5), 389-394, 2010.

E. Koike, R. Yanagisawa, K. Sadakane, K. Inoue, T. Ichinose, H. Takano, Effects of diisononyl phthalate on atopic dermatitis in vivo and immunologic responses in vitro, *Environ Health Perspect.*, 118 (4), 472-478, 2010.

品川 佳満、西岡 菜々子、野口 直美、伊東 朋子, 長時間心電図の心拍変動解析による筋萎縮性側索硬化症の心・血管系自律神経機能評価, *日本職業・災害医学会*, 58 (3), 109-115, 2010.

下田 浩, リンパ管発生・新生の分子形態学的プロフィール, *リンパ学*, 33, 39-41, 2010.

関屋 伸子、原 由希子、谷口 一郎、肥田木 孜, 若年男女における子宮頸がん検診に関する意識の比較, *日本看護学会論文集-母性看護-*, 41, 33-35, 2011.

高波 利恵、佐藤 しのぶ、松尾 太加志, 健康を支援する職場の社会文化的環境の特徴とその関連要因-組織的な健康増進活動を行うA大規模事業所労働者への面接から-, *産業看護*, 2 (5), 462-469, 2010.

高波 利恵、佐藤 しのぶ、松尾 太加志, 労働者の健康的な生活習慣への改善のプロセス~組織的な健康づくりを行うA大規模事業所の中年期の男性労働者への面接から~, *看護科学研究*, 9 (2), 30-41, 2011.

高野 政子, アメリカNP視察報告, *医療タイムス*, 1969, 6-7, 2010.

田中 美樹、布施 芳史、高野 政子, 「父親になった」という父性の自覚に関する研究, *母性衛生*, 52 (1), 2011.

藤内 美保、桜井 礼子、高野 政子他, ナースプラクティショナー (NP・診療看護師) の役割拡大に対する医師の意識調査, *熊本保険医新聞*, 413, 2010.

吉村 伊世、大隈 咲季、藤内 美保, 求められるナースプラクティショナー (診療看護師とは) Part I 過疎地・無医地区編, *看護*, 62 (10), 90-95, 2010.

大隈 咲季、吉村 伊世、藤内 美保, 求められるナースプラクティショナー (診療看護師とは) Part II 医療機関充実地域編, *看護*, 62 (11), 90-96, 2010.

石走 知子、吉留 厚子、林 猪都子, 望まない妊娠を防止するための助産師の受胎調節指導活動活性化のためのリカレント教育に関する研究, *母性衛生*, 51 (2), 329-335, 2010.

F. Takahashi, A. Endo, K. Sato, T. Hasegawa, Y. Katsunuma, K. Ono, T. Yoshitake, N. Ban, M. Kai, Analysis of organ doses from Computed Tomography (CT) examination by the radiation transport calculation to develop the dosimetry system, *WAZA-ARI*, *Prog. in Nucl. Sci. Technol.*, 1, 517-520, 2011.

その他の論文

- 市瀬 孝道, 黄砂のアレルギー増悪作用, THE UNIVERSITY OF TOKYO 環境安全, 128, 8-9, 2010.
- 市瀬 孝道, 黄砂による健康への影響, 健康教育, 725, 64-67, 2011.
- 市瀬 孝道, 黄砂のアレルギー疾患への影響, 医事新報, 4537, 56-57, 2011.
- 小野 美喜、福田 広美, NP養成機関からの報告 大分県立看護科学大学修士課程, 看護 日本看護協会機関誌, 62 (9), 74-75, 2010.
- 甲斐 倫明, システム放射線生物学について考える —発がんのリスク評価の観点から—, 放射線生物研究, 45 (4), 357-366, 2010.
- 甲斐 倫明, 放射線リスクとその防護 —歴史的進展と課題—, 病体生理誌, 44, 1-7, 2010.
- 甲斐 倫明, 放射線のリスクと科学について考える, FBNews, 404, 13-18, 2010.
- 甲斐 倫明, 放射線の影響を理解する, ESI-NEWS, 29 (29), 65-67, 2011.
- 影山 隆之, 騒音による住民の睡眠への影響を経済的に評価できるか, 騒音制御, 34, 463-466, 2010.
- 草間 朋子、藤内 美保、江藤 真紀、林 猪都子, 大学の看護教育における専門的能力養成の工夫, Nurse eye, 23 (2), 26-38, 2010.
- 桑野 紀子, ホスピス・緩和ケア 韓国の現状と課題 (Dr. Hyun Sook Kim の講演から), 看護科学研究, 9, 28-29, 2011.
- 高波 利恵, 第3回国際産業看護・第2回アジア産業看護ジョイント学術集会に参加して, 健康開発, 15 (2), 61-63, 2011.
- 高波 利恵, World Rreport 今月の海外文献 (文献紹介), 産業看護, 3 (1), 72, 2011.
- 高波 利恵, World Rreport 今月の海外文献 (文献紹介), 産業看護, 3 (2), 84, 2011.
- 高波 利恵, 「高齢社会における身体的・精神的・社会的ヘルスケア～韓国の現状と課題～」 (趙飛龍先生の講演から), 看護科学研究, 9 (2), 46-48, 2011.
- 福田 広美, 大分県立看護科学大学 第11回看護国際フォーラム「終末期患者のための緩和ケア」 (Dr. Ian Maddocksの講演から), 看護科学研究, 9 (1), 19-22, 2010.
- S. Miyauchi, Interpretation of intonation with modality in the same scene of Sense and Sensibility, 大分県立看護科学大学HP 研究紹介, 2010.
- 宮崎 文子、高野 政子、桜井 礼子, ウズベキスタンで看護教育を変える カリキュラム改正の実際 母性看護、小児看護、地域看護, 看護教育, 51 (4), 340-347, 2010.
- 森本 卓哉、須崎 友紀、小野 美喜、藤内 美保、草間 朋子、大橋 京一, ナースプラクティショナー養成コースにおける臨床薬理実習 (P-drug)による処方シミュレーション教育, 医学教育, 41, 128, 2010.

学術講演等

市瀬 孝道, 黄砂のアレルギー増悪作用, 日本職業・環境アレルギー学会, 群馬県, 2010.7.

市瀬 孝道, 黄砂とアレルギー, 第17回日本免疫毒性学会学術大会.シンポジウム「免疫毒性を修飾する感受性要因」, 茨城県, 2010.9.

市瀬孝道, 黄砂の健康影響, 大気環境学会シンポジウム「越境大気汚染の現状」, 福岡県, 2011.1.

Y. Iwasaki, Uremic toxins and Bone Quality, 55th Japanese Society of Dialysis Therapy, Internal Symposium, Hyogo, Japan, 2010.6.

甲斐 倫明, ICRPドラフト : Lung cancer risk from radon and progeny, 日本保健物理学会討論会, 東京都, 2010.9.

甲斐 倫明, 日本におけるシステム放射線生物学研究の夜明け -最新の研究成果と今後の展開-, 日本放射線影響学会ワークショップ, 京都府, 2010.10.

甲斐 倫明, 放射線リスク評価における疫学と生物学のギャップを超えるためのアプローチ, 保物セミナー2010, 大阪府, 2010.10.

M. Kai, Multistage carcinogenesis model and lung cancer risk, RERF mini-workshop, Hiroshima, Japan, 2011.2.

甲斐 倫明, ICRP2007年勧告の法令取り入れに関する放射線審議会基本部会の検討状況, 日本保健物理学会勉強会, 東京都, 2011.2.

影山 隆之, メンタルヘルスリテラシーを育てる保健体育教育と自殺予防教育, 日本学校メンタルヘルス学会第14回大会, 東京都, 2011.1.

佐伯 圭一郎, グレードアップ看護学研究 研究をデザインする, 日本看護研究学会 第36回学術集会, 岡山県, 2010.8.

高野 政子, 問われる看護職の専門性と自律-看護職の役割拡大と診療看護師(NP)および特定看護師(仮称)の養成, 第41回日本看護学会-看護管理-学術集会, 新潟県, 2010.10.

平野 互, 患者の権利擁護 ～看護倫理とアドヴォカシーの観点から, (社)日本看護協会神戸研修センター研修会「看護に必要な法の理解」, 兵庫県, 2010.6.

S. Yoshida, Effects of particulate matter on reproductive system and immune system, The 8th KOSAE-JSAE Joint Symposium -Management of Hazardous Air Pollutants - How to approach-, Seoul, Korea, 2010.5.

宮内 信治, 物語朗読における音調変動の解釈, 大分県立看護科学大学 若葉祭 ポスター掲示, 大分市, 2010.5.

宮内 信治, 物語朗読における音調変動の解釈, 大分県立看護科学大学 オープンキャンパス ポスター掲示, 大分市, 2010.7.

S. Yoshida, Effects of fetal exposure to particles on reproductive function in male offspring, 11th International Symposium on Spermatology, Okinawa, Japan, 2010.6.

S. Yoshida, Effects of particulate matter on male reproductive function, Asia and Africa Science Platform Program International Seminar 2010, Ishikawa, Japan, 2010.9.

吉田 成一, 大気浮遊粒子状物質の雄性生殖機能への影響, 第131回日本薬学会 シンポジウム, 静岡県, 2011.3.

学会発表

井伊 暢美, 認知症者への構造化した関わりの有効性に関する検討, 日本認知症ケア学会 2010年度九州・沖縄地域大会, 福岡県, 2011.3.

石岡 洋子, A県の勤務助産師の院内助産システムについての認知度と関心, 日本看護学会 母性看護, 茨城県, 2010.7.

石田 佳代子, スウェーデンにおける災害医療教育 —日本における災害看護教育の課題—, 第36回日本看護研究学会学術集会, 岡山県, 2010.8.

賀 森、市瀬 孝道、吉田 成一、西川 雅高, 黄砂は肺炎桿菌誘発性の炎症を増悪する, 第131回日本薬学会, 静岡県, 2011.3.

市瀬 孝道、賀 森、吉田 成一、西川 雅高, 風送黄砂が気管支喘息病態に与える影響, 第131回日本薬学会, 静岡県, 2011.3.

伊東 朋子, A病院の看護師の職務満足度の実際, 第59回日本農村医学会学術総会, 岩手県, 2010.11.

稲垣 敦, 高齢者の呼吸循環器系持久力の簡易評価法: 理論と方法, 日本体育学会第61回大会, 愛知県, 2010.9.

稲垣 敦, 大分県立看護科学大学健康増進プロジェクトの活動, 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京都, 2010.9.

稲垣 敦, 階段を利用した最大酸素摂取量の簡易推定法: 理論と方法, 第69回日本公衆衛生学会総会, 東京都, 2010.10.

稲垣 敦, 介護予防運動「お元気じゃんしゃん体操」の効果: 性、年代、初期水準等に注目して, 日本体育測定評価学会第10回大会, 石川県, 2011.2.

T. Inui, I. Hayashi, Y. Umeno, M. Abe, Sexual education for elementary school students in Japan, The 11th Asia-Oceania Conference for Sexology, Bali, Inodnesia, 2010.8.

乾 つぶら、林 猪都子、猪俣 理恵, 妊娠健康診査・出産施設の情報収集に関する調査研究, 第51回日本母性衛生学会学術集会, 石川県, 2010.11.

乾 つぶら、林 猪都子、猪俣 理恵, 助産ケアの出産満足への影響, 第30回日本看護科学学会学術集会, 北海道, 2010.12.

岩崎 香子、大和 英之、深川 雅史, 低代謝回転骨を伴う腎不全動物の骨組成変化と腎機能程度との関連, 第30回日本骨形態計測学会学術集会, 鳥取県, 2010.5.

矢野 彰三、岩崎 香子、徳本 秀明、大和 英之、山口 徹、杉本 利嗣, ラマン分光法を用いた透析患者の骨質評価, 第30回日本骨形態計測学会学術集会, 鳥取県, 2010.5.

渡邊 敦子、柳ヶ瀬 かほり、松山 和弘、野村 芳雄、松山 誠、松山 家久、阿部 克成、三好 信行、友雅 司、岩崎 香子, 透析患者の踵骨量と血中Fetuin-A濃度との関連, 第55回日本透析医学会学術集会総会, 兵庫県, 2010.6.

柳ヶ瀬 かほり、大和 英之、岩崎 香子, Fetuin-A産生に対する尿毒症状態の影響, 第53回日本腎臓学会学術集会, 兵庫県, 2010.6.

岩崎 香子、大和 英之、深川 雅史, 無形成骨症における易骨折性と骨質の変化に関する振動分光学的検討, 第28回日本骨代謝学会学術集会, 東京都, 2010.7.

S. Yano, Y. Iwasaki, A. Tokumoto, H. Yamato, T. Yamaguchi, T. Sugimoto, Assessment of bone tissue composition in patients undergoing dialysis therapy using Raman spectroscopy, American Society Bone and Mineral Research 32th Annual meeting, Toronto, Canada, 2010.10.

- Y. Iwasaki, H. Yamato, M. Fukagawa, Accumulation of Maillard Reaction Products involve Bone Fragility in Adynamic Bone Disease, American Society Bone and Mineral Research 32th Annual meeting, Toronto, Canada, 2010.10.
- J.J. Kazama, Y. Iwasaki, H. Yamato, I. Narita, A. Tokumoto, Raman spectrum properties and morphological charactersitics in human uremic bone samples, American Society of Nephrology Kidney Week, Denver, USA, 2010.11.
- 野々下文香、岩崎 香子, 透析患者の身体活動状況とQOLとの関連, 大分県看護研究学会, 別府市, 2011.2.
- 梅野 貴恵, 長期間の母乳育児と将来の更年期症状との関係, 第25回日本母乳哺育学会学術集会, 山口県, 2010.9.
- M. Ojima, H. Eto, N. Ban, M. Kai, Relationship between radiation-induced bystander effects and radioadaptive response by low dose radiation, The third Asian and Oceanic congress on radiation protection, Tokyo, Japan, 2010.5.
- 小嶋 光明、古谷 旭、伴 信彦、甲斐 倫明, 放射線誘発バイスタンダー効果によるDNA損傷は修復されにくいのか?, 第53回放射線影響学会, 京都府, 2010.10.
- 小西 恵美子、小野 美喜, 喜びと学び: 若手看護師が体験する「よい看護師」「よくない看護師」, 日本看護倫理学会, 北海道, 2010.6.
- E. Konishi, M. Ono, Happiness, work distress and learning: Japanese junior nurses' experiences of being and observing the good or bad nurse, The International Centre for Nursing Ethics, 11th Anniversary Conference 13th and 14th, Finland, 2010.9.
- 小野 美喜、山西文子、新野峰子ほか, 看護師の業務拡大に伴うアウトカム評価に関する調査研究のすめ方, 第30回日本看護科学学会学術集会, 北海道, 2010.12.
- M. Kai, N. Ban, Issues on the nominal risk of lung cancer due to radon for effective risk control, The third Asian and Oceanic Congress on Radiation Protection, Tokyo, Japan, 2010.5.
- 河野 梢子, ALS患者からみた「よい看護師」に関する質的研究, 日本看護倫理学会 第3回年次大会, 北海道, 2010.6.
- N. Kuwano, A Survey Study of University Students Stress Responses in Japan, Korea, Indonesia, and the USA, The 14th Congress of the Asian College of Psychosomatic Medicine, Beijing, China, 2010.9.
- 定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子, アトピー性皮膚炎モデルマウスに対する北京降下煤塵塗布の影響, 第51回大気環境学会年会, 大阪府, 2010.9.
- 定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子, 塩化ベンザルコニウムおよびグルコン酸クロルヘキシジンがアトピー性皮膚炎に及ぼす影響, 第60回日本アレルギー学会秋季学術大会, 東京都, 2010.11.
- K. Sadakane, T. Ito, T. Ichinose, Effects of active ingredients in hand antiseptics on atopic dermatitis model NC/Nga mice, 14th East Asian Forum of Nursing Scholars, Seoul, Korea, 2011.2.
- 定金 香里、市瀬 孝道、高野 裕久、柳澤 利枝、小池 英子, アスペルギルス反復投与がダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎マウスモデルに及ぼす影響, 第81回日本衛生学会学術総会, 東京都, 2011.3.
- 佐藤 みつよ、吉田 裕子、吉村 匠平、関根 剛, 呼称としての「エンゼルメイク」「ラストメイク」「死化粧」の印象分析 - サービスの受け手側からの検討 -, 九州心理学会第71回大会, 長崎県, 2010.11.
- 下田 浩, 脈管成長因子グラフトにおけるリンパ管新生, 第115回日本解剖学会総会・学術講演会, 岩手県, 2010.3.
- 下田 浩, リンパ管新生・新生におけるAngiopoietin-2の発現・機能解析, 第51回日本組織細胞化学学会, 東京都, 2010.9.

下田 浩, lymphedema-distichiasisモデルにおけるリンパ節異形成の分子形態学的解析, 第42回臨床分子形態学会, 静岡県, 2010.9.

関根 剛, 医療機関において犯罪被害者が経験する肯定的・否定的体験, 九州心理学会, 長崎県, 2010.11.

関屋 伸子, 褥婦の産後うつ傾向と求められる退院時保健指導の検討, 第12回日本母性看護学会学術集会, 三重県, 2010.6.

関屋 伸子、原由希子、谷口 一郎、肥田木 孜, 若年男女における子宮頸がん検診に関する意識の比較, 第41回日本看護学会-母性看護-, 茨城県, 2010.7.

原口 里恵、関屋 伸子、品川 佳満、穴井 孝信, 若年者におけるHPVワクチンの認知に関する研究, 第41回日本看護学会-母性看護-, 茨城県, 2010.7.

谷口 夕佳、関屋 伸子、壺岐 由加利、永井 義雄, 逆搬送(バック・トランスファー)となる褥婦が転院に際して希望する情報に関する調査, 平成22年宮崎県母性衛生学会学術集会, 宮崎県, 2010.1.

T. Anai, N. Sekiya, N. Tsukamoto, A. Maruyama, F. Miyazaki, Comparison of Three Japanese Domestic Guideline for Prenatal Weight Gain with Those of the Institute of Medicine, The 4th Japan-Korea International Nursing Conference, Nagasaki, Japan, 2010.10.

原由希子、関屋 伸子, 若年者に対する子宮頸がん検診の情報提供で強化すべき内容の検討, 第51回日本母性衛生学会学術集会, 石川県, 2010.11.

神品 朱里、関屋 伸子、谷口 夕佳、秦 博子、秦 喜八郎, ハイリスク出産であった褥婦が希望する母乳育児継続サポート, 第51回日本母性衛生学会学術集会, 石川県, 2010.11.

高波 利恵、佐藤 しのぶ, 健康的な生活習慣への行動変容に関わる職場環境とその関連要因-文化的環境に着目して-, 第83回 日本産業衛生学会, 福井県, 2010.5.

R. Takanami, S. Sato, Features, contributing factors and influences of cultural environment that supports the health among male workers in a large-sized company of Japan, ICOHN and ACOHN joint conference 2010, Kanagawa, Japan, 2010.8.

安部 悠、高野 政子, 農山漁村地域における子どもの発病時の保護者の受療行動と医療ニーズ, 日本小児看護学会第20回学術集会, 兵庫県, 2010.6.

M Takano, Experience of nursing intervention in Clift-lip and palate with dyslalia and salivation, The 6th Congress of the International Cleft Palate Foundation, Seoul, Korea, 2010.6.

竹中 美穂、高野 政子, 特別支援学校における看護師と養護教諭の医療的ケアの実施と連携, 日本小児看護学会 第20回学術集会, 兵庫県, 2010.6.

三好 由記、田中 美樹、高野 政子, 食物アレルギーをもつ児と保護者に対する保育所看護職の取り組み, 日本小児看護学会 第20回学術集会, 兵庫県, 2010.6.

M. Takano, Use of TV conference system to Link the Hospital Class with the Regular School Class of a child undergoing chemotherapy, The 42nd Annual Congress of the International Society of Pediatric Oncology, Boston, USA, 2010.10.

森本 愛弓、田中 美樹、高野 政子, 小児喘息の在院日数短期化にともなう看護師が行う退院指導の実際, 日本看護研究学会第15回九州・沖縄地方会学術集会, 福岡県, 2010.11.

高野 政子, 化学療法をうけた子どもの通う院内学級と原籍校をTV会議システムでつないだ経験, 第8回日本小児がん看護学会, 大阪府, 2010.12.

高野 政子、田中 美樹, 子どもが発病した時の親の受療行動と医療ニーズにみる小児看護師への期待, 第30回日本看護科学学会学術集会, 北海道, 2010.12.

田中 美樹, 食物アレルギーをもつ児と保護者に対する保育所看護職の取り組み, 第20回日本小児看護学会学術集会, 兵庫県, 2010.6.

田中 美樹, 小児喘息の在院日数短期化にともなう看護師が行う退院指導の実際, 第15回日本看護研究学会九州・沖縄地方会学術集会, 福岡県, 2010.11.

山田 剛弘、藤内 美保, 介助動作の身体負担軽減のための効率の良い上肢の力発揮の検証, 第30回日本看護科学学会, 北海道, 2010.12.

I. Hayashi, T. Inui, A. Yoshidome, A. Yoshidome, K. Konishi, Married couples' views of family planning guidance after childbirth in Japan, The 11th Asia-Oceania Conference for Sexology, Bali, Indonesia, 2010.8.

古屋 佳子、林 猪都子、乾 つぶら, 医師外来と助産師外来の待ち時間・実施時間と妊婦の感じ方, 第7回大分県母性衛生学会学術集会, 大分市, 2010.10.

末清 寛子、高橋 典子、佐藤 由枝、松原 聖子、田代 文恵、浦崎 康子、衛藤 眞理、松原 美保、曾根崎 昭三、林 猪都子、乾 つぶら、猪俣 理恵, 先天性甲状腺機能低下症スクリーニングでの非ヨード消毒在使用による変化, 第7回大分県母性衛生学会学術集会, 大分市, 2010.10.

阿南 良枝、林 猪都子、安部 眞佐子, 月経随伴症状の軽減に対する運動の有用性, 第51回日本母性衛生学会学術集会, 石川県, 2010.11.

吉留 厚子、林 猪都子、石走 知子、小西 清美, 望まない妊娠を防止するための助産師の受胎調節指導活動活性化のためのリカレント教育研究, 第51回 日本母性衛生学会学術集会, 石川県, 2010.11.

栗山 愛、林 猪都子、乾 つぶら、吉留 厚子, 家族計画に関する夫婦の意識の相違, 第51回日本母性衛生学会学術集会, 石川県, 2010.11.

古屋 佳子、林 猪都子、乾 つぶら, 助産師外来に対する妊婦の期待と満足と比較, 第51回日本母性衛生学会学術集会, 石川県, 2010.11.

林 猪都子、乾 つぶら、吉留 厚子、猪俣 理恵, 妊娠末期における初産婦と経産婦の睡眠と母性不安, 第30回日本看護科学学会学術集会, 北海道, 2010.12.

渡邊 めぐみ、林 猪都子、乾 つぶら, 院内助産開設に向けての概念の構築—院内助産モデルケースの聞き取り調査から—, 第25回日本助産学会学術集会, 愛知県, 2011.3.

F. Takahashi, K. Sato, A. Endo, K. Ono, T. Yoshitake, T. Hasegawa, Y. Katsunuma, N. Ban, M. Kai, WAZA-ARI: Computational dosimetry system for x-ray CT examinations. I. Radiation transport calculation for organ and tissue doses evaluation using JM phantom, The Third Asian and Oceanic Congress for Radiation Protection (AOCRP-3), Tokyo, Japan, 2010.5.

N. Ban, F. Takahashi, K. Ono, T. Hasegawa, T. Yoshitake, Y. Katsunuma, K. Sato, A. Endo, M. Kai, WAZA-ARI: Computational dosimetry system for x-ray CT examinations. II. Development of web-based system, The Third Asian and Oceanic Congress for Radiation Protection (AOCRP-3), Tokyo, Japan, 2010.5.

N. Ban, F. Takahashi, K. Sato, A. Endo, K. Ono, T. Hasegawa, T. Yoshitake, Y. Katsunuma, M. Kai, Development of web-based CT dose calculator, WAZA-ARI, International Conference on Radiation Protection in Medicine, Varna, Bulgaria, 2010.9.

F. Takahashi, K. Sato, A. Endo, K. Ono, T. Yoshitake, T. Hasegawa, Y. Katsunuma, N. Ban, M. Kai, Effects of human model configuration in Monte Carlo calculations on organ doses from CT examinations, Joint International Conference on Supercomputing in Nuclear Applications + Monte Carlo 2010, Tokyo, Japan, 2010.10.

長谷川 隆幸、勝沼 泰、高橋 史明、伴 信彦、甲斐 倫明, 臓器線量測定における蛍光ガラス線量計の相互影響について, 日本放射線技術学会第38回秋季学術大会, 宮城県, 2010.10.

伴 信彦, 放射線発がんへの適用可能性と限界 (ワークショップ: 日本におけるシステム放射線生物学研究の夜明け—最新の研究成果と今後の展開—), 日本放射線影響学会第53回大会, 京都府, 2010.10.

S. Miyauchi, Factors of pitch movement choices in the same scene of the different re-recordings of Sense and Sensibility, The 15th Annual Conference of the English Phonetic Society of Japan, Hyogo, Japan, 2010.6.

吉田 成一、賀 森、西川 雅高、市瀬 孝道、日本に飛来する粒子による精子形成・精子運動能への影響、日本アンドロロジー学会、東京都、2010.7.

吉田 成一、甲斐 貴雅、石川 雄一、市瀬 孝道、柑橘果皮脂溶性成分中に含まれるアレルギー抑制作用を有する物質の探索、フォーラム2010：衛生薬学・環境トキシコロジー、東京都、2010.9.

吉田 成一、賀 森、西川 雅高、市瀬 孝道、日本で採取した大気浮遊粒子状物質がマウス精子性状に与える影響、第131回日本薬学会、静岡県、2011.3.

吉村 匠平、大学間・ライブ型・遠隔講義における学習環境の構築、第16回大学教育研究フォーラム、京都府、2010.3.

吉村 匠平、初年次教育としての協同教育、第7回日本協同教育学会、山口県、2010.9.

吉村 匠平、看護学生の学業継続を可能にする要因について、第71回九州心理学会、長崎県、2010.11.

10 地域貢献

講演等

- 井伊 暢美 高齢者の方への支援と構造化～自閉症の方々の老後を考えるヒント，藤女子大学QOL研究所・自閉症援助技術研究会公開講座，北海道，2010.12
- 石田 佳代子 看護過程，平成22年度保健師・助産師・看護師実習指導者講習会，大分市，2010.6
フィジカルアセスメント，平成22年度大分県看護協会研修会 ジェネラリスト I，大分市，2010.8
看護職員に必要な検査の知識，平成22年度看護力再開発講習会，大分市，2010.10
看護過程と看護記録，平成22年度看護力再開発講習会，大分市，2010.10
- 稲垣 敦 介護予防運動，大分市介護予防事業，大分市，2010.4
介護予防運動，人生いきいきはつらつスクール，大分市，2010.4
健康チェック，トリニータ健康づくりプログラム，大分市，2010.6
生活の中で楽しくからだを動かす，食生活改善推進協議会員の養成講座，竹田市，2010.6
介護予防運動，介護予防サポーター養成講座，九重町，2010.7
運動指導・体力測定，大分丘の上病院スポーツデー，大分市，2010.7
介護予防運動，佐賀関・神崎地域包括支援センター教室，大分市，2010.8
介護予防運動，高齢社会を元気にする女性の会，別府市，2010.9
健康チェック，トリニータ健康づくりプログラム，大分市，2010.10
健康チェック，大分県森林整備センター主催紅葉ウォーキング，大分市，2010.11
健康チェック，第25回ななせの里まつり，大分市，2010.11
高齢者の体力測定，姫島発！あったかなむらづくり事業，姫島村，2010.11
体力チェック，姫島発！あったかなむらづくり事業，姫島村，2101.11
体力測定，姫島発！あったかなむらづくり事業，姫島村，2010.11
身体活動量，姫島発！あったかなむらづくり事業，姫島村，2010.11
メタボリック症候群と運動，35歳健康セミナー，大分市，2010.11
森林歩行が自律神経活動に及ぼす効果，森林ウォーキング実証研究報告会，大分市，2010.12
介護予防運動，姫島発！あったかなむらづくり事業，姫島村，2011.1
エクササイズウォーキング，姫島発！あったかなむらづくり事業，姫島村，2011.2
姫島村高齢者の健康・長寿と体力、生活習慣、身体活動量の関係，姫島発！あったかなむらづくり事業報告会，姫島村，2011.2
エクササイズウォーキング，姫島発！あったかなむらづくり事業，姫島村，2011.3
- 岩崎 香子 簡単な理科実験，大分県立看護科学大学若葉祭公開講座，大分市，2010.5
転ばぬ先の杖-転倒して寝たきりにならないために-，富士見ヶ丘はつらつサロン健康講話，大分市，2010.10
- 梅野 貴恵 「大切ないのちをつないで」，大分県立大分商業高校出前授業，大分市，2010.6
「看護研究の基礎」，平成22年度大分県看護協会研修会，大分市，2010.7
「看護職とは？」，大分県立大分西高校大学模擬講義，大分市，2010.8
「いのちと性の講座」，大分県立国東高校出前授業，国東市，2010.9
「大切ないのち」，大分市立三佐小学校いのちの出前授業，大分市，2010.10
「思春期の性といのちの教育」，平成22年度別府市教育庁生涯学習課 思春期子育て学級第6回，別府市，2010.10
「看護職とは？」，大分県立雄城台高校ゲストレクチャー，大分市，2011.1

- 小野 美喜 実習指導計画・指導案作成の実際，大分県看護協会実習指導者講習会，大分市，2010.5
訪問看護のエビデンス事例研究の取り組み方・まとめ方，別府市訪問看護ステーション連絡協議会・在宅看護研修会，大分市，2010.9
- 甲斐 倫明 医療被ばくの理解と対処，佐藤第一病院研修会，宇佐市，2010.10
原子力災害と放射線対応，大分県放射線の影響に関する研修会，大分市，2011.3
- 影山 隆之 自殺を減らすためにわたしたちができること，中津市自殺対策事業民生委員児童委員研修会，中津市，2010.6
職場におけるメンタルヘルス～管理監督者が知っておきたいこと，大分県警職場管理者のためのメンタルヘルスセミナー，大分市，2010.6
自殺対策の現状と看護師の役割，平成22年度大分県看護協会自殺対策専門研修，大分市，2010.7
ストレスと上手につきあっていますか？～介護に従事する人のストレス，大分県社会福祉介護研修センター 平成22年度第2回公開介護教室，大分市，2010.7
職場のメンタルヘルスと自殺予防，大分産業保健推進センター 平成22年度第9回産業医研修，別府市，2010.7
自殺は減らせる死-現状、市町村窓口の役割、担当者にできること，日田市自殺担当部署連絡会・研修会，日田市，2010.7
心の健康について-眠れていますか？睡眠と休養のとり方，日田市市民講演会，日田市，2010.7
メンタルヘルス，大分県市町村職員研修センター平成22年度新任課長級研修，大分市，2010.7
自殺を減らすためにわたしたちができること，日出町民生委員研修会，日出町，2010.7
自殺を減らすためにわたしたちができること，中津市自殺対策人材養成研修，中津市，2010.9
自殺を減らすためにわたしたちができること，日田市民生委員・福祉委員研修会，日田市，2010.9
自殺と自殺対策の基本的な知識，豊後大野市自殺対策ゲートキーパー養成研修，豊後大野市，2010.9
心の健康のための働きやすい職場づくり，大分県教育委員会メンタルヘルス推進者研修会，別府市，2010.9
つながりましょう、支えましょう、命を守るために，大分県自殺対策シンポジウム，大分市，2010.9
大分県内の自殺の現状-自殺を減らすためにわたしたちにできること，大分県南部保健所平成22年度自殺・うつ対策支援ネットワーク会議，佐伯市，2010.9
生産性向上につながる職場での心の健康づくり，大分県商工労働部・中部地域労働講座，大分市，2010.10
こころの健康づくり～高齢者の自殺予防について，平成22年度第7回竹田市高齢者大学，竹田市，2010.12
大切な睡眠-心とからだのために，臼津あけぼの会学習会，津久見市，2011.1
自殺予防と事後対策，大分産業保健推進センター第21階衛生管理者・安全衛生担当者・事業主等研修会，大分市，2011.1
老健施設職員のメンタルヘルス，大分県老人保健施設協会研修会，大分市，2011.2
職場におけるメンタルヘルス，玖珠町メンタルヘルス講座（陸上自衛隊玖珠駐屯地管理者研修），玖珠町，2011.2
自殺予防対策の推進方法，日出町自殺予防対策推進のための保健師学習会，日出町，2011.2
- 河野 梢子 フィジカルアセスメント，平成22年度大分県看護協会研修会 ジェネラリスト I，大分市，2010.8

- 桑野 紀子 大分県立看護科学大学の紹介，進路ガイダンス（高校生対象説明会），宇佐市，2010.10
- 坂口 隆之 情報テクノロジー，大分県看護協会認定看護管理者（セカンドレベル）教育課程，大分市，2010.10
- 桜井 礼子 大学の教育課程，大分県看護協会 臨床実習指導者講習会，大分市，2010.5
「看護とは」-人と人のかかわりの中で-，大分鶴崎高校模擬授業，大分市，2010.9
看護師の役割拡大と診療看護師（NP）・特定看護師（仮称），赤十字医療施設九州ブロック看護部長会，大分市，2010.10
情報テクノロジー 看護管理に活かす情報とは，大分県看護協会セカンドレベル教育課程，大分市，2010.10
看護管理研究の活用-看護組織論-，大分県看護協会セカンドレベル教育課程，大分市，2010.11
- 定金 香里 色が変わる不思議なブーケ，大分県理科・化学懇談会主催 「夏休み子供サイエンス2010」，大分市，2010.8
- 佐藤 みつよ 簡単な理科実験，大分県立看護科学大学若葉祭公開講座，大分市，2010.5
- 佐藤 弥生 訪問看護過程，平成22年度訪問看護研修ステップ1，大分市，2010.6
地域の暮らしを豊かにする看護専門職 知っていますか？訪問看護，大分県立看護科学大学公開講座，大分市，2010.7
在宅における医療ケアについて，平成22年度サービス提供責任者研修，大分市，2010.11
看護に期待するもの，平成22年度在宅看護推進研修会，大分市，2010.12
- 品川 佳満 看護研究の基礎，西別府病院看護部看護研究研修，別府市，2010.4
データ解析入門，鹿児島大学医学部保健学科公開講座，鹿児島県，2010.7
情報テクノロジー，大分県看護協会認定看護管理者（セカンドレベル）教育課程，大分市，2010.10
- 関根 剛 不祥事の防止について，県教育委員会県立学校長会議，大分市，2010.4
部下の行動心理講座，県職員研修マネージメント研修（新任所属長対象），大分市，2010.4
自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2010.4
面接技術，大分県看護協会訪問看護ステップ1，大分市，2010.5
スーパーバイザー，大分いのちの電話，大分市，2010.5
カウンセリングの理論と実際（1），大分いのちの電話相談員養成講座，大分市，2010.5
自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2010.5
人間関係とメンタルヘルス，日本学校教育相談学会大分県支部学習会，別府市，2010.5
カウンセリングの原理と実際，大分県看護協会研修会，大分市，2010.6
部下の行動心理講座，県職員研修新任班統括，大分市，2010.6
不祥事の防止について-心理学の観点から-，大分県教育センター管理職リーダーシップ研修，大分市，2010.6
こころの健康づくり-笑顔、相談、自殺予防-，別府市こころの健康づくり研修会（南部地区公民館），別府市，2010.6
こころの健康づくり-笑顔、相談、自殺予防-，別府市こころの健康づくり研修会（南部地区公民館），別府市，2010.6
こころの健康づくり-笑顔、相談、自殺予防-，別府市こころの健康づくり研修会（のぐちふれあい公衆センター），別府市，2010.6

犯罪被害者支援とは何か，紀の国被害者支援センターボランティア養成講座，和歌山県，2010.6
 支援マニュアルの作成，紀の国被害者支援センター直接支援員継続研修，和歌山県，2010.6
 相談対応の基本，大分県警察学校研修会，大分市，2010.6
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2010.6
 新人看護職員臨床研修に関わる看護職員のメンタルサポート，大分県新人看護職員研修責任者研修，大分市，2010.7
 相談できる関係づくり-うまくボタンをかけるには-，別府市保健医療課 傾聴研修会，別府市，2010.7
 苦情への対処：メンタルヘルス，中津商業高校研修会，中津市，2010.7
 こころの健康づくり-笑顔、相談、自殺予防-，別府市こころの健康づくり研修会（北部地区公民館），別府市，2010.7
 こころの健康づくり-笑顔、相談、自殺予防-，別府市こころの健康づくり研修会（レセプションホール），別府市，2010.7
 支援者の自己理解，紀の国被害者支援センターボランティア養成講座，和歌山県，2010.7
 自分に気づく演習，紀の国被害者支援センターボランティア養成講座，和歌山県，2010.7
 カウンセリングスキルの基礎，山口被害者支援センター ボランティア養成講座，山口県，2010.7
 支援者のストレスとサポート，山口被害者支援センター ボランティア養成講座，山口県，2010.7
 迎合しやすい人への取調の留意点，大分県警本部研修会，大分市，2010.7
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター，大分市，2010.7
 補助業務と指揮業務，第5回全国C R T連絡協議会（こころの緊急支援活動研修会），別府市，2010.8
 スクール・セクハラの影響と具体的事例への対応，大分県スクール・セクハラ防止相談窓口担当者研修（佐伯・日田），大分市，2010.8
 スクール・セクハラの影響と具体的事例への対応，大分県スクール・セクハラ防止相談窓口担当者研修（中津・別府），大分市，2010.8
 スクール・セクハラの影響と具体的事例への対応，大分県スクール・セクハラ防止相談窓口担当者研修（大分・竹田），大分市，2010.8
 こころの健康づくり-笑顔、相談、自殺予防-，別府市こころの健康づくり研修会（社会福祉会館），別府市，2010.8
 自殺傾向の強いかけ手，鹿児島いのちの電話 分科会，鹿児島県，2010.8
 スーパーバイザー，大分いのちの電話，大分市，2010.8
 こころの健康づくり-笑顔、相談、自殺予防-，別府市こころの健康づくり研修会（大平山地区），別府市，2010.8
 こころの健康づくり-笑顔、相談、自殺予防-，別府市こころの健康づくり研修会（市役所），別府市，2010.8
 うつ、自殺念慮者に対する相談，弁護士会 うつ自殺の相談のあり方，大分市，2010.8
 迎合傾向を有する人物の特性および対応，大分県警察署員教養研修（豊後大野警察署），豊後大野市，2010.8
 迎合傾向を有する人物の特性および対応，大分県警察署員教養研修（大分中央警察署），大分市，2010.8
 同行支援プランの作成，全国被害者支援ネットワーク九州沖縄地区ブロック研修，鹿児島県，2010.8
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2010.8
 コミュニケーション技法，日出町福祉対策課 コミュニケーション技法研修会，日出町，2010.9
 自殺のサインに気づいてつなごう/こころに寄り添う聴き方について，豊後大野市自殺講演，豊後大野市，2010.9
 被害者を支援するための制度，紀の国被害者支援センター研修会，和歌山県，2010.9
 日常生活支援の方法，紀の国被害者支援センター研修会，和歌山県，2010.9
 迎合傾向を有する人物の特性および対応，大分県警察署員教養研修（宇佐警察署），宇佐市，2010.9
 性犯罪被害者の心理，県警被害者の支援と被害者支援要領，大分市，2010.9

犯罪被害者等施策における地方公共団体の役割，内閣府犯罪被害者等施策研修会（滋賀），大津市，2010.9
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター，大分市，2010.9
 聴くということ・ロールプレイ，大分チャイルドライン聴き手養成講座，大分市，2010.10
 新人看護職員臨床研修に関わる看護職員のメンタルサポート，大分県新人看護職員研修責任者研修，大分市，2010.10
 効果的なカンファレンスの進め方，別府市介護職員研修会，別府市，2010.10
 コミュニケーションスキルと認知行動療法的な生活習慣改善，大分民医連看護委員会看護介護活動交流集会，大分市，2010.10
 自殺傾向の強いかけ手，大分いのちの電話継続研修会，大分市，2010.10
 分科会1-4：NNVSカリキュラムの各センターでの実施と留意点，全国被害者支援研修会，東京都，2010.10
 分科会2-4：各センターの広報啓発などの状況，全国被害者支援研修会，東京都，2010.10
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2010.10
 学校における危機管理，私立中学高等学校事務職員研修会，大分市，2010.11
 被害者の支援（リスニング技術、心理教育、ロールプレイ），紀の国被害者支援センター研修会，和歌山県，2010.11
 被害者の支援自助グループの意義，紀の国被害者支援センター研修会，和歌山県，2010.11
 犯罪被害者等施策における地方公共団体の役割，内閣府犯罪被害者等施策研修会（熊本），熊本県，2010.11
 育成の技術，全国被害者支援ネットワーク東海北陸地区ブロック研修会，三重県，2010.11
 被害者をとりまく状況，大分被害者支援センターボランティア養成講座，大分市，2010.11
 パネルディスカッション「犯罪被害者の現状と支援のための連携について」パネリスト，「犯罪被害者週間」国民のつどい和歌山大会，和歌山県，2010.11
 こころの健康づくり-人生にはストレスがいっぱい-，別府市保健センターオープン記念事業：こころの健康づくり講演会，別府市，2010.12
 心理・行動的に不適應な状態にある方への対人援助の技法，特別支援学校校内研修支援（大分県立盲学校），大分市，2010.12
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2010.12
 被害者の心情，大分刑務所 ゲストスピーカー，大分市，2011.1
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2011.1
 スーパービジョン，大分いのちの電話，大分市，2011.1
 犯罪被害者等施策における地方公共団体の役割，内閣府 犯罪被害者等施策研修会（和歌山），和歌山県，2011.1
 ナントカしたいを、ドウニカしよう，豊肥保健所地域保健課研修会，豊後大野市，2011.1
 自殺の現状と対策/自殺予防とこころの健康，臼杵市自殺予防ゲートキーパー養成研修会，臼杵市，2011.1
 こころの健康づくり-日常の小さな悩みへの相談-，自殺予防対策講習会，津久見市，2011.1
 こころの健康と自殺予防のために地域でできること，臼杵市自殺予防ゲートキーパー養成研修会，臼杵市，2011.2
 小さな関わりが身近な人を守る，津久見市自殺対策講演会，津久見市，2011.2
 こころの健康と自殺予防のために地域でできること，臼杵市自殺予防ゲートキーパー養成研修会（夜間），臼杵市，2011.2
 オリエンテーション，全国被害者支援ネットワーク コーディネーター研修，東京都，2011.2
 他団体におけるSV・講師実施の留意点，全国被害者支援ネットワークコーディネーター研修，東京都，2011.2
 他団体との共同支援活動（1）講義，全国被害者支援ネットワークコーディネーター研修，東京都，2011.2
 他団体との共同支援活動（2）討議・シュミレーション，全国被害者支援ネットワークコーディネーター研修，東京都，2011.2

- 他団体との共同支援活動（3）発表，全国被害者支援ネットワークコーディネーター研修，東京都，2011.2
 全体討議，全国被害者支援ネットワークコーディネーター研修，東京都，2011.2
 総括・グループワーク，全国被害者支援ネットワークコーディネーター研修，東京都，2011.2
 被害者への支援（1），佐賀県警察本部「社会全体で被害者を支える街づくり事業：被害者支援サポーター養成講座（初級）」，佐賀県，2011.2
 育成の技術，全国被害者支援ネットワーク九州沖縄地区ブロック研修会，鹿児島県，2011.2
 被害者の心情，大分刑務所被害者の心情ゲストスピーカー，大分市，2011.2
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2011.2
 犯罪被害者の気持ち，立ちなおるといふこと，大分少年院「つぐないの気持ちを育む指導」，大分市，2011.2
 初回面接の進め方と支援員としての心構え，新潟被害者支援センター継続研修会，新潟県，2011.2
 被害者支援の倫理，とやま被害者支援センター継続研修会，富山県，2011.2
 自助グループ・ファシリテーター，大分被害者支援センター研修会，大分市，2011.3
 電話相談と裁判同行の基本的な対応（チームとしての支援），かごしま犯罪被害者支援センター継続研修会，鹿児島県，2011.3
 事例検討会，九州地方更生保護委員会事例検討会，福岡県，2011.3
- 高波 利恵**
 従業員の健康と会社の業績の関係，第51期経営報告会，福岡県，2010.6
 看護の魅力，大分雄城台高校出前授業，大分市，2010.7
 第20回研究発表会講評，別府市看護職研修会，別府市，2011.2
- 高野 政子**
 朝のお日さまは元気の源-子どもの食について-，大分市保育部会南部地区研修会，大分市，2010.4
 小児の応急手当，全国心臓病の子どもを守る会-小児救急法講習会-，大分市，2010.5
 高齢化社会における小児医療の重要性，中津北高校出前授業，中津市，2010.6
 実習指導の実際-小児看護学-，大分県看護協会実習指導者講習会，大分市，2010.6
 予防接種の正しい理解，大分市保育部会南部地区研修会，大分市，2010.7
 「たんの吸引の基礎」「たんの吸引の実際」，平成22年度第2回医療的ケア研修，大分市，2010.8
 「経管栄養の基礎」「経管栄養の実際」，平成22年度第3回医療的ケア研修，大分市，2010.8
 障がい児の経管栄養の基礎と実際，大分支援学校医療的ケアに関する研修会，大分市，2010.8
 保育所における看護と健康管理，平成22年度保育所健康・安全保育研修会，大分市，2010.9
 超高齢社会における小児医療・看護の重要性，大分県立竹田高校模擬授業，竹田市，2010.11
- 田中 美樹**
 「たんの吸引の基礎」「たんの吸引の実際」，平成22年度第2回医療的ケア研修，大分市，2010.8
 「経管栄養の基礎」「経管栄養の実際」，平成22年度第3回医療的ケア研修，大分市，2010.8
 小児訪問看護の充実に向けて，平成22年度大分県小児在宅ケア研修会，大分市，2010.12
- 田中 佳子**
 フィジカルアセスメント，平成22年度大分県看護協会研修会ジェネラリスト1，大分市，2010.8
- 藤内 美保**
 フィジカルアセスメント，大分看護協会看護力再開発講習会，大分市，2010.4

NANDA看護診断，大分県立病院看護部研修会，大分市，2010.5
 フィジカルアセスメント，大分看護協会看護力再開発講習会，大分市，2010.5
 フィジカルアセスメント 基本技術・医療面接，大分岡病院研修会，大分市，2010.5
 フィジカルアセスメント，大分赤十字病院新人看護師研修会，大分市，2010.6
 実習指導計画・指導案，大分県看護協会指導者研修会，大分市，2010.6
 フィジカルアセスメント 呼吸器系，大分岡病院研修会，大分市，2010.6
 フィジカルアセスメント，永富脳外科病院看護師研修会，大分市，2010.6
 フィジカルアセスメント 循環器系，大分岡病院研修会，大分市，2010.6
 NANDA看護診断，大分県立病院看護部研修会，大分市，2010.6
 研究の基礎（質的研究），大分県看護協会研究研修会，大分市，2010.7
 フィジカルアセスメント，大分赤十字病院看護師研修会，大分市，2010.7
 NANDA看護診断，大分県立病院看護部研修会，大分市，2010.7
 フィジカルアセスメント，別府リハビリテーションセンター看護師研修会，別府市，
 2010.7
 フィジカルアセスメント，大分県看護協会看護実践研修会，大分市，2010.8
 フィジカルアセスメント 消化器系，大分岡病院研修会，大分市，2010.8
 フィジカルアセスメント，別府医師会看護職研修会，別府市，2010.9
 フィジカルアセスメント 神経系，大分岡病院研修会，大分市，2010.10
 フィジカルアセスメント 運動器系，大分岡病院研修会，大分市，2010.11
 フィジカルアセスメントフィジカルアセスメント，大分中村病院看護師研修会，大分市，
 2010.12
 看護教員及び病院看護職員交流会 看護大学の立場から，大分県看護協会，大分市，
 2010.12
 NANDA看護診断，三愛メディカル病院看護師研修会，大分市，2010.12

林 猪都子

助産師教育課程，平成22年度大分県看護協会実習指導者講習会，大分市，2010.5
 性教育，大切な命をつないで，大分市，2010.6
 第2次性徴，性教育，大分市，2010.10

伴 信彦

医療放射線のリスク，宮崎大学医学部附属病院放射線教育訓練，宮崎県，2010.6
 医療放射線のリスクを考える，第167回大分県放射線科医の会，大分市，2010.7
 診断放射線のリスクを考える，大分赤十字病院放射線診療従事者教育訓練，大分市，
 2010.7
 論文の書き方，大分県看護協会認定看護管理者制度セカンドレベル教育課程，大分市，
 2010.9
 小論文の書き方，大分県看護協会平成22年度准看護師研修会，大分市，2010.10

平野 亙

福祉における権利擁護 ー権利としての自立，大分県社会福祉介護研修センター県・市町
 村福祉担当新任職員研修会，大分市，2010.5
 福祉・介護サービス利用者の権利としての苦情解決，日出町介護支援専門員協議会研修，
 日出町，2010.5
 人が人として生きるために ～医療・介護と患者の権利，大分県消費生活・男女共同参画
 プラザ「アイネス消費者ウィーク2010」特別啓発講座，大分市，2010.5
 発達障がい児の未来のために ～専門職に寄せる親の願い～，大分県平成22年度発達障が
 い者支援専門員養成研修，大分市，2010.6
 安全教育とリスク・マネジメント，大分県看護協会保健師・助産師・看護師実習指導者講
 習会特別講演，大分市，2010.6
 訪問看護における患者の権利と意思決定の支援，大分県看護協会平成22年度訪問看護基礎
 研修，大分市，2010.7
 発達障がいのある子どもの理解と支援，大分県立日田支援学校特別支援学校教育研修会，
 日田市，2010.7
 学校と保護者の連携 ～発達障がいのある子どもの支援，大分県教育センター平成22年度
 特別支援教育コーディネーター専門研修，大分市，2010.8

- 子どもたちの生きる力を育てるために ～発達障がい児の特性理解と支援, 大分市立長浜小学校教育講演会, 大分市, 2010.8
- 発達障がいのある子どもの理解と支援, 大分県立南石垣支援学校特別支援教育研修会, 別府市, 2010.8
- 発達障がい児を理解する ～親の立場で見えてきたこと, 佐伯私立保育会研修会, 佐伯市, 2010.8
- 発達障がい児の理解と支援, 大分市鶴崎校区特別支援教育研修会, 大分市, 2010.8
- 発達障がい児の特性と課題への対応 ～保護者の立場から～, 大分市中教研北部・西部地区特別支援教育部研修, 大分市, 2010.8
- 地域活動・健康づくりにおけるボランティアの意味, 佐伯市ヘルスアップ推進員学習会, 佐伯市, 2010.9
- 介護・福祉サービスにおける利用者の権利擁護と苦情手続, NPO法人患者の権利オンブズマン2010年度患者(利用者)アドボカシー研修講座, 福岡県, 2010.9
- 介護の倫理 人間の尊厳そして利用者の権利, 大分県老人福祉施設協議会平成22年度第1回介護職員研修会, 大分市, 2010.9
- 地域で支えるいのちとくらし, 大分南部公民館出張講座(鴛野校区公民館), 大分市, 2010.10
- 発達障がい児の理解と支援 ～特別支援教育における教頭の役割, 平成22年度竹田市教頭会人権研修会, 竹田市, 2010.10
- 福祉サービス利用者の権利, NPO法人成年後見・権利擁護大分ネット「苦情・トラブル解決のためのスキルアップ研修」, 大分市, 2010.11
- 権利保障の方法, NPO法人成年後見・権利擁護大分ネット「苦情・トラブル解決のためのスキルアップ研修」, 大分市, 2010.11
- 医療・介護と利用者の権利 ～一人ひとりが主人公であるために, 大分県消費者団体連絡協議会「地域消費者フォーラム」, 臼杵市, 2010.11
- 自閉症スペクトラムの特性と歯科診療上の課題, 大分県歯科医師会第2回障がい者歯科保健シンポジウム, 大分市, 2011.1
- 福祉・介護の苦情解決 その意義とあり方, 大分県社会福祉協議会 平成22年度福祉サービス苦情解決事業研修会, 大分市, 2011.1
- 医療・介護と利用者の権利 ～一人ひとりが主人公であるために, 大分県消費者団体連絡協議会「地域消費者フォーラム」, 由布市, 2011.1
- 子どもたちの生きる力を育てるために ～発達障がい児の特性理解と支援, 中津市立北部小学校PTA人権講演会, 中津市, 2011.1
- 苦情から学ぶ, 別府市介護支援専門員協会研修会, 別府市, 2011.3
- 福田 広美** ナースプラクティショナー養成について, 日本看護図書館協会2010年度第41回研究会, 熊本県, 2010.8
- 院内研究の進め方, 大分赤十字病院院内研修会, 大分市, 2010.10
- 臨床実習指導のあり方, 大分赤十字病院院内研修会, 大分市, 2010.10
- 松本 初美** 「対象者の理解」, 大分県看護協会平成22年度第2回看護力再開発講習会, 大分市, 2010.10
- 「看護学を学びたい学生へ」, 山口県立下関中等学校進路指導・出前講義, 山口県, 2010.7
- 吉村 匠平** セーフティネットとしての関係作り, アルメイダ病院初年次研修(1回目), 大分市, 2010.7
- アルメイダ病院プリセプター研修, アルメイダ病院プリセプター研修, 大分市, 2010.7
- アルメイダ病院リーダー研修, アルメイダ病院リーダー研修, 大分市, 2010.7
- グループでの問題解決演習, アルメイダ病院初年次研修(2回目), 大分市, 2010.10
- つなぐ～つながるコミュニケーション体験, 社会福祉法人皆輪会保護者食育学習会, 福岡県, 2010.11
- 渡邊 寿子** 簡単な理科実験, 大分県立看護科学大学若葉祭公開講座, 大分市, 2010.5

研究指導	大分赤十字病院	福田 広美、定金 香里
	国立病院機構大分医療センター	高野 政子、岩崎 香子
	国立病院機構西別府病院	品川 佳満、江藤 真紀
	大分県立病院	石田 佳代子、関根 剛
	アルメイダ病院	秦 さと子、吉村 匠平
	大分健生病院	志賀 寿美代、薬師寺 綾

学会その他の役員等

赤星 琴美	大分市建築審査委員 大分市風俗関連営業建築物審議会委員
井伊 暢美	TEACCHプログラム研究会大分県支部
石岡 洋子	大分県看護協会 助産師職能委員会 副委員長 大分県母性衛生学会 幹事 事務局
石田 佳代子	中津ファビオラ看護学校 非常勤講師
伊東 朋子	大分県准看護師試験委員 日本ALS協会大分県支部理事
稲垣 敦	大分大学医学部非常勤講師 熊本大学教育学部非常勤講師 別府溝部学園短期大学非常勤講師 大分県スポーツ学会運営委員 Nスポーツ顧問 日本体育学会編集委員 日本体育測定評価学会常任理事・副理事長 日本体育測定評価学会将来検討委員長 日本体育測定評価学会研究助成委員 大分県運動機能向上専門部会委員
乾 つぶら	大分県母性衛生学会事務局庶務
岩崎 香子	腎性骨症 (ROD-21) 研究会幹事 日本骨粗鬆症学会評議員
梅野 貴恵	大分県母性衛生学会理事 (事務局副局長兼会計)
江藤 真紀	大分市地域包括支援センター運営協議会委員 大分市高齢者福祉計画及び第4期大分市介護保険事業計画策定委員 大分県介護保険審査委員
小嶋 光明	放射線影響学会評議員 京都大学放射線生物研究センター将来計画専門委員 若手放射線生物学研究会運営委員

- 小野 美喜 第41回日本看護学会 成人看護学会 I 抄録選考委員
大分県脳卒中懇話会世話人
- 甲斐 倫明 文部科学省放射線審議会委員
内閣府原子力安全委員会専門委員
独立行政法人放射線医学総合研究所客員研究員
日本歯科放射線学会防護委員会委員
独立行政法人日本原子力研究開発機構 原子力基礎工学研究・評価委員会 委員
経済産業省資源エネルギー庁総合資源エネルギー調査会臨時委員
日本医学放射線学会放射線防護委員会委員
国連科学委員会国内対応委員会委員
国際放射線防護委員会（ICRP）第4専門委員会委員
九州大学非常勤講師
日本リスク研究学会副会長・編集委員会委員長
文部科学省放射線審議会基本部会 部会長代理
人事院安全専門委員
独立行政法人日本原子力研究開発機構 国際放射線防護委員会技術基準等の整備運営委員会委員
- 影山 隆之 大分県地域福祉権利擁護事業契約締結審査会委員
大分県自殺対策連絡協議会副会長
日本学校メンタルヘルス学会運営委員
日本自殺予防学会理事・編集委員
豊後大野市自殺対策連絡協議会助言者
日本精神衛生学会常任理事・編集委員長
日本社会精神医学会評議員
- 河野 梢子 NPO法人ななせ生きがいクラブアドバイザー
- 佐伯 圭一郎 日本民族衛生学会評議員
生涯健康県おおいた21推進協議会幹事
大分県 県民生活見える化指標検討委員
- 桜井 礼子 大分地方労働審議会委員
大分県福祉審議会民生委員審査専門分科会委員
熊本保健医療大学認定看護師教育課程入試委員会委員
大分県看護協会認定看護管理者教育課程運営委員会委員
- 定金 香里 大分県理科・化学懇談会 幹事
大気環境学会誌 編集委員
- 佐藤 みつよ 別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師
- 品川 佳満 別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師
- 下田 浩 日本解剖学会学術評議員

関根 剛	消防庁緊急時メンタルサポートチーム メンバー 内閣府 民間被害者支援団体におけるボランティア養成研修（初級編）DVD教材作成協力者 大分県こころの緊急支援チーム メンバー 大分市男女共同参画審議会 会長 公益社団法人 大分被害者支援センター 理事 NPO全国被害者支援ネットワーク 理事 NPO全国被害者支援ネットワーク 支援活動検討委員会委員長代行 大分いのちの電話 スーパーバイザー 公益社団法人 紀の国被害者支援センター 評議員・相談員 内閣府 民間被害者支援団体におけるボランティア養成研修（初級編）DVD教材作成業務にかかわる技術審査会 審査員 大分県臨床心理士会 理事
関屋 伸子	平成22年度第33回大分県看護研究学会 実行委員 大分県看護協会教育委員会 教育委員長 大分県生涯健康県おおいた21喫煙対策部会委員
高波 利恵	大分事業所看護職研究会世話人 日本産業衛生学会代議員
高野 政子	日本看護研究学会九州・沖縄地方会役員 九州小児看護研究会幹事 大分県医療的ケア運営協議会委員 大分県小児保健協会副会長 理事
佐藤 弥生	大分県看護協会訪問看護推進協議会委員
田中 美樹	大分県看護協会ナースセンター事業運営委員
津隈 亜弥子	第7回大分丘の上病院スポーツデイ補助
藤内 美保	大分県医療費適正化推進協議会委員 第41回日本看護学会（成人Ⅰ）準備委員会委員および抄録選考委員 東京医療保健大学非常勤講師 ファイビオラ看護専門学校非常勤講師
林 猪都子	平成22年度大分県助産師確保連絡協議会委員 第7回 大分県母性衛生学会学術集会 実行委員 全国助産師教育協議会 九州・沖縄地区 第94回助産師国家試験出題問題検討会委員 大分県母性衛生学会 副会長（事務局長）
伴 信彦	厚生労働省 疾病・障害認定審査会 原子爆弾被爆者医療分科会 臨時委員 放射線影響協会 国際放射線防護調査検討委員会専門委員（IAEA/RASSC担当） 日本保健物理学会企画委員 国連科学委員会国内対応委員会委員 環境科学技術研究所 DNA修復関連遺伝子への低線量率放射線影響実験調査委員会委員 原子放射線の影響に関する国連科学委員会（UNSCEAR）57回会合 日本代表団アドバイザー 「放射線影響分野の安全研究の推進に関する調査」についての検討会メンバー 日本原子力技術協会 放射線防護検討委員会委員

樋口 幸	大分県母性衛生学会幹事 事務局
平野 亙	医療事故防止・患者安全推進学会 理事 福岡大学法科大学院非常勤講師 大分県発達障がい研究会 理事 大分県人権尊重社会づくり推進審議会 副会長 大分県地域・職域連携推進部会 委員 大分県特別支援連携協議会 委員 大分県発達障がい者支援センター連絡協議会 委員 大分県福祉サービス第三者評価事業推進組織 第三者評価基準等委員会 委員 大分県国民健康保険団体連合会 介護給付費審査委員会 委員 大分健生病院 倫理委員会 委員 九州大学病院 心臓移植外部評価委員
福田 広美	大分県看護協会実習指導者講習会運営委員 日本NP協議会NP資格認定試験WG
宮内 信治	大分県立芸術文化短期大学 非常勤講師
吉田 成一	東京理科大学薬学部客員准教授 日本アンドロロジー学会 評議員 精子形成・精巣毒性研究会 評議員 環境省PM毒性文献レビューワーキンググループ委員
吉村 匠平	学習障がい児等支援体制整備事業及び特別支援教育体制推進事業に係る専門家チーム委員
渡邊 寿子	別府医療センター附属 大分中央看護学校 非常勤講師

11 助成研究

石田 佳代子

看護師の身体診察技術を活用した災害時遺体対応能力の開発
日本学術振興会 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

黄砂の呼吸器疾患への影響調査と遺伝子解析によるアレルギーの増悪・感受性要因の解明
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (A)

市瀬 孝道、吉田 成一

黄砂感染症の健康影響評価を目指した実験的パイロットスタディ
日本学術振興会 科学研究費補助金 挑戦的萌芽研究

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

風送ダスト (黄砂・バイオエアロゾル) の飛来量実態解明に基づく予報モデルの精緻化と健康・植物生態影響評価に関する研究
平成22年度環境研究総合推進費

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

環境化学物質による発達期の神経系ならびに免疫系への影響におけるメカニズムの解明
平成22年度環境研究総合推進費

市瀬 孝道、吉田 成一、定金 香里

国東オリーブ事業を推進させる抗アレルギー食用油の開発
大分県農業共同組合国東

稲垣 敦

姫島発! あったかなむらづくり事業
老人保健事業推進費等補助金 (厚生労働省老人保健健康増進等事業)

岩崎 香子

分光手法を用いた骨組成変化の解析-骨強度寄与因子の探索-
日本腎臓財団

梅野 貴恵

更年期女性の授乳経験が更年期症状や脂質代謝、動脈硬化に及ぼす影響
日本更年期医学会JMS Bayer Schering Pharma Grant 研究助成金

江藤 真紀

高齢者の転倒発生に関わる視知覚と姿勢制御に影響する下肢筋力と柔軟性の検討
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

河野 梢子

院内感染の接触伝播に関する調査および感染管理のためのシミュレーションによる研究
文部科学省 科学研究費補助金 若手研究 (B)

坂口 隆之

非定常マルコフ空間点過程モデルにおける統計的推測
文部科学省 科学研究費補助金 若手研究 (B)

藤内 美保

チーム医療の推進における看護師等の役割拡大・専門性向上に関する研究
厚生労働科学研究費補助金 (地域医療基盤開発推進研究事業)

藤内 美保

生理学的・バイオメカニクスの視点から分析する効率的な力発揮の介助動作の開発
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

定金 香里

好乾性真菌がダニ抗原誘発性アトピー性皮膚炎の発症と増悪に及ぼす影響
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

下田 浩

リンパ管新生におけるアンジオポエチンの発現・機能解析とリンパ管誘導システムの開発
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

関根 剛

看護現場における犯罪被害者への対応の実態およびニーズの検討
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

高波 利恵

小規模事業所労働者に対する集団的健康増進活動の支援方法の検討とその評価
文部科学省 科学研究費補助金 若手研究 (B)

平野 互

患者の権利保障のための地域臨床倫理コンサルテーション・システム確立に関する研究
日本学術振興会 科学研究費補助金 基盤研究 (C)

福田 広美

外来化学療法を受ける乳がん患者の倦怠感マネジメントに向けたモニタリング指標の開発
文部科学省 科学研究費補助金 若手研究 (B)

吉田 成一

大気中の微小粒子 (CAPs) の胎仔期曝露が出生仔の肺のアレルギー増悪に与える影響
文部科学省 科学研究費補助金 若手研究 (B)

12 各種研究・研修派遣

塩月 成則

派遣先 New York University Graduate School of Nurse Practitioner, 41th Street General Medicine Clinic, New York University College of Nursing(NYUCN), NYU Langone Medical Center, NYUCN Mobile Health Van(Brooklyn International High School), NYUCN Faculty Practice (米国, ニューヨーク)
Washington DC Veterans' Affair Medical Center, Washington Hospital Center, Crestwood Pediatric Associates, Inova Fairfax Hospital, Minites Clinic (米国, ワシントンDC)

4月2日～4月11日、米国ニューヨークにてニューヨーク大学大学院Doctor of Nursing Practice(DNP)コース准教授のDr. Jamesetta Newland氏の下で、様々な施設におけるNurse Practitioner(NP)の診療見学、NPによる学校検診、夜間のNPコース大学院講義・演習・実習、NP大学教員による診療(Faculty Practice)の参加見学等の研修を行った。NP診療の守備範囲や処方、保健指導、思考過程、NP実習生の学習到達レベル等について、実際の診療を通して学ぶことができた。ニューヨークではNYUを中心にして日本におけるNP教育から診療の在り方まで示唆に富んだ研修となった。

4月11日～4月18日、米国ワシントンDCにて医療施設やWalk in Clinic、小児科クリニックなどにおけるNPによる診療の実際の参加見学および、American College of Nurse practitioner会長、Dr. Janet Selway、米国日本人NP緒方さやか先生からディスカッションを通じた研修を受けた。NP制度の成り立ちから政治的変遷、問題点や今後の展望、日本におけるNPの制度化の可能性について学ぶことができた。また、高度医療の現場におけるNPの専門分化とその独立性、専門性について学んだ。ワシントンDCではアメリカ医療の実際をNPという医療職の立場から俯瞰することができた。なお、本海外研修の報告会は、5月12日に行った。

桑野 紀子

派遣先 Royal College of Nursing, London South Bank University, Bournemouth University, Bromley-By-Bow Health Centre他複数Health Centre, SOHO Walk in Centre 他複数Walk in Centre, St. Thomas hospital 他(すべて英国、イングランド地方、ロンドン近郊)

7月23日～8月15日、英国イングランド地方に約3週間滞在し、英国のNurse Practitioner(以下NP)に関する調査および情報収集を行った。Royal College of Nursing(イギリス看護協会、以下RCN)のNP担当部門、RCNの認定を受けたNPコースを開講する大学を直接訪問し、職員や教員に対してNPの教育制度・資格認定要件等について聞き取り調査を実施し、NP関連の最新の情報を入手して研究資料とすることができた。また、現地で複数のWalk in Centre(ウォークインセンター、NPが中心となって運営するクリニック)、Health Centre、国立病院を訪問し、NPに対して業務内容等について聞き取り調査を実施した。併せてNPの診療、処方、保健指導、医師や他の医療職との連携の様子等も見学した。NP教育を担う側と現場で実際に活躍するNP双方から、じっくりと話を伺う機会が持てたことは視野を広げる貴重な体験となった。

また、Department of Health(保健省)、National Health Service(国民保健サービス)、Nursing and Midwifery Council(看護師助産師審議会)等関係諸機関のNPに関する情報源についても詳細な助言を得られたのは大きな収穫であった。なお、本海外研修の報告会は、8月30日に行った。

大賀 淳子

派遣先 青溪会駒木野病院、桜桂会犬山病院、山口県立こころの医療センター

研修期間：3月22日～3月30日

うつ病患者を対象として開発された認知行動療法は、平成22年度より診療報酬化され、看護師の関心も高く、実践も広がっている。本研修は、看護師のおこなう認知行動療法の意義と課題を検討することを目的として、先進的取り組みを行っている3施設において研修を行った。研修内容は、認知行動療法の実際の場面の見学、患者およびスタッフとのディスカッション、認知行動療法勉強会への参加などである。研修後の学内での報告は、4月5日に行った。

石田 佳代子

派遣先 独立行政法人国立病院機構災害医療センター、日本赤十字社武蔵野赤十字病院

研修期間：9月1日～9月3日、12月24日～12月25日

医療現場におけるフィジカルアセスメントの実際を学び、看護アセスメント能力を高めるための教育方法の検討に資することを主な目的とした。独立行政法人国立病院機構災害医療センターでは、外来における医師による基本的診察技法の活用場面を中心に見学し、多種多様な患者の訴えの中から、病態の判断に必要なデータ抽出を短時間で的確に行う問診技能や、科学的思考に基づく推論のしかたなどを学んだ。また、日本赤十字社武蔵野赤十字病院では、救命救急センターにおけるトリアージナースの活動場面を中心に見学し、看護師の五感を駆使したフィジカルアセスメントや臨床判断の重要性を確認できた。今回の国内研修の報告は、平成23年4月5日に行った。

猪俣 理恵

派遣先 齋藤助産院、湘南鎌倉総合病院、井本助産院、聖路加産科クリニック、済生会宇都宮病院バースセンター

研修期間：1月29日～2月11日

助産師外来・院内助産・助産院における助産援助の実際を学び、助産師による包括的ケア・実践能力を高めるために必要な教育について検討することを目的とした。湘南鎌倉病院、聖路加産科クリニック、済生会宇都宮病院では、各々異なる経過をとりながら、医師とは独立した形で助産師が責任を持って、妊婦健診から分娩、退院まで援助を行っており、その援助の一部を実施をさせていただいた。

また、湘南鎌倉病院と連携関係にある2つの助産院でも研修させていただき、患者搬送という連携の実際に立ち会い、円滑な連携について2施設の立場で学ぶことができた。

助産師外来における超音波や、分娩時の縫合、処方など、助産師の裁量権の拡大が検討されているが、すでにそれらを実践している助産師たちは、包括的援助の一部としてその重要性を認識していることを確認できた。今回の国内研修の報告は、平成23年4月5日に行った。

津隈 亜弥子

派遣先 京都メンタルケアアクション(ACT-K)

研修期間：2月18日

目的を「ACT (Assertive Communication Treatment) の実践の場において地域で精神障害者を支援するシステムの実際を学ぶ」とした。ACTの実践家よりACTの概要について説明を受けた後、精神障害者を地域で支援する苦慮や喜び、やりがいについてお聞きし、支援者の姿勢、教育者や学生に求めることなどについて、意見交換を行った。また、医師、看護師、精神保健福祉士、作業療法士等からなるカンファレンスに同席し、支援者としての態度について考える機会になった。今後は授業で、ACTや他職種の連携などについて学生に紹介し、看護職の立場でできることを考えてもらう予定である。なお、研修の詳細については、4月5日に報告会を行った。

薬師寺 綾

派遣先 独立行政法人 国立病院機構 九州がんセンター

研修期間：平成23年2月23日～3月3日

小児科病棟で小児がん看護の実際と治療や検査の現状、小児がんに対して施行される幹細胞移植の実際と看護を学ぶことを目的に国内研修を行った。主に造血幹細胞移植センターで研修を行い、小児がん（主に白血病）に対して行われている臍帯血移植施行前の看護、臍帯血移植施行後の看護について学んだ。造血幹細胞移植他職種カンファレンスにも参加し他職種間での連携、情報共有の実際について学ぶことができた。入院後早期から心理療法士が介入していたため患児や保護者、同胞の思い、心理面への介入に対しても学びを深めることができた。今回の国内研修の報告は、平成23年4月5日に行った。

13 学外研究者の受入

本学教員 市瀬 孝道

受入者 賀 森

所属：中国医科大学大学院博士課程

研究テーマ：環境中の様々なダストやナノ粒子の生体影響

受入期間：平成22年4月1日～平成23年3月31日

本学教員 甲斐 倫明

受入者 小野 孝二

所属：大分県立三重病院 放射線科

研究テーマ：「日本人ボクセルファントムによるCT診断時の臓器線量計算とWEBシステムの開発」

受入期間：平成22年4月1日～平成23年3月31日

本学教員 甲斐 倫明

受入者 和泉 志津恵

所属：大分大学工学部知能情報システム工学科 准教授

研究テーマ：低線量放射線の生体影響に関する実験データへの統計的手法の研究

受入期間：平成22年4月1日～平成23年3月31日

14 教職員名簿

1 専任教員

生体科学	教授	下田 浩	H22. 4. 1 採用
	准教授	安部 眞佐子	
	助教	岩崎 香子	
生体反応学	教授	市瀬 孝道	
	准教授	吉田 成一	
	助教	定金 香里	
健康運動学	教授	稲垣 敦	
	准教授	吉村 匠平	
	准教授	関根 剛	
人間関係学	非常勤助手	佐藤 みつよ	
	教授	甲斐 倫明	
	准教授	伴 信彦	
環境保健学	助教	小嶋 光明	H23. 3. 31 退職
	教授	佐伯 圭一郎	
	講師	品川 佳満	
健康情報科学	助教	坂口 隆之	
	教授	G. T. Shirley	
	准教授	宮内 信治	
言語学	非常勤助手	渡邊 寿子	H23. 3. 31 退職
	教授	志賀 壽美代	
	准教授	伊東 朋子	
基礎看護学	助教	秦 さと子	H23. 3. 31 退職
	助手	塩月 成則	
	臨時助手	神取 美恵子	
	臨時助手	栗林 好子	H23. 1. 4 採用
			H23. 3. 31 退職
看護アセスメント学	教授	藤内 美保	
	講師	石田 佳代子	
	助教	河野 梢子	
成人・老年看護学	助手	田中 佳子	
	准教授	小野 美喜	
	講師	松本 初美	
	講師	福田 広美	
	助教	井伊 暢美	
	助手	江月 優子	
小児看護学	助手	津留 英里佳	
	教授	高野 政子	
	講師	田中 美樹	
母性看護学・助産学	助手	足立 (薬師寺) 綾	H23. 3. 31 退職
	教授	林 猪都子	
	准教授	梅野 貴恵	
	講師	関屋 伸子	

	講師	乾 つぶら		H23. 3. 31	退職
	助手	石岡 洋子			
	助手	猪俣 理恵		H22. 4. 1	採用
	助手	樋口 幸			
精神看護学	教授	影山 隆之			
	講師	大賀 淳子			
	助手	津隈 亜弥子			
保健管理学	教授	草間 朋子			
	教授	桜井 礼子			
	准教授	平野 互			
	助教	高波 利恵			
	臨時助手	平木 和宏		H22. 5. 25	採用
				H23. 3. 31	退職
地域看護学	准教授	江藤 真紀			
	講師	赤星 琴美			
	助手	井ノ口 明美		H22. 4. 1	採用
				H23. 3. 31	退職
	臨時助手	麻生（下山） 優恵		H23. 3. 31	退職
国際看護学	教授	李 笑雨			
	助手	桑野 紀子			
看護研究交流センター	助手	佐藤 弥生			
	臨時助手	寺嶋 和子		H22. 8. 24	採用
				H23. 3. 31	退職

2-1 非常勤講師（学部）

日高 貢一郎	言語表現法
西 英久	哲学入門
劉 美貞	韓国語
大杉 至	社会学入門
二宮 孝富	法学入門
足立 恵理	文化人類学入門
宮本 修	音楽とこころ
澤田 佳孝	美術とこころ
福元 満治	保健医療ボランティア論
西園 晃	微生物免疫論
吉河 康二	看護と遺伝
戸高 佐枝子	母性看護援助論 I
谷口 一郎	母性生理・病態論
肥田木 孜	母性生理・病態論
堀永 孚郎	母性生理・病態論
上野 桂子	母性生理・病態論
西田 欣広	母性生理・病態論
	母性生理・病態論
宇津宮 隆史	助産診断・技術学Ⅲ
	母性生理・病態論
佐藤 昌司	助産診断・技術学Ⅲ

飯田 浩一	助産診断・技術学Ⅲ
後藤 清美	助産診断・技術学Ⅲ
豊福 一輝	助産診断・技術学Ⅲ
嶺 真一郎	助産診断・技術学Ⅲ
中村 聡	助産診断・技術学Ⅲ

2-2 非常勤講師（大学院）

伊東 弘樹	臨床薬理学特論
井上 敏郎	小児疾病特論
岩松 浩子	小児疾病特論
卜部 省悟	病態機能学特論
兒玉 雅明	老年アセスメント学演習
佐藤 昌司	助産学特論
須崎 友紀	老年薬理学演習
戸高 佐枝子	生殖看護学特論
森本 卓哉	老年薬理学演習
飯田 則利	小児疾病特論
岩永 知久	小児疾病特論
金谷 能明	小児疾病特論
松崎 忠史	老年薬理学演習
渡邊 めぐみ	助産学特論
福永 拙	小児疾病特論
石飛 裕和	診察・診断学特論
三重野 龍彦	診察・診断学特論
矢野 庄司	診察・診断学特論
林 良彦	診察・診断学特論
阿部 航	診察・診断学特論
吉岩 あおい	診察・診断学特論
糸永 一朗	診察・診断学特論
岡崎 敏郎	診察・診断学特論
森 照明	看護政策論
財前 博文	老年疾病特論
岩波 栄逸	診察・診断学特論
古川 雅英	老年疾病特論
佐藤 博	老年疾病特論
伊奈 啓輔	老年疾病特論
玉井 友治	小児疾病特論、診察・診断学特論
立川 洋一	老年アセスメント学演習
小寺 隆元	老年疾病特論
大濱 稔	老年疾病特論
麻生 哲郎	老年疾病特論
藤富 豊	老年疾病特論
山西 文子	看護管理学特論
竹下 泰	老年疾病特論
増井 玲子	老年疾病特論

鈴木 正義 診察・診断学
 宮成 美也 小児NP特論・老年NP特論
 宮崎 文子 看護教育特論

3 事務職員

	事務局長	安部 陽子		H23. 3. 30	転出
	統括部長	児玉 雅範		H22. 4. 1	転入
・経営企画グループ	課長補佐	錦戸 正		H22. 4. 1	転出
	副主幹	田崎 真佐恵		H22. 4. 1	転入
	主事	江本 華子		H22. 4. 1	転入
	事務職員	成安 恵美			
・財務グループ	主幹	久寿米木康裕		H22. 4. 1	転入
	副主幹	小玉 富瑞		H22. 4. 1	転入
	主事	中野 (小野) 麻梨子			
	事務職員	釘宮 裕和			
	事務職員	池邊 尚美			
	事務職員	吉野 真純		H22. 6. 30	退職
・教務学生グループ	課長補佐	柳井 幸雄			
	副主幹	徳永 一裕			
	主任	神崎 正太			
	保健師	菅野 信子			
	事務職員	岡本 香代			
	事務職員	神崎 純子		H22. 4. 1	採用
	事務職員	中垣 るる		H22. 4. 1	採用
・図書館管理グループ	非常勤職員	白川 裕子		H22. 4. 1	採用
	非常勤職員	中野 智子		H22. 4. 1	採用
	非常勤職員	大久保 圭		H23. 3. 31	退職